

争もまた絶えずその險を挟んで戦はれしなり。弘前市はこの平野の中心を爲し、市街整正、人烟稠密なり。この平野より見たる岩木山の秀姿は、頗る美なり。市より五所河原を経て鱒ヶ澤地方、及び十三湯地方に至るの路あり。汽車は弘前より南し、大鱒、碓ヶ關の二驛を経て秋田縣に入る。國境に近く、旅客は杉の林相の美なるを見るべし。

津輕平野 汽車、新城驛を経て大釋迦の停車場に入れば、渺茫たる津輕の平野はさながら畫くが如くその前に展開せられて、西北津輕郡に達する七段阪の丘陵は、遙かにその右方一帯の高所に隠見す。而して八面玲瓏たる岩木山の秀姿は、その長さ裾を平野に曳きて、眞に奥羽の名山たる名に負かず。然も平野は實に津輕爲信が覇を唱へたるの地、國內重要な生産地に推されて、萬頃の稻田は遠く連り、その間には地方特産物の名高き苹果園を點綴し、市邑の密度又頗る大なり。即ち重なる都邑に弘前市を始めとして、黒石、御所河原、木造等あり。岩木川はその間を西北に流れて、この平原を灌漑す。面積約一千餘平方軒、南々東より北々西にやゝ延長せり。

浪岡町 大釋迦の次驛を置き、青森へ二十哩、弘前へ九哩を隔つ。人口千餘を有する一小邑にして、黒石、御所河原、木造等への交通に衝る。商業盛なり。且つ地は南朝の

名臣北畠顯家の子顯季の據りて以て王事に勤めし所と言はれ、今にその城址を存せり。また、桓武帝の御宇、延暦十二年に坂上田村麿の建立せしと稱する浪岡八幡宮あり。

黒石町 浪岡の次驛、川部停車場の東約一里半にあり。浪岡より大鱒地方に通ずる街道これに通じ、また町の南方より弘前に通ずる道路もあり。弘前へ西稍南三里六町を隔つ。その地位八甲田山の餘脈の蜿蜒として津輕平野に臨める一角にあり、地勢高爽、旅客は奥羽北線の車窓よりも歴々としてその粉壁瓦葺を指點し得べし。町の人民凡そ七千二百、舊は津輕藩の支封にして、その城址を驛南に残せり。

黒石神社 黒石町字市の町にあり。縣社に列し、黒石藩祖津輕信英の靈を祀る。明治十二年これを創建し、社殿清酒、自ら神威の高きを思はしむ。地境また一帯の間阜に居り、老杉多く、域内に梅櫻を植ゆ。祭日は六月二十二日なり。

●温湯温泉 黒石町の南を流る、黒石川に沿ひて温湯、板留等の温泉場あり。浴戸數字を有すれども、不潔にして浴するに足らず。

●中野神社 下山形村字中野にあり。紅葉の勝地としてその名聞ゆ。

●猿賀神社 黒石町の西南一里餘、弘前市の東一里半ばかりにあり。今、縣社に列し、社邊に古木多く、池水澗澗たり。祭神は、仁徳帝の御宇、その靈魂大蛇と化して蝦夷を噬殺せしと傳ふる上毛君田道の靈を祀ると稱し、創建年代は詳かならざれども、大

同二年坂上田村麿再建、治承二年藤原秀衡重修と言へり。且つ津輕氏歴代の崇敬淺からざりしと言へば、彼の岩木山の本社と共に津輕地方崇尊無上の社祠なりしならん。

●大光寺城址 猿賀村の隣村大光寺村にあり。初め奥州大崎城主葛西氏の裔某此所に来りて、築城し、後、南部氏瀧本氏相繼いでこれに住せしが、慶長年間津輕爲信大軍を率ゐて瀧本に來攻し、城遂に陥る。爾來世津輕氏に屬せしが、後、黒石藩に於てその城樓を毀てり。

藤崎村は川部停車場に近く、黒石町より一里半餘を隔てたり。地に北條時頼の妾唐糸御前の遺跡あり。これより清淺にして急駛せる平川の流を渡れば、弘前市の瓦甃はさながら嵩

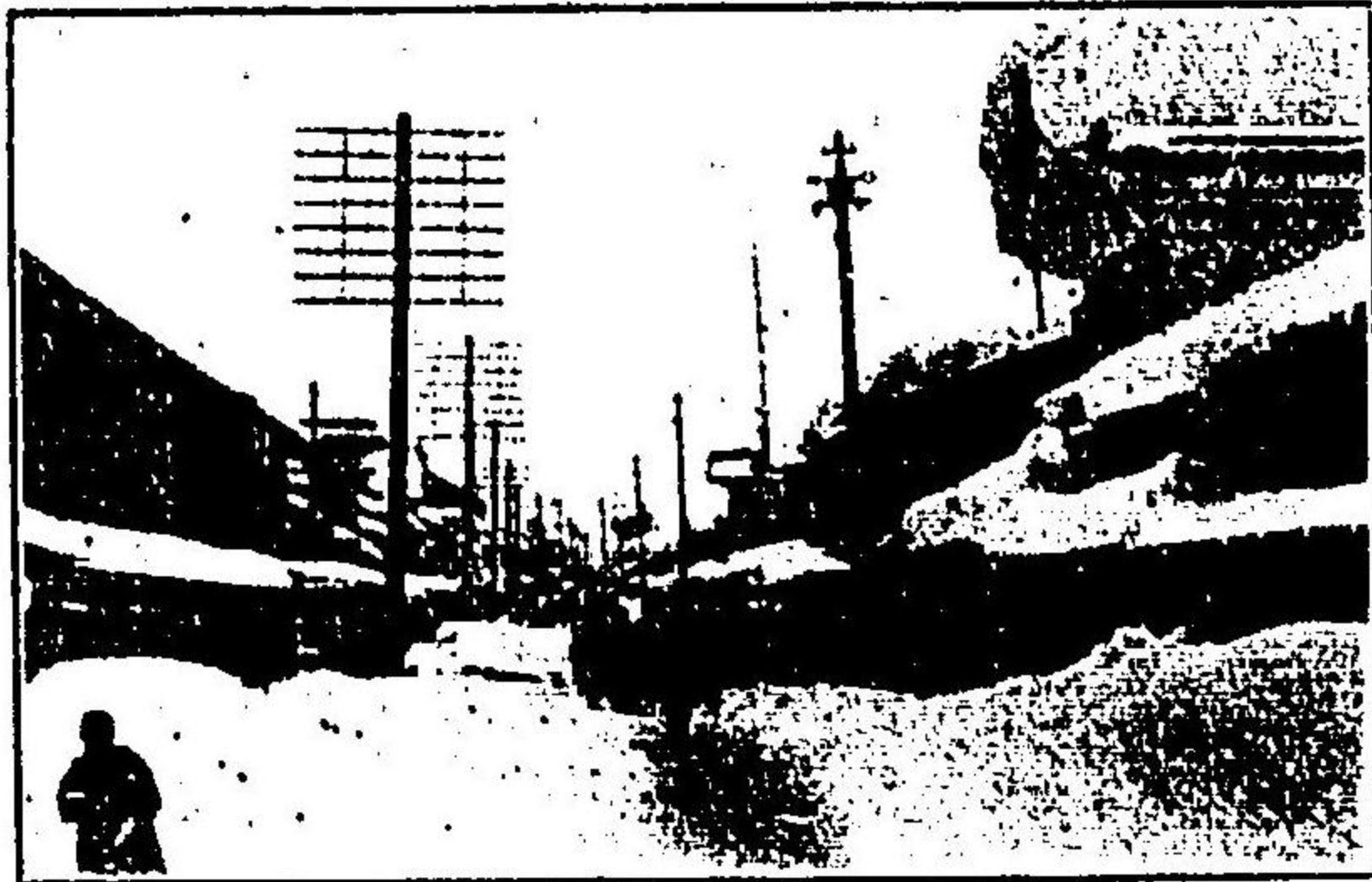
くが如くに平野の間に横れり。而も、その地勢の廣潤なる津輕一族のこの地に覇を唱へしも、まことに偶然にあらざるを知る。而して路傍苹果園の美しく紅き果實を聯れて、夕陽の光に反射せるが如き、また他には見るべからざるの特色なり。

●弘前市 今、民口三萬四千七百餘、廣袤東西三十四町

南北一里五町に亙り、地勢、東南北の三面は田園遠く展

け、西に岩木川の潺々としてこれを繞るあり。南に土淵川の通ずるあり、遙かに岩木山の翠微に對して、その形

狀恰も盛岡市の岩手山に於けるが如し。然も地は實に津輕氏歴代の城府として、慶長年間中興藩祖信牧のこの地に築きてより、その巍然たる白堊は長くこの平野に君臨せり。明治四年廢藩置縣の後



陸奥國

は頗に衰頹を來し、士族は各所に散落して、工商多く業を失ひ、縣廳また青森市に奪はれて一時は殆ど支うべがらざる衰境に沈淪せりしも、明治二十七年奥羽北線の開通せられ、續きて第八師團設置のことあり、爾來市は日に月に盛運に赴き、漸く昔日の盛觀を恢復するに至れり。市中尤も繁華なる街巷を本町、土手町、松森町通りとなし、本町は國道を一直線に、大圓寺の五重塔に通せり。土手町、松森町は即ち本町の一角を右に折れたる秋田街道にして、民屋櫛比、夏の夜は露肆の燈光燦々として雑沓を極む。諸公衛學校の重なるものには第八師團司令部、歩兵第三十一聯隊、同第五十二聯隊、野砲兵第八聯隊、輜重兵第八大隊、市役所、中津輕郡役所（清水村）警察署、區裁判所、第一中學校、第一高等女學校、東奥義塾等あり。社寺の重なるものには、長勝寺報恩寺、最勝院（大圓寺）、貞昌寺、八幡宮、東照宮、招魂社以下あり。遊廓は二、これを北横町、壽町の二所に置く。物産には津輕塗、苹果などあり。今、試みにこの地を青森に比較せんか、その商況の活潑なると、交通の至便なるとは青森に及ばざれども、市

街の比較的整頓せると、人口の多きとはその上にあり。蓋し、青森は新開地にして、



この地は數百年の古邑なるが故なるべし。民俗また一種の氣風を有し、所謂津輕氣質なるもの、猶この地に殘れるを見るべし。停車場は、市の東偏和徳に置く。青森へ二十三哩、秋田へ九十三哩なり。猶、道路には秋田街道を始めとして、東方黒石町に通ずるもの、西北方木造町に通ずるもの、鱒ヶ澤町に到るもの等あり。

弘前城址 弘前市の中央に屹立す。今猶松林鬱蒼たる間より壊殘の白壁の髣髴として隱見するさまを、ろに人をして封建時代の盛觀を追想せしむるものあり。牙城は石壁の高さ五丈餘、三重塹にして、八樓十二門を具し、

實に日本七名城の一たりしもの、明治四年陸軍省の用地に歸せしより、大方は崩壊せ

られ、今はたゞ追手、搦手、外東、内東、内南の五門と、牙城址の一樓とを剩すのみ。曩者、舊藩士等牙城の地を乞うて公園となし、その天守閣には、史前時代以後の古器物、武器等を陳列して、以て一種の歴史的博物館と成せり。而も、牙城の立つ所、遠く西方岩木山を望み、その秀である山色の美と、岩木川一帯の白蛇とは、實に限りなきの趣を呈して、また遊覽者をして佇立去るに忍びざらしむ。

大圓寺の五重塔 弘前市南本町通の盡頭にあり。寛文七年に建設したるもの、高さ七間餘郡内何れの地よりも是れを望むを得、大圓寺は今類廢して、又舊觀を見る能はずと雖も、此一帶の地市内に於ける一小公園の趣をなし、夏の夜は住民皆行きて涼を取り、ことに盆踊の盛なるは市中この境内を以て第一と爲す。

長勝寺 弘前市西茂森町に屬し、津輕地方曹洞宗の總本山にして、長勝の名は爲信の曾祖父光信の法諡長勝隆榮と云ふに取れりと。古杉樹陰森として路を夾み、高さ八間餘の山門の樓上には五百羅漢の像を安置せり。寺内にある大鐘は嘉元四年の鑄造にして南朝以來の古色を帯べり。

八幡宮 弘前市田町にあり。もと建經郡鼻和庄にありしを、慶長年間藩祖信牧のこの地に遷徙せしもの、近世、縣社に列し、毎歲八月十五日を以て大祭を執行す。

能野社 八幡宮と同所にあり。同じく縣社に列し、境内の景致佳なり。創建は崇神

帝の六十七年と稱し、延暦年間この地に徙し、本殿は慶長中津輕信牧の造營に係れり。

東照宮 弘前市笹森町に屬す。信牧の室の勸請したるものにして、寛永元年城内より今の地に遷座し、明治十四年縣社に列せしめらる。

第八師團司令部 弘前市の西南部清水村字富田にあり。第八師團は日清戰役後、軍備擴張の結果として新設せられたるものなり。

諸兵營 歩兵第三十一聯隊、同五十二聯隊、野砲兵第八聯隊、輜重兵第八大隊など、弘前の諸兵營は皆な市の南部にあり。

革秀寺 弘前市の西十餘町藤代村、岩木川の傍にあり。寺は慶長十三年の開基、

中に信牧の文津輕爲信の墓及び遺物等あり。

●津輕塗 弘前市及び東津輕郡造首に産す。支那風の漆器にして、若狭塗とほゞその特色を同うせり。起源は元祿十年池田源兵衛なるもの、發明にかゝり、藩主の保護を得て、始めて其基礎を定めたり。ことに、この源兵衛なるものは、江戸の大家青海勘七の門に入りて、青海波の漆畫を描くことに長じたりしかば、其の塗物も亦自からその影響を受けて、遂に今日の津輕塗なるもの、祖を爲すに至りしなり。其の塗法は若狭塗に酷肖し、數層の彩染を疊塗して、自然に雲形の花章を顯はすなど皆同じ。唯、金銀箔を用ゐざるを異なれりとするのみ。製品は家具、膳具の他、火桶、烟草盆等皆巧妙を極めざるなし。されど其の販路は未だ廣からず。纔かに好事者の賞玩にとどまれ

るは、比較的價の廉ならざるに由るなるべし。

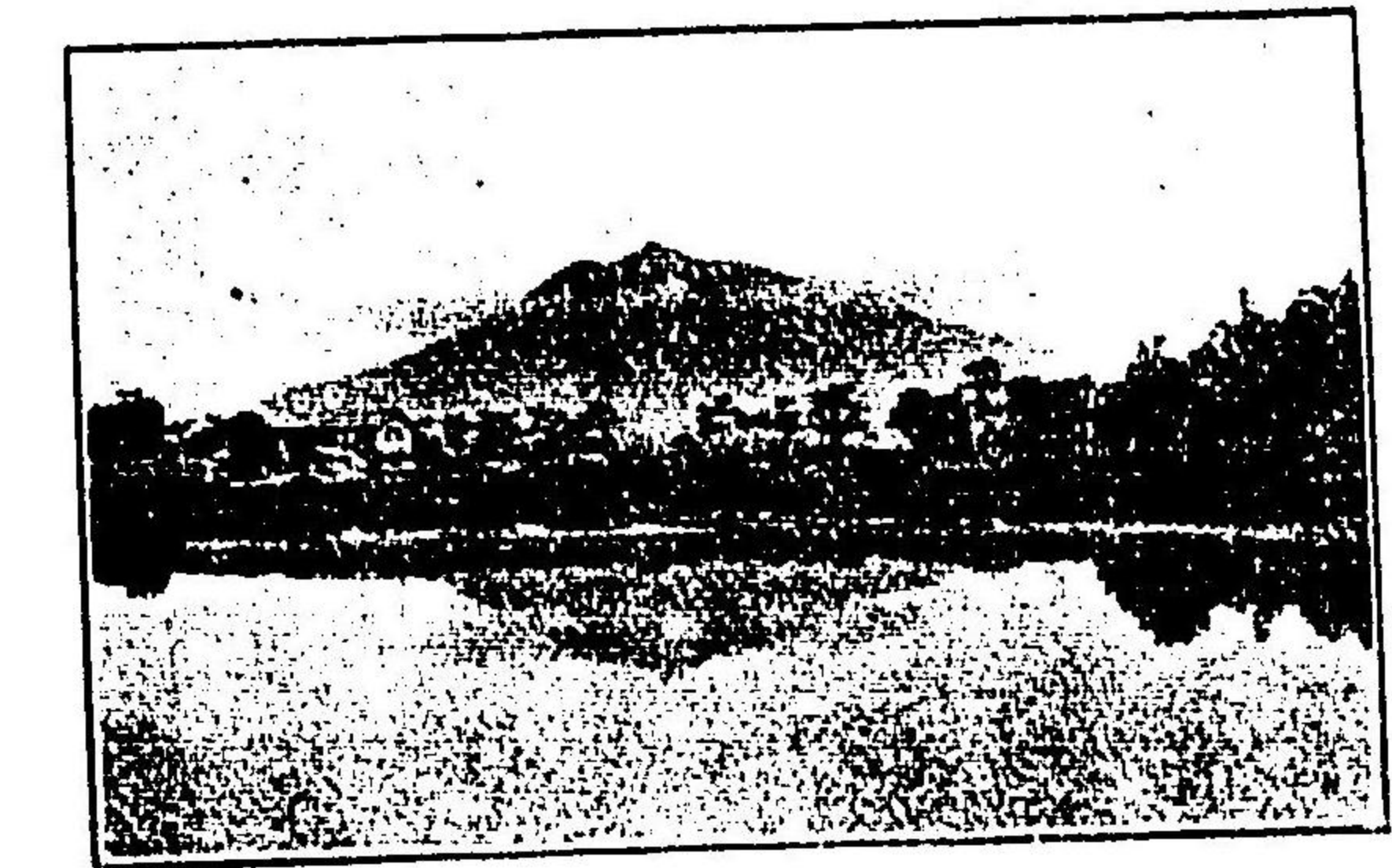
●高照神社 弘前市の西方百澤村神馬野にある縣社にして、天兒屋根命外三神を祭り、これに配するに津輕藩祖信牧の靈を以てす。境内は古杉枝を重ね、樽蒼として晝猶暗

く、且つ、その柱梁には皆な名工の彫刻を以てし、金彩燦然、甚だ壯麗を極めたり。現在の社殿は、本社、拜殿、神樂殿、寶藏、樓門等七八宇あり。

●岳の湯 岩木山の南麓常磐野にあり。弘前の西五里ばかりとす。温泉の湯壺一所、民家三四十戸、浴場の喧騒甚しといふ。

●岩木山(岩木山神社) 岩木山は東北著名の高山にして、形の似たるを以て、津輕富士の稱あり。岩木村外三村に屬し、西は西津輕郡、中村に跨り、海面を抜くこと千四百三十一米、其秀拔なる、眞に一名山たり。是を登らんとするには、先、岩木村大字百澤に至るをよしとす。百澤は則ち岩木山の東南麓にして、其地に岩木山神社あり。國幣小社にして、顯國魂神、多都比呂賣命、宇賀能賣命を祭り、延暦十五年の創建以來、安東家、北畠家、津輕家等の崇敬甚だ厚く、徳川歴代の將軍亦特に使を發して幣帛を捧げたり。樓門は高欄付の四方椽にして、丹堊の色頗る鮮に、これを入れれば神樂殿あり。それより惣黒塗にして鍍金の金具を打てる中門を過れば、朱塗の瑞籬左右に

連り、直ちに高さ五丈一尺、東西五丈五尺、南北五丈一尺、總朱塗なる拜殿に達す。



て三年毎には必らずこれを改造するを例とし、其間風雪の爲めに損所を生ずるも、之

岩を驚かす。蓋し、東北地方稀に見るところの好建築な
木 登路一里二十町、半腹より以上は岩石嵯峨として、熔
山 岩流の跡を存し、山勢峭拔、頗る峻峻なり。山頂には
岩木神社の本宮あり。白木造にして、極はめて小宇な
れども、其の用材は俗に所謂節無しの御用木なるものにして、一箇材は必らず一箇の扁柏生木を用ゆ。而し

れを修繕せずして必らずこれを改造す。南麓に數箇所の温泉あり。岳の湯最も著は
る。

日本山嶽志曰「津輕地方に二奇風あり。倭武多祭と「お山詣」と是なり。倭武多祭は今漸く衰ふ。獨り「お山詣」のみ益々盛んなり。お山は則ち岩木山神山をいふ。神社の下居宮は、弘前市の西三里、百澤村に鎮座す。國幣小社なり。下居宮より五十五町餘にして、岩木山頂の本社に達す。麓の宮は大國主神、大山祇神を祀る。社殿宏壯にして輪奐の美あり。喬樹長幹、森々として莖猶暗く「奥の日光」の稱あり。水亦清冽、堂宇は今や、荒廢すと雖、昔弘前藩主藏原信政、貞享三年より元祿七年に至り、十八萬兩の巨帑を抛ちて再建したるもの、山上の本詞は年々新材を以て修繕すと雖、風雪のため自ら巨大なる能はず、毎年陰曆六月朔日山上にこの小祠を建つ。里俗「お室を上げる」といふ。岩木山は陸奥の一名山、甚だ高からずと雖峻峻、土地の人は中途にして下山するものを「けだへ」と稱して、耻辱となす。本州の北端青森縣に入り、群峰を抜いて孤嶽すること、宛ら平野に在るが如くなるを仰げば、津輕富士の稱呼空しからざるを知るべし。土俗男子十五歳に達するを俟ちて、初めて登山せしめ、父母亦類に之を鼓舞するの風あり。概して十五歳より二十歳以下を初参りとす。登賽の期は陰曆八月朔日より同十五日に到る。一七日前より淨水に浴して、潔齋し、戒を守ること甚だ嚴、多くは前月の末日を以て百澤村に到達し、其夜山嶽に登りて八月朔日の日出を拜す。風俗頗る奇異なり。婦人は登山を許されず、下居宮にのみ詣で、歸るを常例とす。登賽者は、下居宮にて祈禱し、

社側の瀧に身を潔めて登山の路に就く。宮居より登ること十町許、鼻擦りの險に達す。峻絶して鼻梁を摩するが故に、名く。一里餘にして一大巨石あり、「姥石」と稱して、登業者之を靈物視し、手禱を奉納するもの多し。これより秋草離々として百花亂咲せる郊原を横絶して、「燒留り」に達す。山木跡をこゝに絶ちて、四望廣濶、一小丘の眼を遮るものなし。國中双眸の下に展鋪す。これより山路多少にして、谿谷に下り、蘚苔潺々の流水を交るところ、白雲徂徠し幽禽猶啼かず、寂寞として仙寰に入る。既にして巖石兀々として山中の最難所、頭僧溪（ホーゾコロハシ）に達す。一方、嶮巖聳立し、一方は谿谷深き千仞、近來鐵鎖を懸けて登攀に便す。其傍に活潑なる水を生ずるところを、錫杖瀉水といふ。三伏の夏と雖、涸ることなし。猶登ること二町餘にして、漸く溪淵を出で、路や、平坦、路傍に種蒔苗代と稱する瀝水あり。周圍二町餘、深き四尺、清水玻璃の如く湛ふ。一掬すれば齒牙も氷らんとす。それより一の坂、二の坂、三の坂を踰えて、山嶺に達す。この坂は峻絶にして、頂上より危石の顛墜することあり、最も注意を要す。岩木山は自然の三峰に岐れ、中峰と右峰との間に、「鳥の海」と稱する一大火坑址あり。坑中は累々たる燔岩を以て填充さる。坑上に一大石を挿む、「片倉石」といふ。高さ幾十丈、四五里より遠望するを得、想ふに中峰、右峰と分離したるとき殘留したる片石ならむ。山嶺より二華表を過ぎりて、本祠に達す。本祠は五尺四方の一小祠にして、内に一尺五寸位の銅製神體を安置す。登業者狂歡、祠屋を敲き、捧げ來りし神酒を神體の冠に注ぎ神餅を摩撫して、謂へらく、神明嘉納ありと。神酒と共に齋らし歸る。山嶺の廣濶は、五町四方内外、小祠の外、祈禱札授與所、及登業者休憩所あり。空氣寒冷、盛夏錦衣を重ぬるも、猶冷氣を感ずべし。眼を放てば、四周に千山萬

嶽の雜踏せるものを見ず、只八甲田、白神二山を伯仲の間に望むべく、南部地方は八戸港、並に其遠近の山河を踰えて、遙に陸前石巻、金華山を、雲烟の間に望む。青森灣頭の泊船、函館港の市街は平波と高低し、津輕の聚落は基子を散したる如く、鳥海山、酒田港、八耶瀉、亦爽朗の日に望み得べし。登山は六時間を費やせども、下山は僅に二時間を出でず。かくて下居宮に達し、禮拜して歸る。山中の五葉松は「雷除け」の靈符と稱して、求め歸るもの多し。（兩華山人の紀行に據）

弘前市の西南方に當り、長慶帝御陵參考地、清水觀音（弘前より三里、東目屋村の櫻庭にあり）、乳穂ヶ瀧（西目屋村字田代にあり。高さ十丈餘、冬期氷結の様奇觀といふ）、岩屋觀音（乳穂ヶ瀧の南方）等あり。更にその西稍南に暗門瀧あり。

長慶天皇御陵參考地 弘前より西三里許り相馬村大字紙漣澤の丘上にあり。俗に稱して、上皇堂といふ。長慶天皇の裔孫某修験道を修めて僧籍に入り、山上に常照院を營みて天皇の冥福を祈る。同院に秘藏する所の古記録中には歴史の遺漏を補ふに足る者あり。今之を摘録せんに天皇紀伊國玉川の宮を出させ給ひて、伊勢國多氣郡なる北畠氏の兵に頼りて、恢復を謀らせ給ふと雖も時到らずして果さず。潜かに聖躰を東國

にての箱根、伊香保なり。

阿闍羅山 大鰐停車場より南十五町許を隔つ。標高約三千二百二十尺、大鰐別六村に跨れり。山麓より登路凡そ二里、山頂高坦にして形ち机の如し。傳ていふ、往古巔きに一
千の精舎あり。又弘仁年間弘法大師此山に登りて佛法を弘め、山上に佛閣を建つ。正平
の末、南朝の群臣等長慶天皇を奉じて暫く跡を潜む。精舎及び行宮の遺趾今猶ほ存する
もの多しと。登臨すれば附近の山川、村落一眸の中に集まり、馳望千里風景真に畫圖
の如し。

古懸不動 大鰐停車場の東南一里ばかりにあり。寺を國上寺といふ。

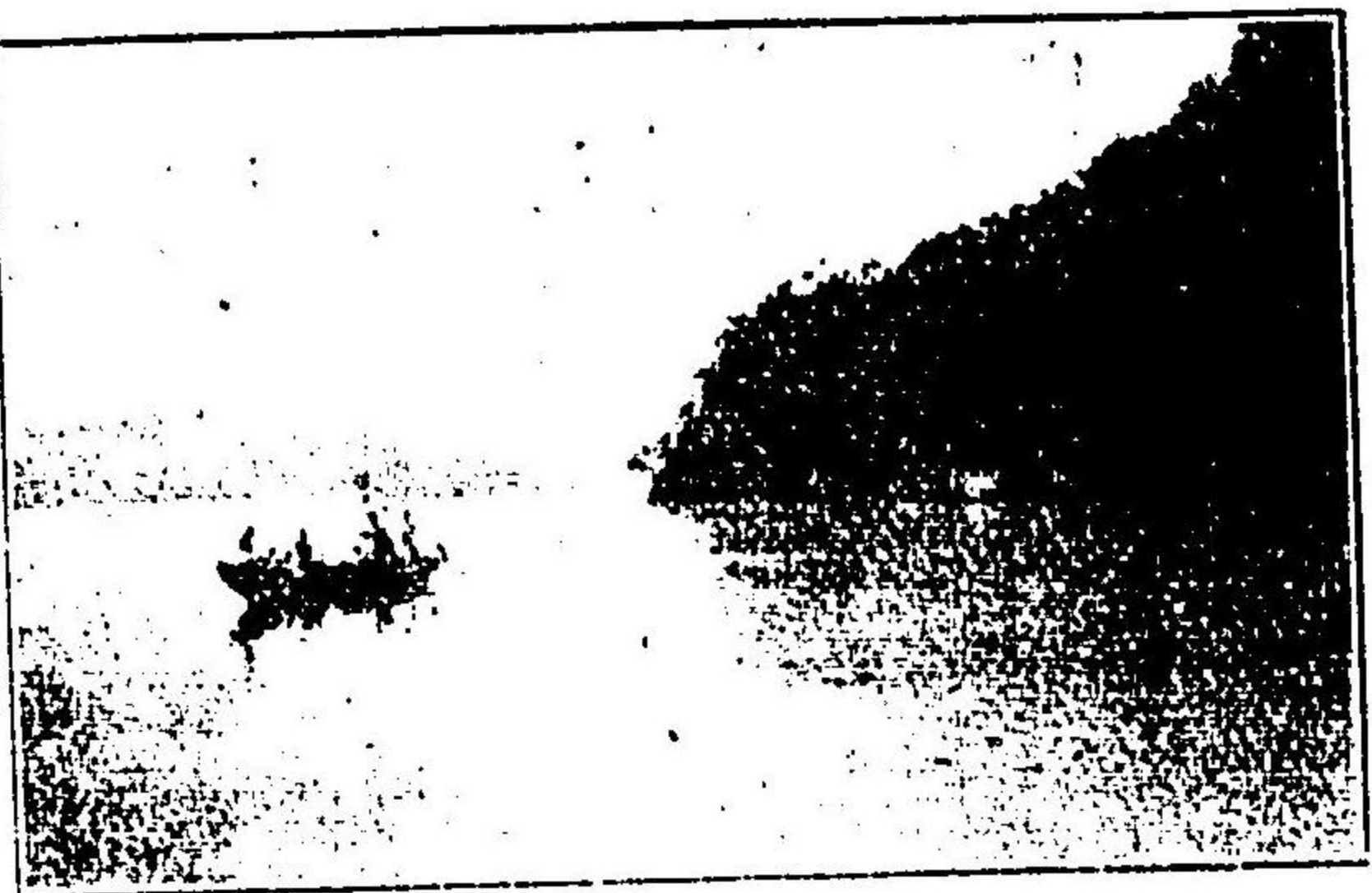
大鰐より西北に向へば、山嶺漸く相迫り、雲烟卷舒、翠嵐搖曳、汽車の行進甚だ遅々たり。大鰐の次驛碓ヶ
關は矢立嶺下の一小驛とす。

碓ヶ關村 地に温泉あり、平川に臨む。川田甕江、この地を記して曰く「碓ヶ關在山
間、比屋二百、驛外地盛、岩礫石縫、斜徑高低、與溪轉折、一橋已過、一橋復來、乍愕對

峙、頭載一線天、磐路入雲、螺旋而登八町、踰矢立嶺、則、峻坂、與趾急降、勢如轉
丸、昔者、弘前藩據險設寨、危岩嶮巖、溪間交錯、號爲四十八流。」碓ヶ關附近杉樹多し。

碓ヶ關驛より行くと一里餘、汽車は幾個の隧道を出入し、路傍國有林の甚だ蒼鬱たるを望み、遂に羽後との
國境に到る。即ち矢立峠なり。一巡廻記曰「上矢立嶺、老杉鬱々不見天日、斧斤之聲、遠近相答、踰絕頂、即
羽後之國、林木益々美し。」

十和田湖 一に十輪田、或は十灣田に作る。陸中鹿角及び陸奥上北郡に跨り、小坂
村より東北三里、陸奥法奥澤村字奥瀬より四里にして湖畔に達すべし。深山重疊の中
にありて、水面は海拔四百五十米に達し、距離二里餘と稱せらる。四邊を環擁せる高
山に花部山(九七六米)、十和田嶽、戸來嶽(九九〇米)等あり。北方は更に八甲田群山
の雄峻巍然として雲漢を摩せるあり。而して周圍の村落には、休屋、宇樽部、十灣田等
あり。西南、稍々平坦なるところを小國平と稱し、其の北に相阪川の源流を爲せる銚
子瀑あり。湖の周圍奇景に富み、恵比壽島、甲島、鏡島、種島、蓬萊島等あり。又御



門石なるものあり。巨大なる長方形の石、二個併立して、頭部を水面に顯はし、宛然

たる門狀を爲す。十和田神社はその岸にありて、惠比壽島より約二町餘を隔つ。社は甚だ小にして附近には古杉樹叢も小暗く叢生し、日光薄くして氣甚だ冷かなり。鐵鎖に縋り、鐵梯を傳ひて、數十仞の舊火口壁を下り舊火口たる中湖の沿岸に達すれば、所謂占所あり。其他湖畔に和井内某の養魚事務所あり。某はこの湖に魚介なきを憂ひて、多年辛苦の後漸く魚類の繁殖をつとめたるの年々多少の鱒を産出すと聞く。大日本地誌曰く「十和田湖の南岸の中湖は北方に向つて開く圓形の灣にして、蓋、往時の噴火口址なり。直徑約四軒に達し、その中央の水深は六十米を起ゆ。周圍は巖々たる絶壁にして、好く噴出物の累層外方に傾斜せる

を示し、數多の富士岩脈これを貫けるを見る。この湖山巒重疊の間にあれば通路は甚だ便ならず、西方弘前に達するもの、南方小坂鑛山より藤原村を経て來るもの、東方五戸よりするもの等何れも山澗の樵路にして、古木蒼鬱畫尙暗く、幽禽時に靜を破り、寂寞の氣人に逼り、轉た仙境の趣あり。殊に夏時は荆棘繁茂して細徑屢々絶えなむとし、溪流時に暴溢して橋梁落ち、纖弱の遊子往々之れに苦しむことあり。然れども路盡きて湖畔に出づれば、十和田、休屋、宇樽部の三村あり。相離れて南岸より西岸に散在し、何れも軒を連ぬること僅に十數、炊烟迷離、一面の明鏡と相對して頗る幽邃の趣を極む。若し夫れ扁舟を浮べて中山の岬端山越附近に至り、東方御藏山を望まむか、熔岩、火山灰、集塊岩の累層絶壁をなして水汀に起ち、暗緑の松樹側まに影を湖心に投じ、微風徐ろに動けば、藍緑の漣波交代して、十和田湖の好景恰もこの點に集れるもの、如く、土人これと呼びて色分けと稱し、肩を聳かして他郷の人に誇る。蓋し故なきにあらざるなり。また西畔七瀧村に十和田鑛山あり。小坂鑛山の（北四里餘）

の支山なれど目下は休坑中に屬せり。

○下北半島 長く青森灣に突出して、北海道渡島の地と相對す。此地は舊會津藩君臣

の維新後遷されたるところなり。地勢は北部及び中央部に山嶺綿互し、漸く傾斜して

海岸に連り、其沿海に港灣多く、南海は風波殊に靜穩なりと雖も、北方は津輕海峽に

面し、潮勢殊に急險なり。朝比奈嶽は半島中第一の高峰にして、その北に隣れるを恐

山火山と爲す。田名部町は半島第一の都邑にして、恐山及び大湊等の通路に衝れり。

半島を通ずる道路二、一は即ち野邊地町より有戸、横濱を経て田名部町に達し、更に

大湊を経て川内、脇野澤方面に到るものにして、他は小河原沼の西邊より來りて、出戸、

泊を過ぎ、小田野澤より左折して、田名部町に入り、更に北、又北西行して大畑より

下風呂、風間浦方面に達するものとす。

野邊地町は下北半島の咽喉に當る。これより田名部町まで十四里、その間に有戸(野邊地より三里)、横濱(有戸の北五里)などあり。有戸附近には瑪瑙他の石に混ざるもの、ある由、ある書に「有戸の海濱、美石を産す黄金の色を帯びて透通り、見事なること母衣月の舍利石よりも美しく、また小豆石、寶石もあり、中に他國に

はあらず。されど至極の邊鄙なる故に、人これを知らず一など載せたり。露伴氏の易心後語に曰く「野邊地より駕る朝早く馬にて立つ、乗つて見れば鞍の上にてさへ倦きるほどなり、左に絶えず海を眺めつ、茫々たる原中を歩まするに、蒼浦玫瑰遠く近くに咲き香ひ、さまざまの禽の歌ふ聲長閑く、立てる、坐れる、睡れる、當歳、二歳、三歳以上の馬どもの各がじい、自由に振舞へるも、我等が眼には新し。此邊すべて牧場にて道は即ち牧の中につきあるなれば、此牧、彼牧の境に到れば、桔槔の如き装置にて、明け放すとも自然と閉づるやうなしなる柵門ありて、必ず道を遮りなり、野馬共この中に居て、時には我が乗れる馬の後に跟き來るも不氣味のやうにて風流なり。玫瑰ははまなすと呼びて薔薇の類にやあるべき、此地の海岸に多き由は唯も知りたる草木育草などにも記しあり。花紅にして美しく、枝よりも俗ならず、實は紅熱せば食ふも可しとか、香水は如何して製すると問はるれば、其所までは知られど、何にせよ賞て然るべき花といふべし。されども二里行き三里行けど變らぬ景色草木に些退風を催して馬上に小説を案じ、句を案するに、案じて碌な者は成らず、たゞ一人みそはぎの花を摘み居し女の兒の色白にて鄙育ちには似ず姿ものこしも優しく見えければ「家遣しみそ萩つむは孤兒か」正午少し過ぎに横濱へ着き、馬車の田名部へ歸るものありしに乗じて行く途中真黒なる身軀に桃色の幘鼻繩一つしたるのみの七八歳の男兒共折に跟きくる實に五月蠅し。日もやゝ落ちかゝるまで、相も變らぬ海邊を通りて、漸く田名部の町見ゆるあたりには到れば、路の右手の原中に梵字書ける太き杭の寂しげに立ちて影いと長く地に曳ける光景何と無くあはれに、七本に一本十本に二本は立枯れたる片側並樹の松風の耳朶を吹き、人影見えぬ遙の野末に牛の長鳴きするなどさま／＼陸奥らしくて、夏にてさへ如斯なるに秋ならば如何に物悲しからむと徐るに感じける。」

田名部町 人口約五千、下北郡役所の所在地にして、海上青森へ三十五里、西方
恐山へ三里三十町を隔てたり。

大湊港 田名部の西稍南一里餘にあり。奥羽線狩場澤よりは海上約二十里にして、
隔日に汽船の便あり。港は陸奥灣の東北隅に位して、一小灣を成し、更に彼の沙嘴に
よりて抱かれたる内港を有す。人口二千餘、碇舶の便あり。且つこの地には海兵團を
置き、海軍の要港に定めらる。更にこの地の西に川内、脇野澤などあり。川内はやゝ
良港にして多少繁華なり。

恐山 また宇曾利山といふ。下北半島の活火山、標高二千六百七十六尺にして、登
路二徑、一は田名部よりして四里、他は大湊よりして三里、その田名部よりするもの
は、本道にして甚だ峻ならず。また大畑よりは西南に四里を隔つ。HandBook for Japan
に曰く「恐山は恐ろしと云ふ、意義なれども、恐らくばアイヌ語ならん。此山は山嶽
にあらずして、釜臥山の後方なる一窪地なり。此所に火孔湖と寺と硫黄製煉所あり。

田名部より三里十三町の距離なり、中一時五十分間は湿地にして、夫れより栗、杉の樹
陰を上下し、二十一町にして恐湖に下る。海拔僅に六百九十尺のみ。湖は大樹鬱蒼せる
群峰に圍繞せられ、東及び南の諸山は直ちに湖畔より屹立せり。其上に殊に傑出せる
ものは釜臥山なり。西側に近く菩提寺あり。山崎氏曰「恐山は傾斜概ね緩慢にして、
山頂には一大火口址を存し、その底には水を湛えて恐山湖と稱せらる。湖の周圍約五
料餘、やゝ東西に長く、その北岸には温泉及び硫黄製煉所あり。その四周は火口壁た
る峰巒相連り、南方にあるは北國山（七七四米）にして、湖の西方には大盡山（七一
一米）小盡山、天狗山（七一八米）等あり。世に蓮華八葉の靈地と稱せらる。火口は北
方に開け、湖水こゝより流れて北走し、所謂火口瀨を作り、正津川となる。火口内に
は數多の硫質噴氣孔を有し、ことに湖の北畔に於て頗る著しく、硫烟深く閉ぢて臭氣
甚し。従つて火口内は殆ど草木無く、岩石全く分解霰爛せられて、白色の泥土状のも
のとなれり。火口以外満山森林深く岩石の露出甚だ少なく、その東南側には一の寄生

火山釜伏嶽あり。北國山の東に接し、高さ七百八十四米、完美なる圓錐形を成す。その頂上には火口なく、唯熔岩塊の累々たるのみ。恐山の西、北方は巒障相連りて海に盡き、北方には尙ほ黒森(六一四米)佐藤平(七二八米)等あり。西方には大荒川山(六一五米)小荒川山(五九四米)等の小隆起あり。何れも火山岩より成れるもの、如くなれども、獨立の火山なるや否や詳かならず。恐山火山四周の海岸には段丘好く發達し、この土地昇騰の跡所々に存するを見れば、蓋し、この地、往時は一の火山島たりしならん。

●●●●● 圓通寺 恐山の中腹、恐山湖の北にあり。田名部を距る北三里三十町とす。曹洞宗にして、貞觀元年慈覺大師の草創と傳へ、本堂には同大師刀と唱ふる地藏尊を安置せり。寺境凡そ七萬坪、四方小巒を繞らして蓮華八葉の形を爲し、中央の凹處に湖水あり。周回凡そ二里、其の上流を賽ノ河原と云ひ、下流を三途ノ川と稱し、尙ほ域内各處に血の池、極樂濱、劍ノ山、畜生道、其他八大地獄の稱あり。本堂の背後加羅陀山に不

動堂あり。又無緣塔、慈覺堂、藥師堂、五智如來堂、境内に散在し、奥ノ院は東南釜臥山に置き、賽路頗る險隘なりといふ。毎年六月廿四日を以て緣日とし、是日地藏を祈れば死者の苦艱を救ふと言ひ傳へ、善男善女の來り賽し亡人の爲めに血盆經を誦する者頗る多し。

●●●●● 恐山溫泉 前記圓通寺境内、地藏堂の正面左右に湧口五ヶあり。冷拔ノ湯、藥師ノ湯、花染ノ湯、瀧湯、新瀧湯といふ。硫黃泉にして泉温百六十度、無色透明にして著るしき酸味あり。泉傍の土質は、皆硫黃を含み淡黃にして粗脆なり。圓通寺に賽する人、多くはこの溫泉に浴するを例とす。

易心後話に曰「我は一人うそくと湖水(恐山の)近く行きかゝりしに、硫黃の香鼻をつきて胸わるく、大木を輪切にしたるやうなる石幾箇となく砂磧の路央に敷きあるを何ぞと問へば、硫黃滓なり。頓て湖邊の砂利道を辿り、三津川と記せる太き杭立てる小川のほとりに到れば、流れの中の石は皆硫黃の花を敷いて、或は黄ばみ、或は白み、自然の色は少しも無し。太鼓胸づくりにしたる狭きよぼく橋の、橋板に罅ある欄干の破れかゝりたる、見るからに餘り妙ならぬを渡り終に地藏堂に到り着きけるに、此所はまた如何なこと、わやく

がやく雑踏して、宇智利山延命地藏尊と土地訛りを立派に萬葉假名で表し染めたる大旗小幡を幾條となく
 腥き風にばたつかせ、善男善女右往左往に徘徊し、どんごを衣たる爺もあれば、緋金巾の脚布あらはれ友を呼
 びながら駈け廻る姉様あり、頸よりかけたる蝦蟇口をぶら／＼させて居る酔つた若衆、駄菓子を嚙り／＼歩
 く兒童、念佛を齒齧で咬みながら申すを媼様おもひ／＼の人さま／＼滅多無性に賑かにて、じたく／＼と生温き
 水の浸み出で居る境内に、祭日當込の商人香具師も少からず、何でも一錢五厘店、正眞熊の膽、薄荷水、下駄
 屋、居合抜き、弘法大師御夢想の御灸など、何れも雌立て脱きたつれば、牛の蹄の櫛買つて莞爾つく小娘
 もあり、折角油こでてつけたる鬚を横に推し歪めながら天窓の頂上に大きな灸をして貰ふて有難がる大の男
 もあり。地藏堂は相應に廣けれど參籠の者充滿して足を容るべきところも無く、堂の左りの方にある菩提寺
 といふにも同く籠人充滿せり。さて、温泉に入りてより、堂の後面の方にある不動尊を一拜し、それより左
 へ折れ行くに、地は皆硫黄を含める岩にて、ところ／＼に青く黄ばみて硫黄其儘なる土あり、岩の罅孔にぶつ
 くと音をなして釜の湯の熱沸るやうに水の湧き居るところもあり、岩にさへ赤鬼青鬼等の名ある位の土地
 なれば地も皆異な色合にて白茶けたるさま何と無く無氣味なるを、迎り迎りて猶進めば、慈覺大師の小さき石
 像あり。其所より賽の川原といふを傳ひ行くに、一二町の間の道のほとりに、何方より集まり來しものか乞
 食物貰ひ其數を知らず駢て居て、或は彌陀三尊の軸をかけ、或は觀音不動の像を飾り、或は白衣を着、或は
 笈摺を掛け、彼方には怪しき聲して、摩訶もたらまにはんどか波羅はりたやと五銖鈴振りながら唸るあれば、
 此方には普陀落や岸打つ波は三熊野のと悲しげに小娘の歌ふ、此經難持じ太鼓の相の手入りが右にあれば左

邊には松蟲敲きて、三寸息の絶えぬれば六親歎けど甲斐も無しと誦し立つる、叫喚號呼の聲々は虚空に揉み合
 ひ亂れ合ひ、合して毫も福氣なき一つの稀有の響をなし、何とも名狀し難き不快の感じを人に與ふるにぞ、
 心弱き女性達は怪異なる此山の景色と鬼氣旺んなる此状態とに胸を撃たれて既心ならずなり一厘二厘づゝ投
 げて行き玉ふ。また血の池といふ小さき水溜りのやうなるがありて、髪の毛の如き水苔長く生ひ鬚々として水
 底を隠せるを此所は産の難などにて死せる女の沈淪せる奈落につけるところと案内者のいふに、例の情
 深くして智の足らぬ妄信強き女性達は我が姪我が姉など思ひ出してや血盆經をつゝめる小さき紙包を寺より
 貰ひ來りて苦を救はむと投げ入れ／＼地藏觀音を念すれば、悲鳴をあぐるもあり」

●尻屋岬 ● は下北半島の北稍東に突出して、渡島の恵山岬と相對し、以て津輕海峽東
 口の第一門戸を成すもの、地質古生層より成り、尻屋山（四二四米）の裾次第に低く
 海に盡きて、細長なる岩角をなし、その餘脈猶ほ海中に散點して、鮭島その他の岩礁
 をなせり。岬角の岩頭には燈臺高く聳え、第二等回轉白色の燈光を放てり。また霧笛
 の設置あり。恵山岬と相距ること海上二十六海里、もしそれこの岬角に立つて眺隅を
 指にせんか、北は津輕海峽を隔て、北海州の南端を望み、その盡頭に恵山の噴烟を指

點し、本島と北海島兩陸の間を交通する船艦また眼下を過ぎ、風景の壯大自から想像の外にあるべし。

尻尾岬より八月に至る間は東北地方沿岸中尤も單調なるところにして、斗南半島頸部に當り、火山岩の噴出ありて、海岸岩壁を作れるの他は、極めて平滑なる沙漠を成し、低き硝丘の一帶に長く連れるを見るべし。南方に潟湖多く、尾駿沼、鷹架沼、平沼、内沼、小河原沼などあり。また平沼の南に軍馬牧場を置く。重なる村落に東通、白糠、泊、出戸、尾駿等あり、泊は平沼の北六里ばかりにして、鮫港以北始めて岩壁を見るの地、や、海灣を成し、ドットアゲの奇勝あり。一紀行文に曰「尾駿より泊に至る路は一面限りもなき大原野なり。左は渺々とせし東海、荒磯より四五町も沖へ大なる岩石屏風を建てし如く、凹凸の石數百ならび立ちし。有様、圖にもなし難し。沖より強くうち掛かる波の岩の此方へおつる有様、漣のことく進りて見る眼を驚かす。浦人の言に一日風ふけば十日も波靜かならずと言へり。これは限りもなき大洋より送りし波故に右のことし。

●大間岬 は渡島の沙首岬と相對して、實に津輕海峽東口の第二門戸を成せるもの、
●本洲島の最北端にして、その西に辨天島あり。島上一祠を置き、松樹二三株を植ゆ。
岬は低平なる岬角にして、海岸には沙濱あり。またその西に大間港あり、小港なれども、

風浪を避けて和船の好錨地をなす。辨天島と岬の間には潮流急激にして、海面常に渦紋を成すを見るべし。

尻屋、大間兩岬角間の海岸中、尻屋以西は殆ど拋物線狀の大曲線を描き、尻屋山の麓、岩屋村より遠く大畑川口にある湊村に至るの間は、滑かなる沙濱にして、間々小屋地を交へ、二三の漁村その間に散點す。後方には第三紀層の新しき臺地もしくは波狀を成せる丘陵地を有せり。湊村より西北に向ひ、半島の最北大間岬に至るの間は、前に反して後方に山を負ひ、海岸には峭壁岩礁多く、且つその地方に於てヤマセを稱する偏東風の吹き荒みて、激波常に岩を嘯むを見る。その間の岩角に焼山崎、和利崎、甲崎等あり。重なる村邑に大畑、下風呂、易國間大間などあり。大間岬より渡島沙首岬に至る距離は海上約十裡なり。

●大畑村 田名部町の北稍西四里にあり。一村邑を成し、郵便局をも置く。海岸に綴浦の勝あり。

●風間浦村 下風呂、易國間、蛇浦の總稱なり。中、下風呂は大畑の西北三里ばかりにして、郵便局を設置し、また温泉あり。西方易國間へ二里許を隔つ。

●大間港 この附近の良泊にして、小港なれど和船の碇泊には便なり。戸數およそ百

戸ばかり。

大間岬より以南貝崎に至るまで、下北半島の西岸をなせる地は、その北三分の一許り、矢越崎に至るまでの間は、臺地をなし牧場をなすも、矢越崎以南は一帶火山岩の峭壁高く聳立して、海岸險惡なり。而してこの西岸長距離の間に於て港津と稱すべきものは唯一の佐井港あるのみ。

佐井港 矢越崎の東北にある一港灣にして、東西十町、南北五町ばかりを有す。昔は頗る繁華なる港のよしにて、今に戸數三百ばかりを有せり。函館に通ずる二條の海底電線はこの地より海に沈む。また湯之川越を経て河内に通ずる道路あり。田名部町へ陸路十六里許、而して函館へ十二里、松前へ十七里、北方奥戸を経て大間へ約三里とす。橋南谿の東遊記に曰「田名部のサイ、或はヲコベより、松前の箱館邊は甚だ近くして、天地よければ、衣のほしてあるも見ゆ。」

矢越の神懸岩 佐井村字矢越の海岸にあり。岩は二峯に分れ、柱状をなして高く峭立す。下に幾多の岩礁あり。波濤これに激して頗る壯觀といふ。

佛歌瀧 佐井村より南方大凡五里ばかりを隔て、牛瀧村の東にあり。瀧の高さ五十

尺、附近海山の景頗る尋常ならざれども、行路は頗る險難といふ。

○外ヶ濱 青森市より起りて、陸奥海灣の西岸に沿ひ、津輕海峡に臨める三厩町に達する一路、これを外ヶ濱街道と稱す。昔は青森港あらざりし故、北海道へわたるものは、この街道をはるぐと三厩まで行き、それより日和を見合せ、和船にて渡航したるものなり。されど昔時はこの街道實に蝦夷に通ふ唯一の要路にあたり、都の人々も時折はこの路を辿りしものか、歴代の歌集中にもこの地を歌へりしもの少なからず。而して、今の沿岸途中より山に入りて三厩に達する道路は極めて新しく開通せしものなるべく、彼の東遊記の著者橋南谿の如きは、この沿岸の漁家に泊りを重ねてはるぐと三厩の地に達せしものなるべし。地形上よりこの沿岸を見るに、極めて單調にして、青森より陸奥灣口明神崎に至るの間は、頗る平滑なる沙濱を成し、ことにその南半は後方に細長き平野を隔て、丘陵あり。漸く北するに従ひて、海岸に近き、且つその高さを増せるを見る。今、灣口の神明崎には燈臺の設けあり。更に津輕半島の

北端には三厩灣の灣入するありて、その東西には岬角突出す。即ち東にあるものは、短くしてその尖端に辨天島、鷺野崎等あり。西にあるものは長く、その極端を龍飛岬といふ。共にその海岸の後方には直ちに山を荷ひ、水汀には沙濱、岩角相交れり。三厩灣は山麓に彎曲せる沙濱をめぐらし、灣内水深く、津輕海峽中の好錨地なり。東遊記曰「青森、三馬屋、その外外ヶ濱の港々に丹後の人を忌み厭ふ、其故は、當時岩城山の神は岩城判官の娘にして、かれ安壽姫をまつるとか、この姫は丹後の國にさ迷ひて三庄太夫に苦しめられし故、今に至りてその國の人を忌嫌ひ、風雨を起し荒たまふとなり、外ヶ濱通り九十里餘、皆な多くは漁獵、または船の通行にて世渡ることなればこの説隣境にも及びて、松前、南部等にては多くは丹後人を忌みて送り出す。さばかり人の恨みは深きものにや」。定家卿「みちのくの外の濱なる呼子鳥なくなる聲はうたふ安方」。西行法師「みちのくはおく床しくぞ覺ぼゆる壺のいしぶみそとの濱かせ」。青森より三厩まで里程凡そ十七八里とす。

●油川村 青森市より西北に約一里餘を隔つ。民口凡そ二千、昔は舟着にして盛なり。これより奥内、後潟、蓬田等の諸村を経て、蟹田村に到る。阿部比羅夫の政所を置きしは後潟の地なるべしと言へり。

●蟹田村 青森市より八里とす。この地より道は海岸に離れて、山岳重疊の間に通ず。附近に國有林なる扁柏林あり。林相頗る美しく、日本三美林の稱あり。ことにその價格低廉なるを以て、建築用材として伐出さるゝもの甚だ多し。

蟹田より三里餘にして、一峠を越ゆれば、津輕海峽忽ちにしてその大觀を開き、北海道南端の山影また來りて、旅客の衣を掠む。風景の美、そゝろに人をして徘徊願望去るに忍びざらしむ。峠を下ることに二里にして今別村あり。

●今別村 この地より更に南又西方、十三潟地方に至る山路あり。蟹田より、沼海地方平館を経て來れば里數凡そ九里とす。村に淨土宗本覺寺あり。天元年間の創建と稱し、傳惠心僧都作佛像を安置せり。境地は南に山を負ひ、北は海に面し、寺門より海

濱まで僅かに半町、本堂以下數字の建物あり。また東八町を距て、觀音堂あり。その地高燥にして、樹木多く、庭前に瀧あり。堂中の眺閣又頗るすぐれ、西北には龍飛崎を望むべく、東には鑄釜岬を眺め、正地に渡島の連峯を雲烟模糊の間に髣髴すべし。

三廐町 今別より一里半餘、人口二千を有する一の小邑に過ぎざれど、昔は松前への渡津として頗る繁華の地なりしなり。思ふに、外ヶ濱一帯の地は、古來國風にも咏せられ、都の人の口にも知られたるは、旅客がその邊土に來りて如何にはるかに五六百里外の都を偲びしかを想像するに足る。海上、函館へ三十五湮、松前へ二十湮とす。

また村の西北一里半に大字宇鐵あり。津經考曰慶長の頃まで「外ヶ濱には眞の毛人の住居あり。已に寶曆中までも宇鐵に蝦夷の種ありて、且に金銀を下げ、國守の入部には松原へ出て見得をする例なりしか、その後月代を剃らせ、正民の姿になりしこと皆人の知るところなり。」南溪東遊記曰「我松前にわたらんと三馬屋にしばし逗留せしかと順風なくして得渡らずして歸りぬ。毎日順風なることあり、また二十日三十日も順

風なきことあり。さて、三馬屋より北の方は藍の如き山々はるかに見ゆる。これ蝦夷山といふ。また田名部のヲコベク邊の山なりといふ。その邊實に日本の東北の限りなれども、湊にあらざるゆる他國の人の名をだに知らず。三廐より西方算用師峠を越えて、南折、小泊方面へ出づる道あり。小泊まで四里といふ。

舍利濱 今別村の東字母衣月海灣の名なり。天明中橋南谿此地に來りて、舍利濱のことを記して曰「奥州外ヶ濱にホロヅキといふ所有り、其海邊に舍利濱あり、小石濱なるが其中に舍利石まじれり、白きあり飴色なるあり、大サ豆の如く、米粒の如く、明徹滑澤甚愛すべし、此所を通りし日は天氣殊に朗かりしかは、濱邊に座し舍利石をひろひ甚樂り、回國修行の者杯は此舍利石をひろひ、大に尊信する事なり、殊に奇なる事は此濱の磯近く、海中に廣さ五十間程の舍利母石あり、此舍利母石より常々舍利を産し、其舍利を直ちに此濱に打あげ、古今絶せず、此故に舍利多しとなり、其舍利母石水面より餘程深く沈み居て濱邊よりは見えがたし、此邊の漁父に頼めば海底に没

入して、玄翁げんおうにて打破り取あがる事なり。此故に此舍利母石を得る事は頗る難し、されど、珍敷物なれば、余も指の頭程の舍利母二ツ三ツを得て歸れり、其全體の色は薄黒く、土の化したる石のごとくにして、其中に米粒のごとき小舍利夥敷含めり、誠に奇なる石なり、又此舍利濱の先に今別といふ所あり、二三里も隔れり。其所の濱を瑪瑙濱なまなうといふ、此濱に入る前後に自然の石門あり、甚奇境なり、夫より凡半道餘瑪瑙石の濱なり、尤も常躰じやうたいの石も、半まじれり、凡石も瑪瑙も大抵拳内の程より、鶏卵或は小さは蠶豆のごとし、皆々甚明徹にして、京都にて緒おとにするものなり、世に津輕玉といひ又は寶石ともいふ、人馬往來する濱なれば、足元に玉石みちち、殊に日光にきらめきて目眩めまいする計なり、其うるはしき心留りて過行すまゆくさへも覺えず、程よきはひろひ取りて袖に入る程に、雨の袂たもとやぶる、計なり、されど長き旅路携へ歸りがたく毎夜三ツ四ツづゝ人に與へ、京まで携歸れるは纒つづかばかりなり、かくの如き濱京近くにあらましかば、守る人も嚴敷門戸杯もありて誰一人見ることだにも許さまじきを、か

ゝる人無き邊地なれば、道行人の行に任せ、みたりに禁ずるものなし。めづらしき地なり。又曰「石崎の鼻を越えて暫し行けば朱谷あり。山々高く聳えたる間より細き谿川流れ出で海に落る。この谷の土石皆な朱色なり。水の色いと赤く、その落るところの海の小石までも多く朱色なり、この邊の海中の魚もまた赤しと聞く」

龍飛岬りゅうひ 三厩村みやうま字宇鐵うてつの西北に突出す。渡島の白神岬に約十裡を隔て、相對して津輕海峡の西門をなす。海拔一百米餘、附近岩礁多くその最大なるものを帶島と言へり。岬端に踞して一望なれば北海萬頃の烟波は相逐ひ相争ひて、且つ北海州の南端渡島の山影を望むべく、風光絶佳壯大、蓋し、天下の奇觀なり。

○十三瀉地方 青森市または弘前市より國の西邊北津輕及び西津輕兩郡地方に至る街道數條あり。即ち一は大釋迦及び浪岡より、飯詰、金木、中里等の諸聚落を経て、十三瀉の東をめぐり、迂曲して小泊村に達するもの、一は大釋迦、浪岡より五所川原町を經、木造町に至りて、弘前市より來れる街路に合し、更に北向して十三瀉の灣口十

三村に至れるもの、一は木造町より分れて西方に向ひ、鱒ヶ澤町に至りて、それより海岸に沿ひ、以て深浦に至るもの、即ちこれなり。而して弘前市より高杉、裾野を経て西北海岸に出づる街路は、舞戸附近に於て、木造、深浦を連絡する街道に合す。此地方は北方に従ひて、卑濕地多く、人工に成れる湖沼多し。十三瀨街道、龜岡附近には石器土器の發掘せられしもの多し、此地方は往昔蝦夷の最も猖獗を極めし地方にして其蹟處々に存す。十三瀨は、風光の明媚を以てきこゆ。十三瀨東岸の道路今泉より津輕平原の脊梁を成せる丘陵を越えて三厩に至る路あり。日本海沿岸の港なる深浦、鱒ヶ澤等は交通不便なる昔時は上方地方と交通する港として、和船の繁華なる碇泊所なりしも、今は全く衰頽せり。

五所河原町 青森市より八里二十七町、弘前市より六里二十八町にあり。町は岩木川の東岸に位し、津輕北部の要地に衝れり。人口約四千餘、北津輕郡役所、郡立農學校等を置けり。これを聞くもこの地及び木造町近傍は一帶卑濕荒蕪の地にして、人

民居住すべからざりしほどなりしに、四世藩主信政大にこれを憂ひ、堤防を築き、流域を通じて、以て現時の耕圃に變せりと。

木造町 御所河原町の西約二里にあり。岩木川の左方に位し、人口約三千、町に縣立第四中學校を置く。龜ヶ岡を始め、附近、古代人種の遺跡多し。

森田の堅穴 森田村は木造町の西一里半、青森市の西七八里にあり、地學雜誌に曰「森田村大館池の邊より多數の石器時代の遺物を出せり。而して堅穴は池の西方八重菊と稱する所にありて、地は極めて緩なる傾斜丘陵をなす。僅かに小松及び、芝を以て被はれ、七十九箇の堅穴散布せり。地勢は南に岩木山を負ひ、西は遙かに日本海を見渡し、風景絶佳なり。近時、この堅穴五箇を發き、ことにその一箇は殆ど全體を掘返せしが、地下一尺ばかりは黒土にて何物をも發見することなし。尙ほ掘ること數尺にして土器を得たり。土器の下に石塊六個ほどありて、夥多の焼け土、木炭、灰等を發見す。さればこの石は當時の竈を構成せしものにして、已に飲食物を入れたる土器あり。

は實に夥多にして、その重要なものは石器、土器、骨器、角器等なり。その石器の原料は黒曜石、半蛋白石、綠色凝灰岩、砂岩、瑪瑙等にして、石器の重なるものは石鏃、石鎗、石匙、石錐、凹石及び少數の石斧等なり。殊に面白きは綠色凝灰岩の徑凡そ二分乃至七分位の礫を擦り磨きて、一種の珠玉を製造せんとせしが如き痕跡を認むるものを發見せしことなり。而して其等の中には両面を磨擦し孔を明けかけたるあり、又鹿角に複雑なる彫刻を施せるあり。これによりて見れば、龜ヶ岡の石器代人民は實に矇昧無智の蠻民にあらずして時には河畔に降り、礫中より美觀あるものを撿み採りて、これを擦りこれを磨き、或は、これに孔を通し、以て裝飾品となせし優美の性情を有せしもの、如し。又此地より發掘せし土偶には、男女の別を示すが如きものあり。其の婦人を摸したるがきものには、乳房の割合に大なる、下腹部膨大して妊娠の狀を示せるが如きものあり。其の乳房の割合に小なるは、男子を摸したるならんが、其の或るものは首と肩との境に一種帶様のものありて衣服の襟を示すが如きあり、腰の下より兩股間にかけて一種の廓内席紋ありて襦を示すが如きものあり。殊に面部には遮光器を使用したるを示すもの甚だ多し。これ積雪のため、視力を害せざらんを爲めに常用せしものたらん。而しては獨り龜ヶ岡のみならず、奥羽地方に於ける土偶の特徴なりとす。(大日本地誌より)。

更に十三瀨に達する路は、海岸にして、防風松林これに並び、風景よし。

十三瀨 津輕平野の北端にあり。岩木川以下、津輕平原の大小總て十三川によりて

涵養せられ、西方十三村附近に於て海に通ず。周圍約八里、その東方には内瀨の小瀨入あり。往時は南下の田光沼とも連りて一大瀨湖をなせしもの、後土砂等の沈積によりて相分離し、現時の大きになれるものといふ。瀨口は砂嘴南北より逼りて極めて狭く、殊に西風吹き荒みて激浪海砂を吹き送れば、瀨口全く閉すに至ることありと聞く。湖底は甚だ淺く、その深きところに於ても僅かに一尋四分の一に過ぎず。冬季の候に於ては湖面は全く結氷せり。

十三村 十三瀨の西南岸にあり。弘前を距ること十五里とす。一小瀨を成し、人口約一千餘、金木以北の木材、米穀等をこの湊より輸出せり。且つその北岸今泉と稱する所に城址あり。豪族安東氏居住の址と稱せり。南に入洞明神あり、或は鎌倉時代の創設ならんかといふ。四近、風景甚だ美しく、羽後の八郎瀨には及ばざれども、また東北の一勝地たるを失はず。

岩木川 國內第一の大河にして、源を泊嶽連山及び八甲田群山地方に發し、津輕平

野に出で北流して十三瀉により日本海に注ぐ。流程約二十里、上游を村市川等となし、弘前附近より岩木川の名を命ず。淺瀬石川等を容れてより河身愈々大となり、流れまた緩く、津輕平野に渺なからざる灌漑舟楫の利を與ふ。十三瀉に至り、その河口には數多の小三角洲發達せり。

●小泊村 十三瀉を涉り、小泊崎を回り行くこと四里にあり。人口三千餘、偏東隨に遭ひて津輕海峡を渡り得ざる船舶のために好箇の避難地なり。これより北四里にして本州の最北龍飛岬に到るべく、北又東四里、算用師峠を越えて東津輕の三廐町に達すべし。

十三瀉の口より南方鱒ヶ澤に到る間は平なる沙濱にして、岩木川平原の西を擁する第四紀層の丘陵の外側を蔽ひて、一帯の砂丘發達せり。鱒ヶ澤は西北に辨天崎の小岬角を控へ、陸奥の日本海岸に於て良好なる小港津をなせり。

●鱒ヶ澤町 木造町を距ること西方五里にあり。山を負ひ、海濱に臨みて狹長なる市

街を成し、人口七千餘を有す。昔は大坂廻りの和船の發着所として、帆船林立、商賈踴至の盛況を呈したりしも、維新後海上交通の法一變せしより漸く衰頽に傾きて商業また振はず。地に西津輕郡役所、區裁判所等あり。青森を距る十四里二十三町、弘前を距る九里三十五町（裾野、高杉を通じて弘前への路あり）とす。港灣は北面し、辨天人造岬を有して、日本海の風濤險惡なるを遮れども、未だ以て充分に船舶を碇繋せしむるには足らず。殊に毎年冬季に至れば、西北の風浪甚しく、それを拒がん爲めに巨費を投じて木造の防波堤を築けり。港灣の廣さ東西十八町、南北十五町といふ。

●大戸瀨の奇勝 鱒ヶ澤の西四里餘、大戸瀨村の阜頭にあり。その地方、岩石は凡て第三紀層なる斑綠色の角稜質凝灰岩より成り、奇岩の削立するもの二、一を大戸瀨、他を小戸瀨と稱し、怒濤の來りてその岩脚に奔蹙するさま、宛から銀山の崩るゝが如く、景致頗る奇怪なり。また附近に千疊敷と稱する地あり。海濱一面の平磐より成りよく數百人を座せしむるに足る。然もその一部凹みたる所々に、海水を湛え、恰も海を

とらふ。

岩崎より砂濱を行くこと三里餘、大間越村あり。岩崎の大字なれど、人口千餘を有する一小邑なり。猶二里半餘、小山の頂を越ゆれば地は既に羽後國に屬せり。大間越より羽後の森山まで五里といふ。

羽前國

羽前國は岩代の北に接し、東は陸前磐城に境し、北は羽後國に連り、西は越後及び日本海に對す。東西二九里、南北三九里、面積五百方里を有し、米澤、山形の二市と東村山、西村山、南村山、北村山、最上、東置賜、西置賜、南置賜、東田川、西田川の十郡を有し、山形縣これを管す。國は四面に群山連互し、東には脊梁山脈蜿蜒として連り、西部より北部に互りて、越後山脈及び出羽丘陵複雑して相起伏す。脊梁山脈は吾妻火山群より北して、羽前と磐城陸前の境を成して摺上山、仙翁岳、番城山（一三五九米）藏王山（一九六四米）を崛起せしめ、更に北して、仙人山（一一五九米）面白山（一二九二米）を起し、船形山、荒神山、吹越山に至りて盡く。番城山の西に金山峠あり。仙人山の南に笹谷峠あり。面白山の北に關山峠あり。吹越山の南に國見峠ありて、共に本國と磐城陸前に通ずる主なる交通路を成せり。越後山脈は岩代の飯

豊山でかんに起おこり、西置賜せいせきの北方に至り、祝瓶嶽しゆへい(一三五七米)釜ヶ岳かまが(一一七一米)朝日嶽あさひ(二一四米)の諸高峰を起す。更に北して障子ヶ岳さやこ(一二八四米)月見堂つきみだう(一三〇九米)月山つきやま(一九五九米)高倉山たかくらやま(一〇四三米)等の諸山あり。朝日嶽及び月山群山の東には小丘陵起伏して、平均五六百米を有して愈々東して愈々低夷す。月山以北は山相漸く低く、高さ概ね三百米に過ぎず。南に羽黒山あり。この東西兩山脈に挟まれたる平原は所謂最上平原にして最上川南より北に流る。最上平原の南部は松川、鬼面川、白川の灌漑する處にして、一にこれを米澤平原といふ。米澤市其南隅にあり。山形平原は、最上平原の中心を成し、東西十三軒、南北六十軒、面積五百八十平方軒を占め、山形の市邑其中央にあり。土地豊腴にして、稲田遠く連り、産業また盛なり。又其北は新庄町を主邑とせる新庄平原あり。庄内平原は全くこれが地區を異にし、最上川の下流及び赤川これを灌漑し、南は月山、金峯山等其境域を劃す。西方は全く日本海に面す。東西二十軒、南北四十軒、面積五百平方軒を占め、田園よく開け、人烟稠密

なり。鶴岡の市街其中央に位す。河水は最上川、赤川の二川國の大動脈を成せり。最上川に湊入する河川は、上流より數て、羽黒川、和田川、鬼面川、白川、酢川、寒河江川、丹生川、鮭川等にして、庄内平野に近く立谷澤川を容る。赤川は源を東田川郡の山岳地に發し、月山群峰の西麓を正北に流れ、最上川の下流に會す。

沿革 此國古來の沿革に就ては、羽後の部に詳記すべければ、茲には維新前後の變遷のみを、掲げんに、徳川氏の末世國內に封を受くる者、米澤に上杉氏、鶴岡に酒井氏、山形に水野氏、新庄に戸澤氏、上ノ山に松平氏、天童に織田氏、長瀨に米津氏米澤新田に上杉氏あり。以上八藩の内、鶴岡藩を若松に徙し、長瀨藩を上總の大網後のち常陸のちの龍ヶ崎に徙し、山形藩亦近江に移り、明治五年山形、置賜の二縣を置き、更に合併して山形縣を置く。

交通 官設奥羽西線は福島縣より板谷峠の隧道を過ぎて本國に入り、大澤、關根の二驛を経て、米澤平原に下り、米澤市に達し、糠の目、赤湯、中川を経て山形平原に

入り、上ノ山の一驛を経て山形市に達す。これより汽車は愈北し、漆山、天童、神町、楯岡、大石田、船形を経て、新庄平原の主邑新庄町に達し、新町、釜淵を経て、羽後國に入る。これを國中最首要交通路と爲す。庄内地方に赴くの道路は船形驛より西し、最上川を渡り、清川村を経て至るべし。道路は小松より小國を過ぎて越後に入る越後街道あり。米澤より南して岩代に入る若松街道あり。其他上ノ山より金山峠を過ぎ、或は赤湯より高畑二井宿を経て宮城縣に入るもの、山形市より笹谷峠を越ゆるもの、山寺より二口峠を越ゆるもの、神山より關山新道を越ゆるもの、尾花澤よりするもの、舟形町よりするもの等あり、共に宮城縣に達する通路なり。庄内地方には鼠ヶ關より羽後の酒田町に至る濱街道あり。

●産業 米麥は最上平原、庄内平原を主産地となす。食用農産物には苹果、梨等あり。櫻桃は本國の名産にして、山形市に於ては、梅實を以て梨斗梅を製す。麻は村山各郡及び最上郡に産す。葉藍、煙草また多少の産出あり。薄荷、紅花また盛なり。林

業は、秋田、青森、二縣に及ばざれど、他地方と比しては盛にして、村山各郡、この首位に居れり。杉を第一とし、松栗等を産す。水産は日本海に瀕するの地、鯨の好漁場たり。工業には織物に米澤織物あり。奥羽地方屈指の産地にして、米澤地方は到處機杼の響を聞かざるなし。

○奥羽西線沿線 兩羽街道とは、岩代、羽前の國界たる板谷峠を出で、米澤、山形の平野を過ぎ、羽前羽後に至りて、秋田より陸奥の弘前市に至る街道を言ふ。即、奥羽西線の鐵路の添ふて走るところなり。福島市を去り、官線奥羽西線に乗換れば、汽車の線路は北西に向ひ、羽前磐城の境に蟠れる連山脈を横斷せんとす。庭阪に至りて地は次第に高く、願れば福島平野は遠く阿武隈の流と福島市の街とを展開し、其上には阿武隈山系の諸山嶽透蛇をして連互し、眺矚頗る可なり。板谷峠の隧道は、其數十四其最初の一を過ぐれば、背後の渺々たる風景は全く消えて、身は萬山底裏にあるを覺ゆべし。かくて汽車は或は深谷の緑或は山嶺の背を走りて漸く板谷の小驛を得

べし。
 板谷峠 およそ羽前國界には山嶽重疊して、板谷、栗子兩峠の險あり。行旅皆その險難を憂ひたりしが、今は奥羽西線の工事既に成り、最早旅客のその險を踰ゆるの要なく、交通の便全く昔日に異なるに至れり。板谷嶺を横断せる鐵道は、東北各地中最も開鑿に困難なりしものにして、福島盆地より次第に登り來りて、幾多の隧道を過ぎ、山いよく深うして板谷次驛に峠停車場あり。而も、隧道は就れも一哩乃至二哩の長距離にして、その間に山嶺の兀立せる、溪流の盤回せる、瀑布の懸垂せる、人をして車窓を閉づるを覺えざらしむ。猶、毎年冬季に至れば、積雪甚しく、爲めに汽車の埋没を見ることあり。峠の標高凡そ七百五十メートル餘、峠停車場は蕭然として恰も碓氷の熊平の如し。山中、萱多く、瀑布の名あるものには布引、大瀧、三階瀧等あり。中、布引これが最にして、落下實に六百餘尺を有す。

曾て紀平州の紀文に曰く、「過佐々木野庭坂二驛、自此至板谷驛三十里、山路奇險、漸上至霧辛、老樹怪崖、

熊龍所伏、壯士猶難單行、栗子正然山民爭拾、或有婦女男裝負賃出入險惡中者、余危之、馬夫曰、舍之無生、我婦昨出遇熊、今又往、余不覺頓蹙曰、世唯謂蠻婦苦、豈知亦有山婦乎、人爲一生不避危殆、不啻此輩、過李平村、踰鬼倒、暨轉垂藤諸險、及昏達板谷驛、我米澤東南界也、「烏道盤回掛翠微、子規啼所白雲飛、羽山纒入峭崿山、莫則鄉愁漫促歸」以て昔日の險難の一斑を知るべし。

道路は岩代飯坂町より栗子峠(九〇〇米)を越えて刈安村に達するものあり。山徑至難、鐵道開通以來は殆ど行客稀なりといふ。峠に萬世隧道あり。青山延壽曰、「已出栗子隧道、又攀坂道、盤紆數折、山愈高、登盡又降坂路、數折降盡、道稍坦、曰瀧澤、自隧道至此里許、又行一里、有村曰苅安、又有隧道長三十六間、山里有館頗美、橫洋製、遊者主上所慰息」。川田竊江曰、「從苅安原、南攀峻坂、孤峯凌空、爲栗子山、山外即福島縣界、尤爲直捷、明治九年開山道、伐木填谷、破崑終筏不廢役、五閱寒悞、竇道曰栗子、四百八十二間、上却板輿、步入竇道、左右點燈、猶尙昏黑、呎尺不辨、一行數百人、唯聞窸音而已、行可八九町、豁然別開一天、蓋栗子山道、地破天荒、異觀百出、不可名狀、姑以畫法言之、初也峻拔、次而幽遠、又次奇峭、又次而開朗」。

五色温泉 板谷停車場より二十町にして板谷山中にあり。泉質は鹽類性に屬し、無色透明、反應はアルカリ性なり。天正年間直江兼續この温泉に浴して奇効ありしよりその名大に起る。米澤市を相距ること約六里なり。

織物取引所等あり。猶、市西館山の片町に製糸場あり。明治十年の設立とす。安井息軒曰「達米澤、投東街逆旅氏、午飯膳茅蝦、予不能食異味、卻之、赧然而退、地少海物、蓋以爲珍耳、米澤地勢、略與會津類、但、山無磬梯之秀、水無猪湖之廣、嵩無柳津之奇、四山又稍逼、要之、二國皆居山巒重疊之中、搬運極艱、世治不足貿易以富其民、世亂不足縱轡以關無境、然會津有藩祖神公、遠胎翼子之謀、米澤則有鷹山公、振起祖業、皆以儉素立國、流風善政、奉守不敢失、申西凶荒、奥羽之民、死者數萬人、二國則無一人凍餒、而米澤尤裕、乃知國之盛衰在政、而不在地也」。鐵道、米澤より福島へ二十六哩、山形へ二十九哩、又道路若松へ八里七町とす。

米澤城址 始め松崎城と稱し、後舞鶴城と呼ぶ。曆仁元年源頼朝の臣長井時廣始めてこれを築城し、後七世の孫廣房に至り伊達政宗の滅ぼす所となる。天正十八年、豊臣秀吉これを蒲生氏郷に與へ、後上杉氏の領と爲り、直江兼續これに居りしが、慶長六年上杉氏會津より移りて、歴代これに住し、以て王政維新に及べり。現今はこの

地を開きて公園となし、四民偕樂の遊園となせり。壕渠四方をめぐり、入口舞鶴橋のある邊りはこれ即ち往時大手門のありし所なりといふ。

上杉神社 米澤城址の中央にあり。別格官幣社にして、上杉謙信及び治憲の靈を祀る。治憲は即ち鷹山公にして、境内にその紀功碑あり。以て公が農桑、織績の業を勧め、治國富民の政を力め、士民今に及んで猶ほその恩澤に霑ふの大なることを勸す。

林泉寺 米澤市字林泉寺町にあり。曹洞宗にして、僧正伊開基、文明年間長尾能景越後頸城郡春日山に創建し、元和年中今の地に移すといふ。市内第一の巨刹にして、寺域凡そ八千坪、堂塔薨を連ね、境内閑雅を極む。又直江兼續原親憲等の墓あり。什寶多し。

米澤の佛刹 林泉寺の他重なる佛刹に極樂寺、法音寺あり。極樂寺には上杉景勝の室四辻殿の墓廟ありといふ。又、法音寺は上杉氏の菩提所にして、眞言の巨刹なり。猶、米澤の神社には前記上杉神社の他に、伊勢神明社、谷地神社、白子神社などあり。

佐氏泉公園 米澤市の東方凡そ二十五町、字花澤にあり。これ、米澤市を訪ふもの、必ず過るべき所にして、その境地の静寂なる、田圃の中に一小丘を成し、老松の盤旋、清泉の噴出、人をして思はず悠遊半日の閑を消せしむるに足る。傳へていふ、地はもと佐藤正信の宅址にして、その子繼信、忠信はこゝに生れたるなりと。而して湧出する清泉に名けて佐藤清水といふ。これ園の名を得たる所以なり。又、傍に蟠屈せる小丘を月見山と稱し、佐藤氏觀月の地と稱す。丘南の一禪房あり、正徳山常信寺と號す。三社あり、正信、繼信、忠信の靈を祀る。且、園内二三の茶樓あり。

牛森原 米澤市の東方萬世村にあり。古墳所々に存す。或は曰く前九年に於ける古戰場なりと。延寶中地を穿ちて石櫃を得たることあり。

笹野大悲閣 米澤市の南一里許にあり。參詣するもの常に絶えず。

成島八幡神社 米澤市の西北一里餘、廣幡村大字成島にあり。寶龜八年將軍大伴駿河麿の建立にして、大同二年坂上田村麿再建す。後源義家神領を寄附して、現今郷社

たり。蓋し、國內の古祠ならん。又、廣幡村大字小菅に小菅神社あり、一に越家社と稱し、現今は虚空藏堂といふ。和銅年間勸請の古祠なり。

米澤織 大日本地誌曰く、山形縣は奥羽地方中福島につげる機業地にして、殊に米澤地方は到る處機杼の響を聞かざる無し。米澤職の沿革は安永六年藩士廣瀬彦助なるもの藩主の命を奉じ、公務の餘、絹糸織製造の業を開始せしに始り、寛政年中に至り、藩の事業として藩主自から國産所を設置し、京都より絹織職工を雇聘し、藩士等をしてこの傳習を受けしめれば、機業は忽にして一大進歩を來し、米澤織の名は遂に天下に喧傳せらるゝに至れり。維新後、百事廢弛、一時は再び起つべからざるの悲境に陥りたれど、數年ならずして恢復振興の氣運熟し、今日にては昔年に倍するばかりの好況を呈せり。而して販路は東京、京都、大阪、北海道地方を以てその重もなるところと爲す」

南置賜の一郡温泉極めて多し。前記、五色、滑川、姥湯諸温泉の他を此所に列記せん。

小野川温泉 米澤市の東南二里にあり。泉質は鹽類泉にして、無色透明、弱亞爾加里性の反應を呈し、最も食鹽に富むを以て消化器病等に特に効ありといふ。

白布の高湯温泉 米澤市を去る四里餘、吾妻山の麓にあり。正和年間の發見といふ。

吾妻温泉 南原村大字李山字相生にあり。米澤市を去る四里餘、傳へて、弘法大師

の發見となす。猶、吾妻湯を距る三十町餘に佐原澤温泉あり。その近傍、火燧、嶮急

の兩深あり。火燧瀧は高さ二十丈幅六間、嶮急瀧は高さ六丈、幅八間、又壯觀なり。

若松街道は米澤市を西に出でて鬼面川を渡り、口澤、神原、入田澤を経て大峠を踰え、以て岩代國に出づ。

大峠に數十間の大洞道あり。又、李山より關根、綱木を経て檜原峠(一一〇〇米)を踰え以て岩代に出づる山

路あり。前者に比すれば險阻といふ。峠より米澤に至る里程七里なり。明治中巡迴日記曰、自米澤南赴若松、

舟坂綱木坂皆險、上檜原嶺、路益險、雲霧四塞、只聞前人語聲、有石倚焉、有水掬焉、雲入襟袖、瀏々有聲、

渾身皆濕、清絕疑入仙境、上絶頂、躡攀近二里、無尺寸坦地、蓋與羽第一之險路也、絶頂有民屋二戶、夾路

相對、製木器爲生業、四壁皆以繩聯板、不施釘、蓋便遷徙也、凡、深山有材、運輸無路之地、窮民寄寓、製

杯棬盆盆雜具、負載出市、謂之木地師、材盡則易所、猶太古人民逐水草遷者、農家傾產流落者、多從事於此

云、其婦迎客語曰、冬間積雪丈餘、絶無行客、猪鹿之聲高在尾上、餓猿或爪板闖窺隙、兒輩慣聽啼々相笑、不

復覺其岑寂、人生不凍不餓則足矣、此之豪農之愚水旱、富商之憂火盜、官吏之驚寵辱、則甚安矣、余聞其言
慨然、曳杖而去。

米澤市より北に向ふ街道二あり。一は即ち兩羽街道にして鐵路と相伴ふ。少しく西
に偏して北に向ふものは即ち成島を経て小松町方面に至る。

糠野目驛 米澤の次驛にして、同驛を距る六哩とす。この村の大字夏茂に伊達政宗

の廟墓と傳ふるものあり。山形縣通覽に曰く、至徳年間伊達政宗は松ヶ岬の城を襲ひ

長井廣房を亡ぼし同郡高畑の城に居りしが、應永二年九月十四日同地に卒し、遺骸を

此地に葬る。傍らに夫人の墓あり、嘉吉二年七月云々の文字を刻す。後ち正宗七世の

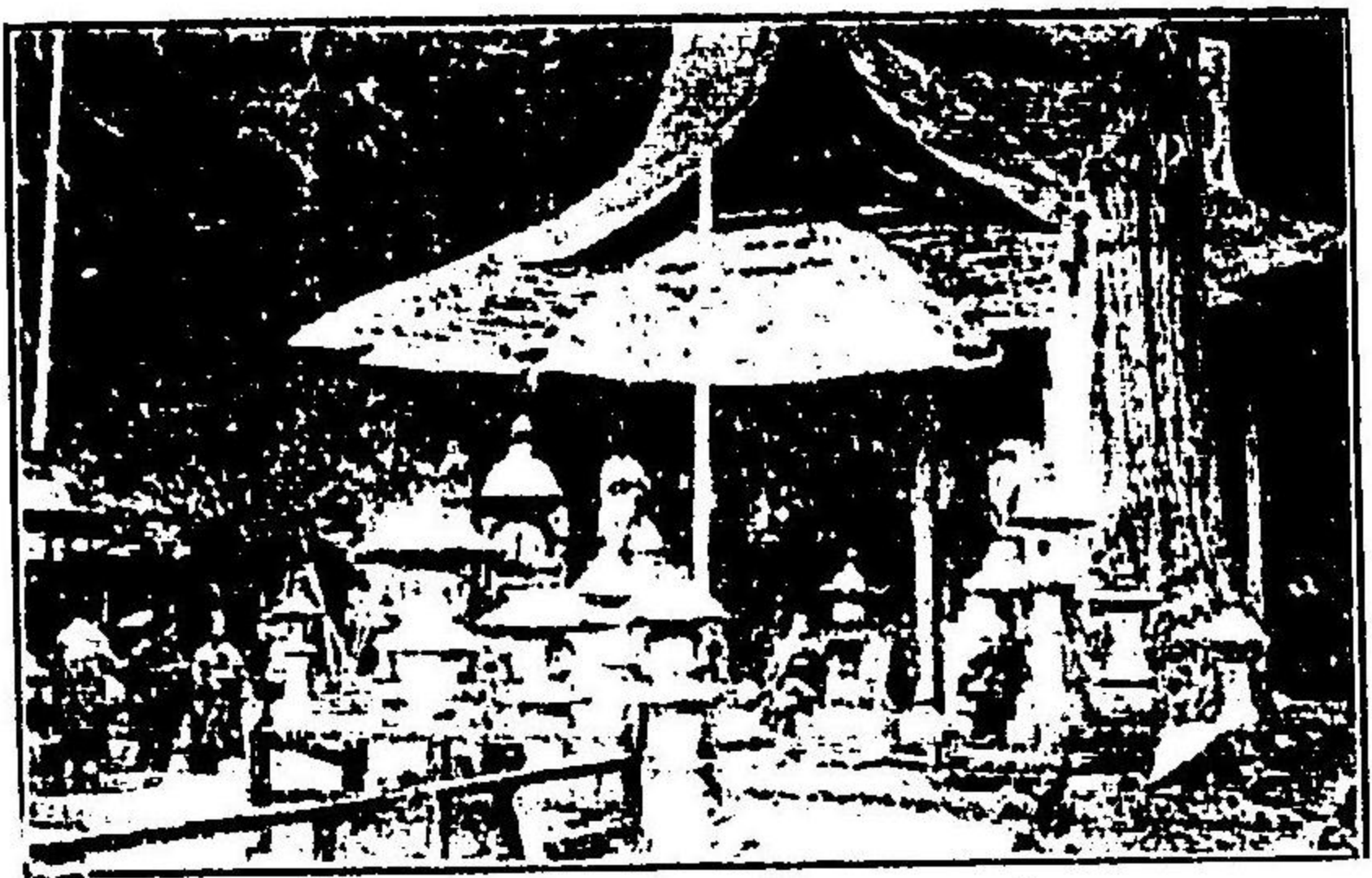
孫輝宗天正十三年十月二本松義繼の爲めに殺され、其臣遠藤基信も亦殉死、今五輪の

石塔四基を存す。即ち正宗、同夫人、輝宗、基信の墓なりと。猶、東置賜郡の久保櫻

はこの驛より五里を隔つ。(最上川流域の頂参照)

龜岡文珠堂 糠野目停車場の東一里、高島町の南一里ばかりにあり、寺を松高山大

聖寺と號し、新義真言宗にして、傳春日作文珠菩薩像を安置す。大同元年、伊勢國渡



龜岡文珠堂

會郡神乳山よりこの地に遷徙したるものと稱し、堂宇壯麗、末堂寺院また多し。猶、堂側に古櫻樹あり、その幹の外皮に虫喰の跡を存し、形状恰も文珠菩薩青獅に駕せるの状に似たり。これを以て俗に之を虫喰文珠と稱せり。蓋し、この地方屈指の靈刹とす。川田龜江曰「龜岡村、大聖寺有焉、入山門、左右列石燈籠、拾磴數百級、老杉四圍、古祠巍々、曰文珠堂、堂側銅盤蓄水供盥嗽、徑九尺餘、有石碑、漫漶不可讀、元祿中幕府寄祀四百石、應慶中降爲勅願所、寶庫藏古文書、試觀其一冊子、集天正間群雄筆跡、又不易多獲者矣」。

高嶺町 米澤市の東北三里餘、國道を右に離れて、糠野目停車場より二里餘を隔て

たり。赤湯町より二井宿を経て磐城國に達する要路に衝り、人口大凡四千五百餘を有す。地に東置賜郡役所あり。又、城址あり。織田氏の天童に移らざる以前此地に城主たりき。又、曾て伊達政宗もこの地に居城し、屋代城と稱せりといふ。

八幡神社 高嶺町の東半里、大字安久津にあり。貞觀二年慈覺大師の創建と稱し、始めは阿彌陀堂なりしが、後、源義家奥羽征討の時鎌倉鶴岡八幡宮の分靈を遷座せしものなりといふ。境内古松老杉繁茂し、三重塔、巖島神社、鏡塔、旗立岩等あり。無量壽松は高さ二丈餘、幹の周圍一丈餘、其枝十間四方に繁茂す。里人稱して千年松といへり。

蘆恒馬頭觀音 高嶺町大字鹽森にあり。春日明神の作と傳ふ。今を距ること四百餘年前當所若柳の城主の崇信すること篤く、大堂を建設せしも、後火災に罹り、現在のものは再營なりといふ。又、この附近に有名なる古墳を有し、種々の古器物を發掘せりといふ。

山門の石標に題して「仙鶴留毛傳軟事、古經存寺是珍藏」と言へるに就き一故事を傳へたり。境域堂塔七八宇、寺寶には傳惠心作觀音像以下を傳ふ。寔に古來著名の一巨刹たり。

赤湯の次驛を中川驛とす。同村字中山の路傍に掛入石あり。高さ三丈、周圍十間許りの奇石にして、石下自ら窟を爲し、風雨を避くべし。これ、慶長中上杉勢の山形を侵し、偶々戦利なくして將に中山城に入らんとせし時、若林織部佐なるもの、該石に由つて最上の追兵を防止し、以て難を免れたる古跡なりといふ。紀平洲曰く「丹泉北行、右大沼上坂、曰川樋驛、驛北村中得泉、曰石老泉、清冷無比、側立諏訪祠、曰小岩澤、曰中山驛、右關合符過、過渡橋、得怪石、日懸、可高二三丈、周二三十歩、其下岩窟、可避風雨」。

更に北に進めば米澤平野と山形平野との間に中山峠の一小山脈あり。翠嵐搖曳してや、趣に富めり。南村山郡界の一小嶺を越え、前川の潺湲たる流に沿ひて下れば先づ上の山町を得べし。

上ノ山町(上ノ山温泉) 最上平野の南部に位し、鐵道山形市を距ること七哩(里數三里餘)に過ぎず。人口凡そ六千四百、南村山郡役所の所在地として、將た温泉ある

を以て古來その名著る。街巷は街道に沿うて發達し、中央最も繁華を極めたり。停車場はその東南端に位し、交通の便また甚だよし。温泉は市街の一段高き字湯町の北、日枝神社の傍より湧出し、旅舎は大抵寛を用ひて遠くこれを館内に引き、以て旅客の深浴に供せり。泉性は鹽類泉に屬し、消化不良、胃加答兒、貧血症、子宮病、打撲、皮膚病等に効ありと稱す。而してその鶴脛温泉の稱は長祿年間僧月秀なるもの、野鶴の脛を淵水に浸して傷部を洗ふを見、始めてこの泉を發見したるに始まると傳ふ。即ち今の淨光寺は當時月秀の經營したる稱徳院の跡なりと稱す。かの俚調にも「出羽で庄内、最上で上ノ山、此所は會津の東山」と唱へて、實に三者共に奥羽地方の三樂園と推稱せらる。猶、上ノ山町の東を流るゝを前川といふ。町よりは東方に藏王火山を仰望すべし。紀平洲の詩に曰「藏王神秀白雲間、駐馬先疑難可攀、行々且喜通村驛、一路如環傍北山。」

月岡城址 上ノ山町字湯町の西丘にあり。天文中武衡義忠が始めて此所に築城せる

もの、前に藏王の連山を望み、眼下に前川(酢川)の流を帯にして、地勢廣闊、展望頗る佳なり。維新前、松平氏これに居りしが、今は開きて公園と爲せり。月岡神社はその園内にありて、舊藩公の靈を祀れるもの、祭典は今に猶ほ舊式を存して、頗る嚴正なるものありと聞けり。

湯上観音 上の山町字十日町の一丘陵にあり。札所観音にして、境内に櫻樹多く花時美観なり。

上の山町より南方橋下を経て金山峠を踰え以て磐城の刈田郡に出づる道路あり。これは同郡に於て赤湯、高島より來るものと合し、桑折及び白石町に通ずるものにして、金山峠を下れば直ちに刈田郡湯原に出づべし。猶、峠に不動堂あり。東國旅行談に曰、「奥州白石より羽州への通路は、橋下二十八町坂を下れば宿なり。これより上の山城下まで二里、その間に西の方見れば、屏風を立てたる如くにして、その高さ三丈あまりと見ゆる山あり、長さ一町半もあるべし。この山より昔蝶とやらむいふもの出で、山裂破して大洪水をなしけるより草木を生ぜず。水の流るゝごとき堅すじを殘しけるとなり。今も水流れくるかと思見るにもの凄し。」

高湯温泉 山形市を距ること凡そ四里餘、上ノ山町を距ること又四里許りにあり。ま

づ、上ノ山町より上ノ山新道の碑を見、猶行くこと少許、細徑を田圃の中に止め、酢川の流れに沿うて右に入ること三里、藏王火山の爆裂火口壁たる龍山の南麓、南村山那堀田村にあり。其の地は東に三寶荒神、熊野岳、刈田山の諸嶺をめぐらし、北に鳥甲、地藏の連山を帯び、南に高テア山を控へて、唯々西の一方に遠く山形平野の開けたるを見る。泉質は酸性泉にして、無色透明、反應は強酸性を呈し、硫氣の盛なる、東北の草津温泉を以て目せらるるに至る。癩病、微毒、腺病等に特效を有し、ことに小兒の諸病を醫すを以て甚だ著名なり。また、多少の湯の花を産せり。鏝泉の發見は詳かならざれども、三代實録に貞觀十五年六月二十五日正六位上酢川温泉神社に従五位下を授くとあるを見れば、其の以前既に發見せられたるものなるを知るに足らん。村の後方高所に薬師堂あり、甚だ眺颯に富めり。一小湖あり、杯湖といふ。浴客の遊ぶ者多し。地の民家は凡そ四十戸ばかり、その半ばは浴客を留宿し、一年の浴客大凡一萬人に及ぶといふ。又、この地より導者に賃して、藏王嶽を越え、陸前青根温泉に出

の構造甚だ古くして且つ劣れり。その前なる大路の東に山形縣物産陳列所あり。其他山形師範學校、女子師範學校、山形中學校、高等女學校、市役所あり。孰れも壯大なる建物なり。市中殷盛なる地を六日町、旅籠町、七日町、横町、三日町とし、銀行、諸會社、及び商賈、旅館等多く此處にありて、百貨を辨ずる處とす。殊に此の市の特色は商賈皆類を以て集りたる事にして、塗師町に漆器商多く、桶町に桶商多く、旅籠町に旅店多く、其他材木町、蠟燭町、鍛冶町、銅町等皆然らざるなし。而して五日町、八日町、二日町、三日町の稱は、皆な市場の立ちたる日を以て町に名けたるものに似たり。遊廓は市の東南小性町にあり。而して重なる物産としては銅鐵器、黒柿細工、熨斗梅、織物、蔓細工、眞田織等を擧ぐべく、近傍片谷地よりは蔦蓆を出し、平清水よりは陶器を産せり。爰に例によりて市内元標より府縣廳所在地及び國內名邑に至る里程を掲げん。

東京府 九十三里〇二町 米澤市 十二里〇六町 鶴岡町 二十七里二十町

福島縣	二十四里廿二町	新庄町	十六里〇八町	藤島村	二十五里十二町
宮城縣	二十里〇二町	楯岡町	六里二十九町	長井町	十二里廿七町
岩手縣	六十七里廿八町	天童町	三里〇七町	高畑町	九里二十八町
秋田縣	五十五里〇二町	上ノ山町	三里十七町	加茂町	二十九里〇四町
新潟縣	四十九里十二町	寒河江村	四里十三町	谷地村	四里十九町

山形縣廳 山形市旅籠町にあり。即ち市の中央とす。建物は明治九年縣令三島氏の設立に係るものにして、羽前國二市十郡羽後國一郡を管轄す。包容せる民口凡そ八十五萬と言へり。

山形地方裁判所 同じく旅籠町に屬す。宮城控訴院の管下にありて、縣内六所の區裁判所を管轄す。六所の區裁判所は即ち山形市旅籠町、最上郡新庄町、米澤市越後番匠町、西置賜郡長井町、西田川郡鶴岡町、飽海郡酒田町(羽後國)にあるものこれなり。歩兵第三十二聯隊(舊山形城) 即ち舊山形城にあり。市の西部にして、城は一に霞ヶ城と稱す。聯隊は明治二十九年の設置に係る。周圍凡そ一里、繞らすに土壁溝渠を

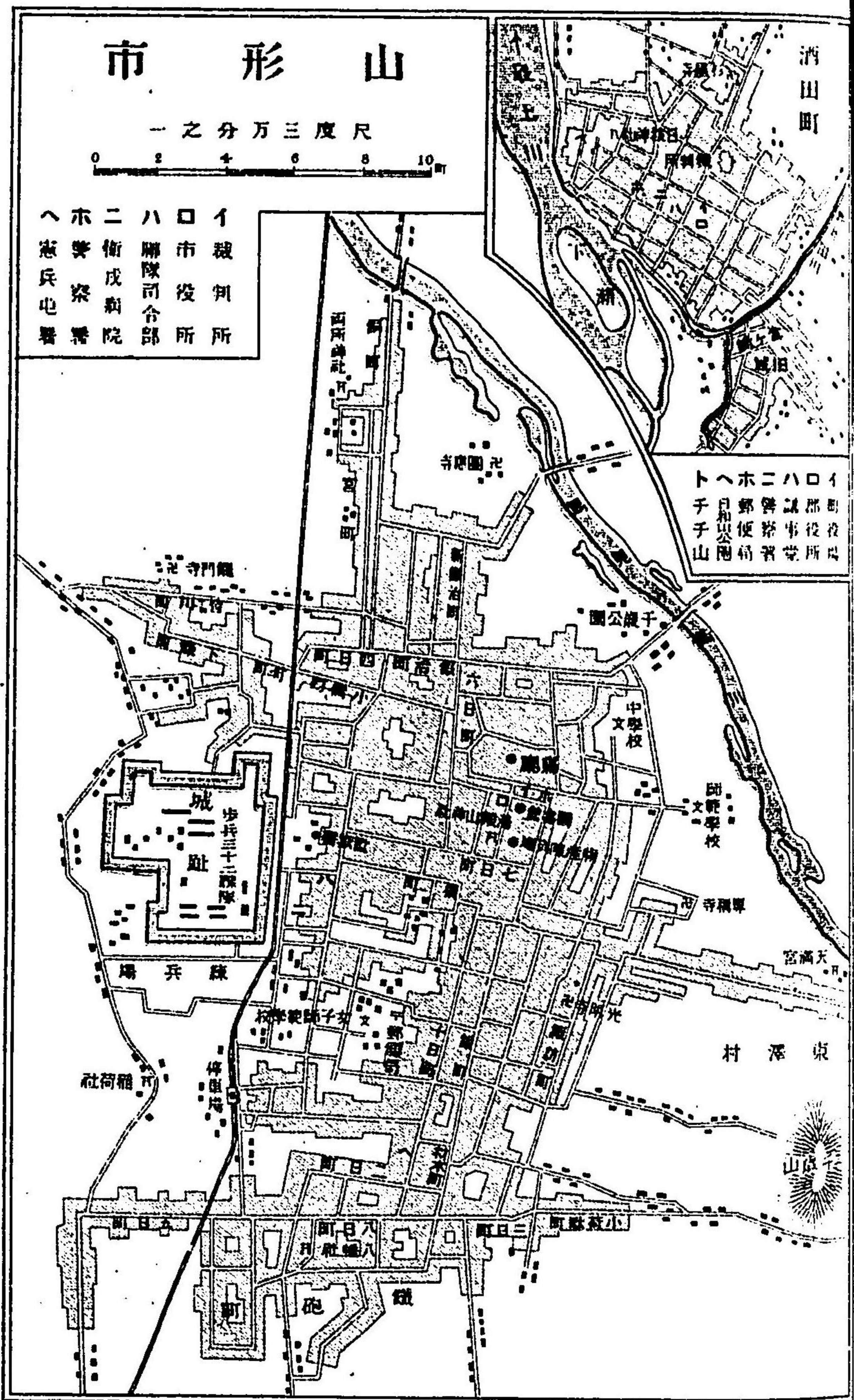
以てし、各兵舎整然としてその内に羅列し、管内の區域尤も曠大なり。縣志提要曰、山形城霞城と號す。天平年間、大野東人創建すと。延文元年、斯波兼頼奥州大崎より移住し、城廓を修理してこれに居り、子孫最上を氏とす。十四代義俊に至り、長臣等相争ひて整理亂れ、遂に改易となる、これを元和八年となす。同年十月鳥居忠政、二代、寛永十三年保科正之、同二十年幕府料となり、正保元年松平直基、慶安元年より松平忠明、二代。寛文八年より奥平昌能、二代。貞保二年、堀田正仲、同三年松平直矩、元祿五年松平忠雄、同十三年以降堀田正虎、三代。延享三年松平乘佐、明和元年松平正容へ附し、又幕料となる。同四年より秋元涼朝、四代。弘化三年より水野忠精、同忠弘、これが領主たり。封五萬石。明治二年六月忠弘江州朝日山に移封、尋で廢藩となり、本城は縣治とせられ、後陸軍省に屬し、兵營となる。

六榎八幡神社 山形市鐵砲町にある縣社なり。大なる榎樹六株あるよりその名出づ。傳へて、天平九年鎮守府將軍大野東人秋田の夷征討の際國家防護の爲め石清水八幡を

勸請せしものなりと。又一説には康平六年源頼義の勸請する所なり、故に陸奥の苦を抜く意より六榎と稱せりと。境内老樹蔚蒼として天空を蔽ひ、白鷲常に其樹梢に棲む。寔に幽清の神境なり。猶、同町に天台宗寶光院あり。

最止氏墳墓 始祖斯波兼頼の墳墓は七日町光明寺にあり。十一代義光の墳墓は三日町光禪寺にあり、又同寺は義親義俊の古墳をも存す。

專稱寺 七日町字寺町にあり。文明十五年蓮如上人の弟子願心法師の開基に係り、本堂欄間の猿の彫刻は頗る有名なり。山形縣地誌提要曰、此寺本堂の四隅に土偶あり、梁を昇る状を作す。體度活るが如し。胸膈に傷痕あり。傳へ言ふ、曾て獵者あり、視て以て怪物と做し、一再銃撃したるに因れりと。猶、かの寺に就て哀れなる物語一あり。即ち義光物語に曰、義光公御秘藏の御娘、年十六、おいまの前といふがあり。奥羽兩國にならびなき美女のよし、關白秀次公聞及ばれ頻りに御所望なされ候故、京都まで遣されけるところ、對面さへなきに怪事出來り、秀次公高野山にて御切腹、公



のおもひ者三十六人六條河原にて害せられ給ふ。義光公の御娘もその内なり。義光公
 これを聞召、御愁傷かぎりなく、即ちその寺に菩提を弔はせ、更に地を給はり、堂塔
 庫裏残らず建立あり。爾來一向一派の觸頭なり。
 烏海月山兩所宮 縣社にして宮町にあり。一に武門吉事宮と號す。康平六年、源頼
 義賊徒平定の爲勸請する所なり。後承平年間義經、寶澤村炭焼藤太の子吉次信高なる
 ものに命じて宮殿樓門華表等を修築せしむ。最上義光に至り復た修築を加へたり。猶、
 同町に國分寺あり。
 千歳公園 市の東北薬師河原にあり。元、柏山寺の境内を以てこれに宛てたるもの、
 馬見崎川其東を流れて風景凡ならず。薬師堂は園の中央にありて、草創は頗る古く天
 平年中聖武天皇僧行基に勸して一國一字の國分寺を創立したるもの、一なり。毎年四
 月八日の大法會には、賽客遠きより至り、境内殆ど立錐の地なきに至る。又、園内に
 招魂社競馬場あり。

以上揚げたるもの、外、猶山形市に法祥寺あり。東郊小白川村に天神祠あり。

唐松大悲閣 東澤村大字妙見寺にあり。弘法大師の御作にして、最上札所第五番の

靈場なり、堂宇周圍四間高さ七丈餘、山腹に聳立し、前面馬見ヶ崎川の源泉を帯び、

風致國內屈指の勝景にして、所謂京都清水に彷彿たり。紀平洲の遊記參看すべし。

千歳山公園(阿古耶松址) 山形市を距る東南里餘、瀧山村字平清水にあり。園の南

十餘町に千歳山あり、故に名く。山容倒扇に似て蒼松簇生す。西麓のや、平斜なる所

より望めば、白鷹山西南に聳え、その麓沃野茫茫、山形市街の瓦甍は一眸の下に集り、

曠目快豁、風景絶佳の地なり。而して園はもと砂磧不毛の地なりしも、明治十年開

きて水石花木の觀を設けしが、後又荒廢に歸せりといふ。而して著名なる阿古耶松は

同公園内熊野神社の傍にあり。今、枯槁して其の樹根のみを存すと聞く。古來傳へて

陸奥信夫の牧主中納言藤原豊光の女阿古耶を葬る地なりと稱す。側らに寺あり、萬松

寺と號す。阿古耶開基の古刹にして、境内に藤原實方の招魂碑あり。實方は、一條天

皇の勅願を蒙り、陸奥に謫せられ、阿古耶の松を探りて各地を彷徨すれども、其所在を知らず。一日老翁に逢ふ、曰く、阿古耶の松は今出羽國にありと。將に羽州に到らんとし、途に名取郡笠島に死す、實に長徳四年十一月なり。後其女父の遺蹤を弔して碑を建つ即ち是れなりと。或はいふ、此地は實方の遺骨を葬る處なりと。然れども實方の墳墓と稱するものは今陸前國名取郡愛鳥村にあり、信じ難し。猶、この地ぞ眞の阿古耶松所在地なるやに就てすら異説あり。夫木集曰「陸奥の阿古耶の松にこかくれて出づべき月の出でやらぬかな」。源君美の吊藤原實方墓に曰く「昔日藤公宅、禪林一逕深、東陲千里涙、北闕百年心、蒲葉無人識、松聲幾所尋、山中墳四尺、空有綠苔侵」。紀平洲「姑射神仙綽約容、千年山上只遺蹤、瑤琴似聽當時調、日暮秋風入古松」。又、千歳山の西を流るゝ小川を耻川といふは、曾て中時姫爰を過るとて、顔色の甚く憔悴せる様の水に映じて見えければ「いかにせんうつる姿はつくもかみわが面影は耻しの川」と詠せるに因みて名けしものといふ。

最上三華表 舊最上領に古華表三基あり。地中に埋没して僅かに上部笠木のみを露出す。其形も頗る古雅なり。一は南村山郡瀧山村大字元木にあり。傳へて弘法大師の藏王山を封ずる爲めに建てたるものなりとす。他の二基は東村山郡にあり。之を最上の三華表と稱す。一は面白山を封ずるもの、一は既嶽を封ずるものなりと説く。

龍山 風土略記曰く、山形辰の方に當り龍山てふ高峯あり。岩石巖々として登り難し。自然の石橋あり、洞穴その深さ知る人なし。六七月の頃、その洞穴の口にて、夜に入り光あらはるゝ事數度あり。誰人の焼といふことを知らず。土人龍山の火といふ。昔、慈覺大師登山ありて、千座の護摩修業せしといふ所に土壇あり。護摩堂山とも呼傳ふ。山の頂上に龍山権現の鎮座なりとて小祠あり。又、山の麓に方二十町程の平地あり、三萬の寺院の跡なりと。又、龍山の西の澤にも、三千坊舎の跡なりとて古き石橋、燈籠、石塔などあり。又、櫻田村に瀧山寺あり、これ古の山寺なりしが、後世この村に引かれしと言ひ傳へたり。西行山家集に曰、又の年の三月に出羽の國にこえて

瀧の山と申す山寺に侍ける。櫻の常よりも薄紅の色こき花にてなみたてけるを、寺の人々も見くらしければ「たぐひなきおもひいではの櫻かな薄紅の花の匂ひは」。

山形市より東方小白川、妙見堂、釋迦堂、滑川、新山、關澤、入丁平の諸村を經、笹谷峠(九六〇米)を踰え以て陸前の柴田郡に出づ。山形より峠まで約四里、峠より仙臺市まで十餘里とす。峠、一に有耶無耶の關と呼ばれたり。猶、釋迦堂に生釋迦如來あり。日本三釋迦の一と稱し、白馬山法來寺といふ。而も、奥羽の兩役源將軍義家の開基建設と傳へ、西明寺時頼の和歌をさへ傳へたり。此所に紀平洲の松平紀行の一節を引かん、曰く「新山驛、山形東界也、又行曰關根(關澤)驛、篠谷嶺西麓也、宿鈴木氏、山民敦朴、往々苦人、既有坂、舍馬而步、險甚、坂窮廣平如原、記石曰奥羽之界、所謂有耶無耶關也、或曰、在蚶瀧、左右每步而構、雪中遂之以行、霧深風寒、覺腹背粟起、走役茅茨、曰千壽寺、奥之所立以憩行旅也、屋破扇穿、一僧餽佛、衆隸環火而食、見客走讓火、煖酒以進、問所爲生、則採藥於山中云、因語、此山中有仙人瀑、險惡難至、一石數十丈、爲橋千澗、又有名石柱數枚、徑四五尺、長二三丈、如四五丈、其積之如橋材、固非蹤跡之所及、又非人力之所能、偶有行至者、怖不敢近、將指其所、雲霧大起、寺有鏡、曰大雪櫃以警迷者」。

山形市より北微西を指せば、約二里半にして最上川畔の長崎町に達し、更に最上、寒河江の兩川を涉りて、谷地町、富並を過ぎ大石田町に到るべし。而して、山邊町

は山形の西北凡二里、長崎町の南一里許り、酢川の左邊に在りて人口約五千を算す。

漆山驛 山形驛の次驛にして、北に四哩を隔つ。一小邑なり。南、千手堂に吉祥院あり。而して、この國の名勝山寺へはこの驛に下車して行くを便とす。青山延壽の遊記に曰「山形市北、有水曰馬見崎川、長橋長七十餘間、左月山而馳、月山帶雲、玲瓏如銀、至漆山村、有橋長如前、橋之下沙石占大半、水深纒及腰、意春時雪融、或大雨後、溢爲川、三里」。

吉祥院 兩羽街道の途中、出羽村大字千手堂にあり。天平年間の開基と傳ふる古刹にして、古名を羽留山圓福寺と號す。宗旨は天台にして、千手觀音像を以て本尊となす。源賴義の崇信厚く、又、義經の一子龜若の墳墓今に存せりといふ。寶物に、聖武帝御宸翰、慈眼大師真跡、源義經の和歌等帖あり。

立石寺(山寺) 漆山停車場の東二里弱にあり。法珠山立石寺と號し、山寺はその俗

稱なり。村は二口越の通路に當り、戸數凡三四百餘、四面群巒を環らし、立谷川はその中央を流れて、山腹に寺を置く。國內屈指の靈刹たるは勿論、その奇岩怪石の景勝は常に國人の口を極めて賞嘆するところ、されどこれを妙義、庚申の奇觀に比すればその規模甚だ小にして、未だ比肩するに足らず。而して、その怪岩奇石は第三紀凝灰岩の浸蝕作用によりて成れるものといふ。先、その縁起に聞くに、寺は貞觀二年、慈覺大師、清和天皇の勅を奉じて草創し、三國傳來釋迦多寶の像を本尊となす。後、國亂屢々相續き寺領を沒收せられしを、徳川家光改めて千四百二十石の朱印地を賜ふ。境内凡そ五萬八千餘坪、山寺山の中腹に位し、全山、奇岩怪石累々として重疊し、磴道紆繁、殿堂巍々として山腹に點在す。東に日枝神社あり。右に二の宮三の宮あり。左に聖如堂あり。又念佛堂あり。總門あり。中腹に至る磴路を登る凡六七下、漸く高く漸く險なり。溪間に梯橋を架す。右側に間陞洞あり。橋を過ぎて、石門あり、胎内竇と曰ふ。背後に堂あり、梯して屋上に登る。又堂あり、堂後鐵鎖を垂る、縋りて以て

陟る。岩上に松樹鬱生す。釋迦堂あり。溪に沿ふて下る。岩窟に觀音の立像を置く。小池あり、血の池と名つく。又登る數十歩、位牌堂あり。經堂あり。上頭に佛堂あり。奥の院と稱す。堂側卒塔婆を賣る。堂前に一井あり、獨鈷水と名つく、之を此山前面の極めとなす。總門より左すれば、入定窟あり。傍に間山堂あり。築造頗る壯麗。天狗岩あり、最も著名とす。高百尺餘、大柱を立つるが如し。寺の背の上に當れり。寺號又之に據ると云ふ。傍に松樹あり、緣攀して岩上に登るを得べし。岩の前面に洞あり十六羅漢の像を置く。其他山の中外佛堂僧院點々散布す。烏帽子岩、蓋岩等、皆形狀を以て名く。連理山茶花安樂梅垂水の觀音等あり。寺中寶物として、清和天皇より賜はりし立石倉印の鑄璽及び慈覺大師所持の佛具數點を藏す。又會式は毎年舊四月中の日の日を以て執行す。芭蕉與細道曰『山形領に、立石寺といふ山寺あり。慈覺大師の開基にて、清閑の地なり。一見すべきよし、人のすゝむるによりて、尾花澤より取つてかへし、その間七里ばかりなり。日いまだ暮れず。麓の坊に宿かりおきて、山上の

堂にのぼる。岩に岩を重ねて山とし、松柏年ふり土石老いて、苔なめらかに、岩上の院々、扉を閉ぢて、物の音きこえず。蛭をめぐり、岩を這ひて、佛閣を拜し、佳景寂寥として、心すみ行くのみ覺ゆ。しづかさや岩にしみ入る蟬の聲。』

所謂二口越とは山形市より起りて國界二口峠(一〇〇〇米)を踰へ陸前柴田郡に入るものにして、山寺の東南二里弱を上げれば界嶺に達し、尙ほ三里許りにして秋保温泉に出づべし。久保氏の紀文に曰、山寺に投宿してその翌、二口の峠を越す。磐神山のあたり、くすしき巖のたゞすまひ、水の流のおもしろきは、われ、幾度見ても目新しく覺えぬ。去年越えし折は、山櫻今を盛りと咲きて、山の峽には白雲たなびき渡り、景色殊にすぐれて見えけるに、今歳は季節のやゝ早き故か、かゝる眺の無きのみぞ口惜しがる。野尻を經、やがて程なく大瀑のほとりに來りぬ。こゝも吾が夢寐の間にも忘れ得ぬ一勝區なるか、今や雪解の水の漲りて、瀑身いたく太り、球簾千尺、さつと懸げ下るし、大壑の涼霧、長風に捲かれて靡くけしき、蒼海の底を穿ち、雪山の頂に登るにも似たり。留宿時を移して後、こゝを立ち去り、秋保の温泉に投宿す。

●●●面白山 一に山寺奥の院といふ。山寺千手院の東北凡三里にあり。岩角に繼く樹根を攀ぢ、所謂四十八瀧に沿ひて躋り、谷間に鉄漿の如きもの出づ。即ち面白権現の廣

前なり。又登る五十八町斗り、地藏瀧あり。瀑底一線水をはきて登る事丈餘、其奇比類なし。四十八瀧中有名なるは、藤瀧、雷瀧等にして、奇景一々枚擧すべからず。

●●●山寺三奇景 馬形の東一里許にして七瀧あり。清水、恰も白布を引けるが如く、嶮崖にかゝりて七重をなし、實に奇觀なり。地藏瀧天然石橋と共に山寺三奇景の目あり。

●●●天然石橋 馬形の東北三里にあり。路傍に鸚鵡澤あり。前崖に洞穴あり、人語返響して相應答するもの、如し、因て名くと云ふ。溪間に沿ひて岩石を攀登す。凡三里、幽邃なり。一大石あり、前に當りて横り、谿脈を塞く。之を前石橋とす。其下一町許、所謂石橋なり。長七八十間、中間幅四五間、左右幅三十四間、兩邊立直削るが如く、中央に丈餘の方穴あり。溪流穴を穿ちて直下する二丈許、一大瀑布をなす。神溝鬼鎖、實に奇怪と稱すべし。左右崖壁直立千仞、此に至て人跡全く窮る。

再び西に戻りて鐵路によれば、漆山の次驛に天童あり。

●●●天童町 即ち東村山郡の治所にして、人口約六千を有す。維新前は織田氏の城邑に

筆經文、同自刻梅檀木寶形印、同玉柏牛王刊を所藏せり。

羽前三山登山路 湯殿山、月山、羽黒山を羽前三山といふ。鐵道の便をかりてこの

三山を極めんと欲せば、この天童驛に下車するをよしとす。即ち、湯殿山へ登山する

には、この驛より寒河江町に出で、寒河江河を溯りて西根より登攀するを近道とす。

されど、人は月山は山形平野よりも寧ろ庄内平野より登山するを順路となせり。猶、

三山登山に關しては、後條庄内地方の部を參看すべし。

天童町の北より兩羽街道に別れて東稍北を指し陸前に出づる道路を關山越といふ。關山は楯岡町より東稍南
四里を隔て、郵便局あり、又煙草の産地なり。更に二里にして界嶺に到るべし。その標高六百二十五米、猶ほ
東に下ること約四里にして作並温泉に出づべし。猶、天童町の東北、川原子の東に水昌山あり。山に姫松多
く、山上に大和神社を鎮し、社側に水昌石あり。又石側に巖穴あり、古來その深さを知らずといふ。東國旅
行談に曰ふ「天童、楯岡より奥州の別れ路を關根越といふ。この邊にて水昌を生ず。然れども、俚諺に、水
昌を掘取れば山神崇を爲すと語る。げにや、關根越の山中に弘法の洞穴あり。その中を向ふ時、日に向ひて
見れば、牡丹芍薬その外四季の草花を彫つけあり。日にか、やき映じてその光五色を以て彩色したる如く、
美しきこと言ふばかりなし」。又、街道の北方國界に五所山あり。關山の西、観音寺村より七里にして頂に達

すべし。山中、瀧多し、四十八瀧の目あり。又雌雄瀧あり、共に百五十尺といふ。その他、辨天岩あり、聆
内竇あり。山上に姫松の烈風の爲めに蟠伏せるもの多し。

汽車は、月山の偉大なる山容を左に仰ぎ、最上川の清流に俯しつゝ、兩羽街道に相
伴ひて一直線に北を指し、頃刻ならずして、楯岡町に至る。

東根町 楯岡町の東南一里餘にあり。古來最上川地方に於ける著名の地にして、今
は街路の南に外れ、戸數約千を有する一小街に過ぎざれど、昔は最上唯一の名城とし
てその名高く、流石の最上義光もこの一城のみは容易に動かす能はざりしと言へり。
猶、蟹澤は東根町の西一里に當り、紅粉の産地を以て聞ゆ。

若松八幡神社 東根町の東北隅八幡山にあり。康平年中三浦下野守が鎌倉鶴岡八幡
宮より神璽を奉じたるものにして、爾來近隣の總鎮守たり。境内幽邃にして、老杉古
松の間に櫻楓を交へ、春秋の色彩自ら新たなり。社殿もすべて檜樹を用ひ、北村山郡
中、第一の社殿と稱せらる。

●●●● 楯岡町 天童の次々驛を置き、山形驛より十六哩、新庄驛へ廿二哩を隔つ。北村上郡、村上農學校等の所在地にして、人口大凡七千五百を有し、市街繁盛、家屋整正、蓋し、山形以北稀に見る所なり。而してその地勢山形平野の北端に居り、西方最上川へは一里弱を隔つるに過ぎず。町の東に甌岳の峙つあり。南一里を隔て、東根、長瀨に隣る城址のあるあり。八館の一にして、斯波兼頼の曾孫滿國始めて茲に築き、後、楯岡上總介居住せり。最上義光之を領するに至りて其弟光直を封ず。楯岡甲斐守と稱す。其後故ありて其封地を還し、僅に三澤山附近の地を領して民間に降り、性を三澤と改め佐平治と稱せり。其後絶て城主なく、諸藩の領地となりしが、維新の際幕領となれり。小松澤觀音、愛宕山、湯澤沼、喜早溜井等此地の名勝なり。西二十餘町に當り、基點橋あり。最上川に架する大橋なり。河中岩石點々恰も基石を列するが如し、故に此名を得。又、東方登路一里にして甌岳に登るべし。山は海拔千百米突、三千風の行脚集にその記事見えたり。

汽車は本飯田より少しく北に迂回し、次第に最上川に近づき、大石田にその停車場を設けり。(猶、最上川流域の頂參看すべし)。

●●●● 大石田町 今、人口二千五百、最上川の河港とも稱すべく、交通の便を一にこの水路に由りたる昔時は、例の川舟の發着所として頗る繁盛を呈せし港なり。今も川舟あり。されど最上川は日本三急流の一なる上、水の増減によりて舟路時々杜絶するを以て、汽車の開通せし今日はあまり多く此舟路に依るものなし。されど最上川の風景を悉く探らんと欲せば此舟に乗じて、悠遊庄内平野に至るを要すれど、そは大抵好事の士にして、多くは舟形或は新庄驛に下軍して磐根新道を越え、田川郡の清川村に出づるを普通とす。(庄内地方の頂參看)猶、舊幕時代にありては、この地に川船役所を置けりと聞く。一書に曰、近年磐根街道開かれしより、旅客多くその陸行車を擇べと、猶ほ貨物の重量なるは、水運に依る事舊日の如し。その水路二十二里、便風なれば、朝發夕臻の快速を見るも、その機會や稀なり。十六里、清川松嶺に達するを得れば上運と謂ふべし。

往々風雨悪しければ、下江の舟と雖も三四日を費す。また上江は挽きて溯る、凡そ五日路とす。元祿中奥細道に曰「最上川乗らんと、大石田といふ所に、日和を待つ。こゝに、古き俳諧の種こぼれて、忘れぬ花の昔をしのび、芦角一聲の心をやはらけて、その道にさくり足して、新古の二道に迷ふと雖も、道しるべする人しなればと、わりなき一卷をのこし侍りぬ。この度の風流こゝに至りぬ。」

尾花澤町 大石田町の東一里、兩羽街道の驛次に當る。人口四千餘、一山驛なり。

而してこの地は國內第一の積雪地にして、嚴寒の節に至れば、三四丈に及ぶことあり。越後の高田、飛驒の高山と相併せて、これを日本三雪と稱す。古松軒の東遊雜記に、この地の馬市の奇習を叙せし條ありき。又、元祿の昔、芭蕉翁この地を訪ふて曰く、『尾花澤に、清風といふものを尋ね、かれは富めるものなれども、志いやしからず。都にも、をりく通ひて、さすがに、旅の情も知りたれば、月ころ留めて、長途のいはり、さまざまにもてなし侍る。涼しさをわが宿にして寐まるなり』はひいでよ伺

屋が下の墓の聲「蠶飼ふ人は古代の姿かな」。猶、かの實方中將が陸奥の歌枕見にまかりて、人丸の詠を石に刻みし古碑は、同地柴崎氏の園中に存せり、一訪すべし。又、町の中央に諏訪神社あり。源義經の勸請する所と傳へ、毎歲舊三月二十七日、七月二十七日兩期の祭典盛なり。荒楯不動堂は、町を距る東南十町の所にあり、賽者多し。猶、御所神社は尾花澤の東北正嚴村の宮内にあり。これに、順徳院の裔孫を談じ、阿部氏の祖廟なりと説く。

大石田驛より舟形驛に至る。大八洲遊記曰「村山郡菅澤驛、有原頗曠、近新開墾、藝胡桃栗木數種、原中有開墾事務官宅、前安一化石、周以竹籬、蓋供皇上御覽也、石高丈餘、圍又一丈、化石之大者、世不多有、則盡過荻袋、有丹生川、有橋長八十間、而水流居十二三」。

舟形町 人口二千を有する一小邑に過ぎざれど、庄内地方に赴く要衝に當れるを以て、百貨輻湊す。又、この町より東して陸前玉造郡に達する一路あり。猶、舟形町附近に於ては、山影の迫るもの次第に深く、最上川はその北數町の所に於て、東より來

は鳥海山の偉然たる姿を望み得べし。新庄町は一小平野の中にある都邑にして、人口一萬に餘る都會なり。因に、新庄平野の廣袤は東西三里、南北七里といふ。

新庄町 鐵道、山形驛へ三十八哩、湯澤驛へ三十九哩を隔て、陸里、米澤市を距ること二十八里十四町、酒田町を距ること十四里十二町なり。地、鐵路を擁し、并に國道の衝に當り、常に郡内の首邑なるのみならず、又國內米澤、鶴岡に亞げる都會なり。民口凡そ一萬二千、最上郡役所、新庄中學校等の設置あり。物産には龜綾織を主として、新庄土鍋、草履表等あり。龜綾織は、龜甲を極めて細く織出したるものにして、製織頗る精巧を極めたり。

新庄城址 近世この城の二丸と稱せしは沼田の古館址なり。始め、最上氏の族日野將監これに居り、徳川氏に及びて、元和八年戸澤政盛常陸松前より來り封せられ、以て維新の亂に及び。此藩は天童藩と共に早く歸順の意を表したれば、従つて奥羽連衡軍の攻撃を受け、城廓これが爲めに全く焼失せり。又、城墟内に戸澤神社あり。隨

纂紀程曰「新庄、市街一條、草舎連櫓耳、而西南遠扣最上川、田疇平敷、郵落相接、封建時戸澤氏之所治焉、戊辰之亂、戸澤政實、爲賊兵所攻、衆寡不敵、北奔秋田、城址今闕爲市坊、驛北招魂社、紀戊辰戰死者」。

端雲院 新庄町の東北隅字十日町にあり。禪宗曹洞、明德二年の創建にして、戸澤家盛の開基に係り、開山を九阜宥鶴和尚といふ。本堂の背後に戸澤氏累世の廟あり。結構最も壯麗を極め、周圍には楓櫻數十株を栽る、風景亦秀麗なり。而して、當山は元と戸澤家の香華院と定められ、寺領五十石を領し、郡内曹洞宗の録所にして、今尙は四十八ヶ寺を支配せり。

新庄町の北に於て、鐵路と國道とは東西に相離れて各々北を指す。鐵道車驛は新町、釜淵の二驛を置きて、及位(ノソキ)驛に至る。而してこの驛に於て新庄より眞直に來れる國道を相會せり。國道は、新庄の北四里に於て金山村の一山驛を有す。山影水聲、已に人寰に遠き一山驛なり。大窪詩仙の「六月朔、新庄道中望鳥海山」の詩に曰「曉風猶覺袷衣寒、十里松林十里山、恰是江城餐雪日、來觀鳥海白摩顏」。及位停車場より杉峠を(四六〇)米、矢立杉あり)踰ゆれば、幾程もなくして羽後院内驛に至る。

○庄内地方 田川、飽海二郡の汎稱なり。中、川北の飽海郡は縣治を同うすれど、羽後國に編入せられたり。地勢平原をなし、月山、葉山の嶙嶙と、最上の河流とを以て全く最上、置賜地方と區劃を異にせり。風俗人情また自ら異なり、國內に於て別に一小天地を形成せり。その平原東西凡五里乃至二里、南北凡十五里といふ。農業盛にして沃野遠く開け、米穀の産多き事國內第一といふ。人口の密度又國內に冠たり。景勝の重なるものは、羽後三山を始めとして、最上川の沿岸また勝區多し。鶴岡町を以てその首邑となす。東北風談に曰「酒井氏鶴岡に居城せり。邦内誠に廣し。十四萬石とは言へどその實四十萬石も收まるなり。國廣く民多く、無用の武士甚だ少し。城下千軒に過ぎず。於是大に富めり。民の窮するもの一人も見えず。」而して、この庄内地方に赴くには、奥羽西線の舟形驛、(又は新庄驛)に下車して本合海村に出で、最上の沿岸即ち所謂磐根街道を過ぎて、まづ東田川郡の清川村に出づるを順路とす。

舟形町より四に入れば、葉山、月山の連山を左にし、鳥海山の支脈を右にして、その風景の瀾大なる、思は

舟人をして襟を披いてこれに向はしむべし。一小嶺を越え猶ほ行くこと一里にして本合海驛を得。河流は大石田より西北に奔流し來りて、直ちに本合海驛の西に達す。水程九里なり。陸奥千島に曰「大石田へ出で坂田への乗合を求め下る。爰こそかの最上川、聞き及びたるよりも川幅廣く水早し。左右の山つゞきに瀧數多あり。中にも白絲の瀧はけしき勝れたり。この川筋坂田まで二十一里、その中に、船關は、なき澤、清水、古口、清川、この四ヶ所なり。みじか夜を二十里たり最上川。大八州遊紀曰「發大石田、赴清川、清水距此十六里、乘船同乗者七八人、篷下蹲居、下川二里、天明、寒甚不敢出頭、日高始出立舷上、兩岸層巒複嶺、毘臨不斷、秋樹經霜、猩紅映日、翠杉青松、粧點其嶺、龍田紅楓世之所稱、未知孰伯仲、川流屈折、繞山而流、遙望唯視高巒聳天、水勢如窮忽又渺漫無涯、柳子厚所謂、舟行如窮忽又無際者、范成大嘗履其地云、碧流淙淙不可杭、春漲或可杭、然則子厚語之妙、實不知其境也、至合海村、有崖色白如雪、側立千尺、紅樹翠蔓、掩映其上、猶如一大絹上畫秋樹紅葉、真可稱奇絕、至他則其色稍帶紫黃、唯此崖樹殷紅如火、不知何故、下合海數里、有白絲瀑布、紅樹隱映亦可愛、夕至清川驛。古松軒東遊雜記曰「新庄を出で三里、清水といふは最上川にのぞみ、これより酒田へ航路十九里あり。そもこの最上川、海内第一早き流にして、恰も瀧の如し。左右は大山峨々として天に聳えたれば、舟の危きこと限りなし。」

本合海村 最上川の東岸に位し、新庄よりの陸路二里とす。その道路の要地に位せると、最上川舟楫の便に當れるとを以て、人車繼立所、貨物荷揚所等あり。されど畢

竟するに山間の一小邑なるに過ぎず。陸路古口へ二里半、水路清川へ六里とす。

八向山 本合海の渡頭の前に峙つ峰巒にして、白灰色の奇なる絶壁なり。山腹に八向神社を鎮す。康暦二年の創立と傳へ、その好景の地たるは、最上川舟行の旅客の常に仰望する所なり。川田壘江曰「合海又作鮎貝、義經記謂之合川津、北崖綠樹蒼蔚、培樓倚岸、曰矢向山、山屋而野、鮎河來會、水成丁字」。

肱折温泉 本合海村を距る三里餘、大藏村字南山の山中にあり。炭酸泉及び鹽類泉に屬し、リヤウマチスに特效ありといふ。又、村の東北十五六町大森山に地藏倉の奇巖あり。大巖窟にして、長さ十五六間、深さ十五六尺、巖の凹凸甚しく嶄絶、その窪める所に細穴あり。その數幾千なるを知らず、俗にこれを縁結の穴と言へり。又奥の院に孕松あり。小松淵の蛇窟は肱折を距る東北五六町餘にあり。高さ十四丈許りの怪岩にして、突兀山の如く、上に小松數株あり。岩頂に窟あり、巖淵に通ず、その深さ十數丈を有せり。また、月山への登山路肱折口あり、山路六里、至難なり。

永松鑛山 大藏村にあり。採掘面積六十一萬坪、地質は第三紀の凝灰岩及び泥板岩より成り、輝石富士岩、岩脈をなして諸所に貫入せり。鑛脈は數條ありて、何れも南北の方向を保ちて、相平行し、東に急斜す。其幅概ね一尺内外、オクビ鍾は其の主なる者なり。鑛石は黃銅鑛を主とし、多少の黃鐵鑛、閃亞鉛鑛をも交へ、石英を脈石とす。

今神温泉 肱折温泉の西北一里、角川村大字長倉にあり。一名を今熊野鑛泉と稱す。泉質は硫黃に金を混じ、又鹽氣あり。土地は高燥にして空氣清快、癩病、梅毒及び關節痛等に偉効ありといふ。縣志提要に曰く、地に蛇蝎多し。且つ、高倉山の奥三里にありて、雪深く、常住するを得ず。夏秋の際僅に草廬を結びて浴客を待つ。その設け極めて粗鄙なり。然るに神驗の稱あるを以て來浴するもの毎歲萬人に下らずと。又、岷々たる山嶺に奥の殿あり。遠くは新庄城下を指點すべく、近は湖水ありて水禽常に之に遊び、風景亦愛す可し。旅舎は皆茅茨剪らず、宛太古の風あり。該浴場に通ず

る路二つあり、一を聖居路とし、他の一を角川路とす、角川路平易にして、絶景多く、左顧右盼處として仙境ならざるなし。

最上川は本合海町より烏海火山群と出羽丘陵との相交接せる峡谷を東流すること六里にして清川驛に至る。この峽流を俗に山の内と稱し、最上河中最も奇勝の地なり。ことに、その特色としては、兩岸の山脚相迫り、この峽所は十四五町に過ぎざるに拘らず、川は純然たる大河の越を成し、水は溶々として深潭を爲せる箇所少なからず。殊に篷帆を擧げたる舟の絶えず上下するは、この川を描きて他に求むべからざる所にして、宛然南宗の風景畫を見るか如き心地するなり。かの古來稻舟と稱して多く國風にも詠せられたるは、即ちこの川を上下する小舟の謂なり。また往時源義經のこの峽流を上りしこと義經記に散見す。崇徳院御製「最上川網手ひくとも稻舟のしばしのほどはいかりおるさん」。西行法師「強くひくつなくとみせよ最上川その稻舟のいかりおるさで」。民部卿爲家「最上川はや瀬に過るわれ舟のとこほるべきこの世とやみる」。説人不知「最上川のぼれば下る稻舟のいなにはあらずこの月ばかり」。平澤氏曰「清河驛以東、以船行、兩山之間、急流駛快五里、且挽且刺、與瀨川之溯洄相似、但水淺山不峻、是以境亦不甚奇、然兩岸蒼翠、時々襲人衣、有飛泉、曰白絲瀧、土人曰、此地有四十餘潭、皆在川左右」。陸路は、本合海より川を渡りて畑、蕨岡の諸村に入り、これより漸く山中に入る。これ、庄内、最上兩平野を連絡する要路なれば、行客繁く、到所に休茶屋あり。夏の日などこれを過ぐれば、清水に白き紫麵を浸して旅客にすゝむるなど、何となく昔の名所圖繪中の挿畫

を想起せしむ。山中に入らんとせる所に、殊に山中第一と稱する清冷なる清水を有する茶店ありしことを記憶す。大瀧、東瀧等の奇を見て、外川村に至れば、山いよく奇にしていよく遠なり。この岸に仙人堂あり、更に二里にして草薙に至れば、對岸に白絲瀧あり。

仙人堂 古口村字外川山、即ち最上の北岸にあり。古來の古祠にして、日本武尊を祀る。沿岸の地、名所多し。拾石、河童瀧、組岩、仙人瀧、座頭瀧等なり。後山は醜森蔚、古來不伐と稱す。今は之を外川神社と號せり。

白絲瀧 草薙村の對岸に懸る。水の増減に由りて姿を異にすることあれど、長さ七丈、幅四間と傳へ、殆ど山の頂より落下するが如き趣を呈し、嬌態實に名狀するべからざるものあり。本邦、瀑布多しと雖も、この瀑の如きは多く他にその類を見ざる特色あり。川田斐江曰「拜草薙神祠、祠東洞穴、靈泉出焉、居民數戶、待客爲活、曰土湯郷、沿最上川、隔水望白絲瀧、時急雨一過、水勢頓加、與往日所觀稍異其趣、此距古口二里餘」。夫木集源重「最上川瀧の白絲くる人のこゝによらぬはあらじとぞ思ふ」。

義經記曰「かくて、御舟をのぼするほどに、せんじやうより落きたる瀧あり。北の方これをば何の瀧ぞと問ひ給へば、しら糸の瀧と申しければ、北の方かくぞつヶ給ふ。最上川せいの白波せきとめよらでぞとほる白糸の瀧」最上川いはこす波に月さえてよるおもしろき白糸の瀧」と口吟みつゝ、よるひの明神、かぶとの明神ふし拜み参らせて、たかやりの瀧と申す難所をのぼせ煩らひおはする所に、上の山の端にましろの聲しければ、北の方かくぞつヶ給ひける「ひさまはすうすは、ゆみにあられども高屋にさるをいて見つるかな」。奥の細道曰「最上川は、陸奥より出で、山形を水上とす。ことに、はやぶさなどいふ難所あり。板敷山の下を流れて、果ては酒田の海に入る。左右山おほひ、茂みの中に舟を下す。これに、稻積みたるをや、稻舟とはいふならし。白糸の瀧は青葉のひまゝに落ちて、仙人堂岸にのぞみ立ち、水漲りて舟あやふし。「さみだれをあつめて早し最上川」。

●●●●●
清川村 草薙より一里にして達す。本合海より通算して六里、即ち山ノ内の西口とす。最上川はこの附近に於て東田川郡の平野に落つ。驛頭頗る山影雲影に富み、風情忘るべからざるの土地なり。維新の志士清川八郎はこの地より出づ。行程、鶴岡へ六里、酒田へ七里とす。また月山附近に源を發する立谷川はこの驛東に於て最上川に會湊す。古松軒の雜記に曰「清川は舊地にして、古書にあらはれ、此に五聖王子とて義經

記にもしるき神社あり。この社に義經公奉納の太刀あること聞及びし故に、土人に尋ね見るところ今は焼失してなしといふ。清川よりは酒井侯御知行所にて、豪家も見えて風俗もよろしく侍りし。人足に出るもの衣服賤しからず、馬までも肥ふとり、形も美々しく、山川草木、上々國の風土なり。」

●●●●●
五所王子社 清川にある古祠なり。義經記に曰く「かくて、田川を立給ふ。大泉の庄大梵寺を通らせ給ひ、羽黒の御山よそにて拜み給ふにも、御參籠の御志おはしましけれども、御産の月已に當らせ給ふによろづ恐れをなして、辨慶代り御代官に参らせらる。残りの人々はつけのかた浦へかゝりてよかはへ参りあふ。その夜は五所の王子の御前に一夜の通夜あり。この清川と申すは羽黒權現の御手洗にて、いと清き流れなり。これにて垢離をかき、權現をふし拜み、無始の罪障を消滅するなれば、爰にて王子々々の御前にて神樂など参らせ、思ひくのなれてまひし給へば、夜もほのくくとあけにけり。やがて御船に乗給ひて、清川の船頭をいやでんのかみと申し、御舟支度

して参らせけり」。

新風土記曰、御殿林の森林は清川の東にあり。立谷川をめぐらし、川を隔て、腹巻山屏立す。板敷山、陣ヶ峯等の峰巒相連り、北方最上川を挟んで黒岩岬あり。田川、鉦海兩郡の咽喉と稱すべく、從來東西の通路、必ず最上川舟往來となせる故、頗る要衝の地なり。戊辰の役、大山參謀は腹巻山に陣して、御殿嶽に據れる庄内兵と砲戦す。これ、即ち奥羽戦争の端始なり。川田龜江曰「腹巻山、有懸瀑、稱界瀧、即田川最上兩郡分界所、戊辰之亂、鶴岡軍據御殿林、五師涉河進撃不利、蓋是時同盟拮命者二十餘藩、大抵觀望勝敗、獨鶴岡出兵、進侵略鄰境、設令仙米歸順運在敗後、則兩羽二十郡爲賊有、亦未可測、危矣哉」。拙著「最上川」に記して曰、「路上の石に車の輪の輾れるに愕然として驚き覺れば、何時の間にか狩川の驛は過ぎて、渴するばかりに遠く望み來りし清川附近の山翠は既に早くも眼前咫尺の間にある。ことに綠葉の山嵐に搖曳せる、俄かに別天地に入りたるが如きを覺ゆるに、われは喜ぶこと一方ならず、今までの苦熱も全く忘れ果て、一盪その清く冷かなる空氣を吸ひぬ。美しき清川の驛に近く、路は風情ある松原にかゝりて、その盡くる所に初めて最上川の溶々たる流を見たる時、わが心は如何に躍りわが胸は如何に震ひし。更に、驛の旅亭に至るに及びてわが心は愈々動きぬ。見よ、この驛の如何に古風の趣を備へたるかを。見よ、この驛の如何に名所圖繪中の旅舎に似たるかを。二階づくりの堅牢なる家屋は、涼しげなる數箇の室を明け放して、客を迎ふる主婦の朴訥なる中に無限の誠實の口をこめたる、わが今回中始めての快き待遇なり。かくて導かれて、二階に上り、貼ありやと問へばありと答ふ。前山の翠微は既に咫尺の間より起りて、限りなきの涼意は來つてこの一室の中に入れり。茶を喫しつゝそれとなく四邊を見れば、前にははちすの花咲ける垣ありて、桔槔の高くあがる奥に一軒の茅屋あり。それより一道の大路を隔て、彼方の大屋の二階を明放ち、其所には糸を繰れる一家の光景極めて明かに認められつ。中央には一箇の大なる座繰車置かれて、その傍には赤き袴を十文字に繰取りたる十七八歳の少女、後向になつて頼りに雪より白き糸を繰り居れるが、その奥には母と覺しき老婦、家の下婢など、皆な熱心にその業に従ひて、をり／＼清く玉の如き唄聲、その喧しき繰車の響に交りて高く聞えぬ。……かくて、三十分の後にはわれは繼ぎ替へたる車の上に揺られて、其の風情ある清川の驛を去りつゝあり。驛路の最後の家をも過ぎ、面白き形したる松原をも越れば、兩山の間を流れたる溶々たる最上川の流は深碧なる水をわが前にたゝえて、をり／＼激する水聲は恰も遠笛を聞くが如し。何等の奇景ぞ、われは最上川をかくまで卓れたる河流とは夢にも想像したる事なかりき。路はその川の右岸を縫ひて、山岳の風曲、翠嵐の指曳、殊にその山勢の迫りて迫らざる、その河身の深くして溶々たる、最もわれの心を惹きぬ。われ、天下を漫遊して、山川の美を觀ること甚だ多し。されどわが日本の地勢の狭少なる爲めか、未だ山中を流れて然も溶々たる大河の趣きを爲したるものあるを知らず。富士川の壯、熊野川の奇、孰れも優に天下の奇景たるに足ると雖も、然も、兩岸の水漲溢して溶々船を泛ぶるに足るの景に至つては、遂に大陸の一小流にだも及ぶ能はず。常に以て憾となせしに、今この東奥の僻地にゆくりなく最上川の一景を得て、以てわが多年の渴を醫すを得たるは豈喜ぶべきの限りにあらずや。

●狩川村 清川驛より一里とす。道路はこの地より四方に放射して、平野の間を走り、
 一は酒田地方に向ひ、一は西の方庄内の地を指さす。驛南一里許り大字三ヶ澤に善光
 寺如来堂あり。閣浮檀金の如来と稱し、元和八年これを安置す。七月の盂蘭盆節に賽
 客の群集するもの多し。青山延壽の遊記に曰「發清川、循村西馳里許、出狩川驛、驛
 道岐爲二、右趨酒田、左則鶴岡、即左、土地平曠、瀨望水田平疇、無一邱垤、間有聚
 落、灌木成林、舊酒井侯十萬堤封、殆在一望中、地亦膏腴、出山形上、唯田旁往々芦
 葦叢生、田亦有芦芋苗生者、蓋屬近時開墾」。

狩川より道を左に取れば、藤島驛を経て鶴岡町に至る。藤島驛は即ち東田川郡々衙の所在地にして、田川平
 野の略々中央部に位す。驛の西に六所神社あり。また、藤島館址あり。鶴岡へ二里、酒田へ五里とす。
 狩川より道を右(西北)に取れば、廻館、余目、新堀等の諸邑を經、凡五里にして酒田港に達す。この道路平
 坦にして、四方に山嶽を見、中に鳥海山の天香を摩せるを望む。最上川は溶々として此の間を流れ、遂に兩
 羽橋の一大虹霓を見る。兩羽橋より酒田町へ二里餘なり。鶴岡、酒田間を通する街道は、新堀に於てこの道
 路と合す。

●羽前三山 所謂羽前の三山、羽黒山、月山、湯殿山は、最上川上流の平原と庄内平
 原との間に横れる山脈中にあり。月山最も高く且大に、羽黒、湯殿のことは實に其
 驥尾に附するに過ぎず。唯、其月山に比して甚だ名高きは、蓋し宗教的迷信によりてな
 り。最上平原よりも登路甚だ多けれど、普通は東田川郡手向村の羽黒神社より始むる
 を本道とすれば、今は此處に記すこと、爲せり。大日本地誌曰く、「月山は庄内平原の
 東南隅に隆起せる噴火山にして、北方鳥海山と相對峙し、海拔千九百五十九米を有す。
 火山の特相たる圓錐狀の外貌を缺き、庄内平原より之れを瞰望すれば、傾斜極めて緩
 慢にして、彼の鳥海山の如き峻嶮なる山相を呈せず。裾野は北、西兩面に最も廣く曳
 けるを認むべし。其の頂部は唯、幅廣き一連の山脊南北に走るのみにして、舊火口の跡
 明瞭ならず。然れども此の山脊と之より西方に岐れたる稍、低き山背齋藤ヶ森とを連ね
 たる者は半月狀をなし、思ふに月山最後の大噴火口を示すものにして、西北の方即ち
 庄内平原に向ひ、多量の泥流を溢流せしものなり。此の山背に圍まれたる金剛澤溪谷

の上流、齋藤ヶ森の北に於て二溪流の會點に近く、西普陀落の爆裂火口あり。現時其の跡よりは微温の鑛泉を湧出し、近傍の岩石は分解靈爛して、成分鑛物は概ね溶解して去られ、其孔隙は全く硫黄にて充たさる。北の麓の小村手向村よりの登路彌陀ヶ原の東に當り、立合澤の上流地に於て、東普陀落と稱する處あり。此處に一小湖あり。四邊絶壁をなす。蓋し亦一の爆裂火口址なり。月山山頂より齋藤ヶ森を過ぎ、西南湯殿山に向ふて下る道の南方に姥ヶ嶽あり。尙ほ之れに連続して西方に仙人嶽、小仙人嶽等あり。何れも獨立の噴出をなせしものなるべし。湯殿山は月山の西南山腹の一局部を稱するものにして（山は山にあらずして敬語より來る）、附近地は曾て月山より噴出せし輝石富士岩の塊片を混ゆる泥流より成り、其中より湧出する温泉あり。其の沈澱物に水酸化鐵を含みて黄褐色を呈し、堅實にして鱗狀に堆積し、附近の岩塊を被覆して美麗なる小噴狀のものを作り、温泉は不斷進流して其の面を沾ふし、一種の奇景を呈す。年々數千の道者參拜し、湯殿山の神體として隨喜渴仰の涙に咽ぶものは實に

この岩塊に外ならず。羽黒山は月山の北方、手向村の東方に在り。月山、湯殿山と相並びて夙に羽前の三山と並稱せられ、道者の信仰頗る厚きものなれども、高さ僅に三百六十米に過ぎず。第三紀層より成れる臺地狀の山にして、地形上敢て著しきものにあらず。芭蕉の奥細道に曰「六月六日、羽黒山に登る。岡野佐吉といふものをたづねて、別當代會覺阿闍梨に謁す。南谷の別院に舍して、憐愍の情こまやかにあるしせらる。四日本坊に於て、俳偈興行ありがたや雪をかをらす南谷」五日、權現に詣づ。當山開關能除太子は、何れの代の人といふことを知らず。延喜式に、羽州里山の神社とあり。書寫黒の字を里山と爲せるにや。羽州里山を略して、羽黒といふにや。出羽といふも鳥の毛羽を、この國の貢ぎに奉ると、風土記にはべるとやらん。月山、湯殿と併せて、三山とす。當時、武江東叡に屬して、天台止觀の月明かに、圓頓融通の法の燈火かゝけ添ひて、増坊棟をならべ、修驗行法を勵まし、靈山靈地の功驗、人貴び且つおそる。繁榮とこしなへにして、めでたき御山といふべし。八日、月山にのぼる。

喜年間、冷泉天皇より勅額を賜はり、且つ奥羽の總鎮守たるべしとの勅宣あり。當時源義家も亦深く神徳に感じ、大に社殿を造營せり。爾來代々の武將國守等尊崇の意を盡し、降つて徳川氏の世に至り、將軍綱吉より、千五百石の社領を附せられ、明治六年國幣小社に列せらる。攝社蜂子神社は蜂子皇子の靈を祭り、境内(本社より南二町)字魔所といふ處に皇子の御墓あり。又古鐘あり、口径五尺五寸、長八尺、傳へて、御宇多天皇の建治年間に鑄造する所なりと云ふ。これより月山を越えて湯殿山に至る。

●月山 羽黒山より山を越え、谷を渡り、或は岩石に攀ち、或は絶壁に縋り、行くこと六里、漸くにして月山の絶巔に達す。その岩石磊々たる間に一社殿あり、石を以て四面を疊み、危磴纒かにこれに通ず。即ち官幣中社月山神社にして、山は海面上實に六千五百尺なり。山容は、渾大にして臥牛の如く、その絶頂に於ける眺望の絶佳なる、西は日本海の淼々として極りなき、北は鳥海山を隔て、羽後連山の波濤のごとく連れる、或は最上平原より陸前の連山、或は會津地方の遠きに至るまで、一つとして眼中

に集らざるなし。蓋し、天下の大觀たり。社傳に曰く、本社は神代の昔より月山の頂上に鎮座し、延喜式神名帳に載たる出羽國飽海郡月山神社是れなり。三代實錄に、貞觀六年二月出羽國正四位勳六等月山神社に從三位を授くとあるを始めとして、屢々叙位叙勳あり。是より先き右中辨兼權守藤原朝臣保則、上古より征戰に方りて奇驗ありし旨を上奏し、元慶四年二月には、月山神社に正三位を授けらる。以て古來朝廷の御尊崇他に超え給ふを知るべし。其創建年月に至ては未だ詳かならざれども、崇峻天皇の御子蜂子皇子、推古天皇の元年、羽黒山を開かせ給ひ、尋で月山、湯殿山を開かせ給ひしと云へば、社殿を創建せられしも、亦當時の事なるべし云々。又、山中に鍛冶屋敷、毒水、腰掛岩等の古跡あり。大祭は毎年七月十五日を以て出羽神社に於て執行し奉幣使の參向、其他種々の古式あり。參拜者も亦多く七月中に登山するを常とす。長久保赤水「攀盡三山頂、崢嶸如柱天、路隨鳥鵲跡、人犯斗牛邊、月窟千秋雪、靈場五色烟、更疑入兜率、親自謁金仙」。

湯殿山 湯殿神社は月山の西南湯殿山上にありて、相互相距ること凡二里、地は幽邃の深谷にして、五味の薬湯噴出するの神域なり。社格は國幣小社にして、大己貴命少彦名命、大山祇命を合祀し、古來社殿を設けず、一の靈窟を以てその本社となせり。



湯殿山

即ち月山の奥院とも稱すべき地とす。參詣の諸人、この地を踏みて寶前に到り、天然に大神の御形を具へたる靈巖を三拜して親しく大神に見え奉りしものとし、神心の清爽なるを覺ゆといふ。夏期白衣行者の登山頗る多し。賽路は嵯峨として登り易からず。途中懸崖の側面に長十三間の鐵階と、百二十間の鐵鎖を設く。賽人は其階を踏み、其鎖をたぐり、匍匐して靈窟の前に出づ。以て其嶮なるを知るべし。又、溪澗には御瀧と稱する一大瀑あり。又、社地を一に戀の山とも云へり。一たび歩を運

ぶ者は年月を経るも此山を戀慕ひて止まず故に名くと。新勅撰集顯仲の歌に「戀の山しげき小笹の道わけて入そむるより濡る、袖かな」とあり。其他古歌多し。心齋先生遊記曰「謁湯殿、更欲登月山、右折攀亂石、白雲過脚下、疾如奔馬、飄渺似登天、得一店憇之、地有鍛冶宅址、抵絶頂、又置一店、即宿、時雷起山下、雨皆横飛、夜寒如冬、黎明起謁大物忌神祠、遂居高望日出、朝氣肅靜、綿雪布下寂然石動、四山高者惟露髻少焉」。

猶、三山登山路に就きては、最上川流域の頂の末部に參考すべし。日本山嶽誌に曰、「月山火山群中にて、羽黒山、月山、湯殿山は、「羽前三山」として、早くより世に知られ、奥羽、信濃、佐度、越後、五ヶ國の總鎮守と定められ、毎年七月十八日を以て例祭とし、參詣道客、平均二十萬人を下らずといふ。然れども嚴格に言へばこの三山は、殆んど一の月山として見るを適當とす、即ち月山なる一大消火山中の、溪間の一區域を湯殿山と稱し、山麓の一丘陵を羽黒山と呼べるものにして、決して三山鼎立せるものにあらず。然れども三山の名大に聞え、殊に三山に登るには、羽黒山より先づ初むる例なるが故に、今この山より順を追ひて、記さむ。羽黒山に登るに二道あり。(一)南道は山形、天童停車場よりするものにして、山形より西北車道、十

二里計にして、四村山郡本道寺村、志津に到るべし、(その間塞河江、白岩踏村を經)是より俗に御寶前と稱するところまで、路甚だ峻なるを以て、徒歩にあらざれば、能はず。「裝束場」より古草鞋山積するところを踏みて、月光山を右方に望み、大梵宇川の清流に沿ひ、道を西に取ること數時、東田川郡、湯殿山の神前に達す。山崖に竹籬を繞ぐらし、幣束燈光相映發す。こゝより温泉出づ、湯殿山の名因つて起れる所以なり。鐵製の梯を下りて澤に出づれば、所々に石像を置く。絶頂とおぼしきところに本社あり。海拔僅に八百尺の小丘陵なるを以て山の如き感起らず。(二)北道は最上川沿岸の清川驛、或は鶴ヶ岡或は酒田より狩野驛を經て、いづれも羽黒山北麓の手向村に到り、こゝより登るを可とす。(本道は、表口にて、前項所載の南道は裏口なり)。手向驛は全く月山道客のために宿坊を業とする屋舎、約千戸にて充たさる。村の突端より出羽神社の大華表を潜り、兩側皆老杉の道を行き、御坂川と稱する小溪を渉る。是より長さ十六町の石級を拾ひて上り、出羽神社(羽黒山大権現を祀る)に到る。即ち普通羽黒山と稱する地點なり。裏に一棟の行者堂あり。林中に孤居して、道客祈禱の場に供せり、こゝを仙人澤と稱す。次に月山に登るに七道あり、羽黒山よりするを本道となす。即ち前項記するところの仙人澤を少しく距れば「月晴し臺」(別瞰不二見臺)に達す。月山の裾野にして、月山の頂嶺を仰ぎ、鶴ヶ岡、加茂港、及び日本海の白浪岸を打つて回るところを下瞰す。是より傾斜緩漫なる月山の中腹、一望茫茫、草花の原を行くに、風物已に羽黒山と一變して、樹木を見ず。往々馬を放つを見る、凡そ二三里の間、鳥海山の威嚴ある秀貌の外に、眼を慰するものなく、只約一里毎に小舎ありて、湯茶、麩類、酒等を賣る。已にして曠野盡きて、山毛櫛の森林に入り、平清水、合清水、狩籠等を

經て、「御田の原」と呼べる沮洳の草原に入る。土俗月讀命の田植を初めたるところと稱す。小池多く、食蟲植物もうせんごげ充滿せるを見る。俗に「毒池」と稱して、近づくを忌む。御田の原は時に高低あり。鏡の如き小池點在して、高山性の植物多く、亂咲す。御田の原を出づれば、山頂嶺を壓して手に採らむばかりなれど、路甚だ近からず。一峰一峰、亦一峰と取次に登りて、遂に絶嶺に立つを得、海拔五千四百有餘尺、一大火山の火口壁殘存して、今に至れるもの、如くなれども全く崩壞して、其蹤跡を認め難し。手向村よりの登道は、裾野より圓錐の外邊に沿うて、火口壁跡の一部に達したるなり。是より西北に向へる降路は、峻急にして火口内壁に沿うが如き感あり。頂上の形は菅笠を伏せたるが如く、四圍は山足宏茫、曠野に連なり、西北不二形の鳥海山と比肩して、微茫の間に日本海を瞰、南には羽前、岩代、境の朝日嶽、吾妻山、藏王山、東より北には、陸前の栗駒嶽より、遠く陸中の岩手山と、頡頏す。狹義に解釋したる月山の境域は、東方立谷澤川、及び鳥川の水源なる、清川根を以て境となし、南方は湯殿山に隣り、西北方は姥ヶ嶽より金剛山を經て雨告山に至る。白刃を植えたる如き「劔ヶ峰」、又は「行者戻り」皆山頂、或は其附近に在り、羽黒山より月山頂まで、約六里。手向村より約九里。頂上神殿(岩塊を周圍に積みて小木造祠を安んず)籠り堂(結構陋なれど潤き教百人を容るゝを得)あり。月山を南下するには、志津口、本道口、岩根澤口等あれど、志津口を取りて、湯殿山を巡るを可とす。湯殿山は前項所載月山より志津道を取りて南下するや、路急斜にして時に峻阪を踰え、二里にして裝束場に達し、更に下ること十八町にして、湯殿山に到る。山といふと雖も實は溪谷にして、高熱の含鐵温泉を涌かす。附近所々鐵鑛を沈澱し、石英華を露ぼす。泉前白帶を神體に擬し

て安んず。神官御符或は繪圖を寫ぐ。道客或は温泉を瓶に填めて返るものあり。湯殿山より直下して、鶴岡街道に下り得。

鶴岡町 狩川より四里、酒田より七里弱、清川村より五里にあり。即ち庄内平野の中心地をなし、國內第三の都邑に推さる。赤川はその東邊を流れ、金峯山の翠微をその南にし、北は三里餘にして日本海岸の加茂港に達すべし。人口約二萬一千、維新前は酒井氏歴世の城邑として東北にその名揚りき。今に於ても、猶ほ西田川郡役所の所在地として、市街繁華、街巷整頓して、百貨輻湊せり。民族の敦厚なる、また賞すべし。學校には中學校、女學校の他に染織學校あり。古松軒東遊雜記曰、「鶴岡城下は、寒國雪多きゆえ、市中も板葺草葺なり。會津の若松、二本松、白川、米澤、いづれも十餘石の城下なれども、鶴岡に比べて見れば、北陸道より上方筋への便りもよく、坂田の津より廻漕すれば、大に勝劣あり。海魚も自由なり。下民と雖も平生米を食す。在家十軒に八軒までは土間なり。敢て貧しき故に板を敷かざるにあらず、夷風の残り

しなるべし。城下市中赤川の水をせき入れて、舟運行し、最上川へ出して酒田の港に

往來す。大概、備前國岡山につよく所なり。邊鄙なるが故に諸品の自由は岡山にも劣りしやうに見え侍りしなり。

鶴岡城址(庄内神社) 鶴岡の市中にありて、平城なり

赤川の水を引きて濠溝となす。もと、庄内藩の名は維新

の亂に於て多少の勢力を有したるの地、徳川譜代の臣酒

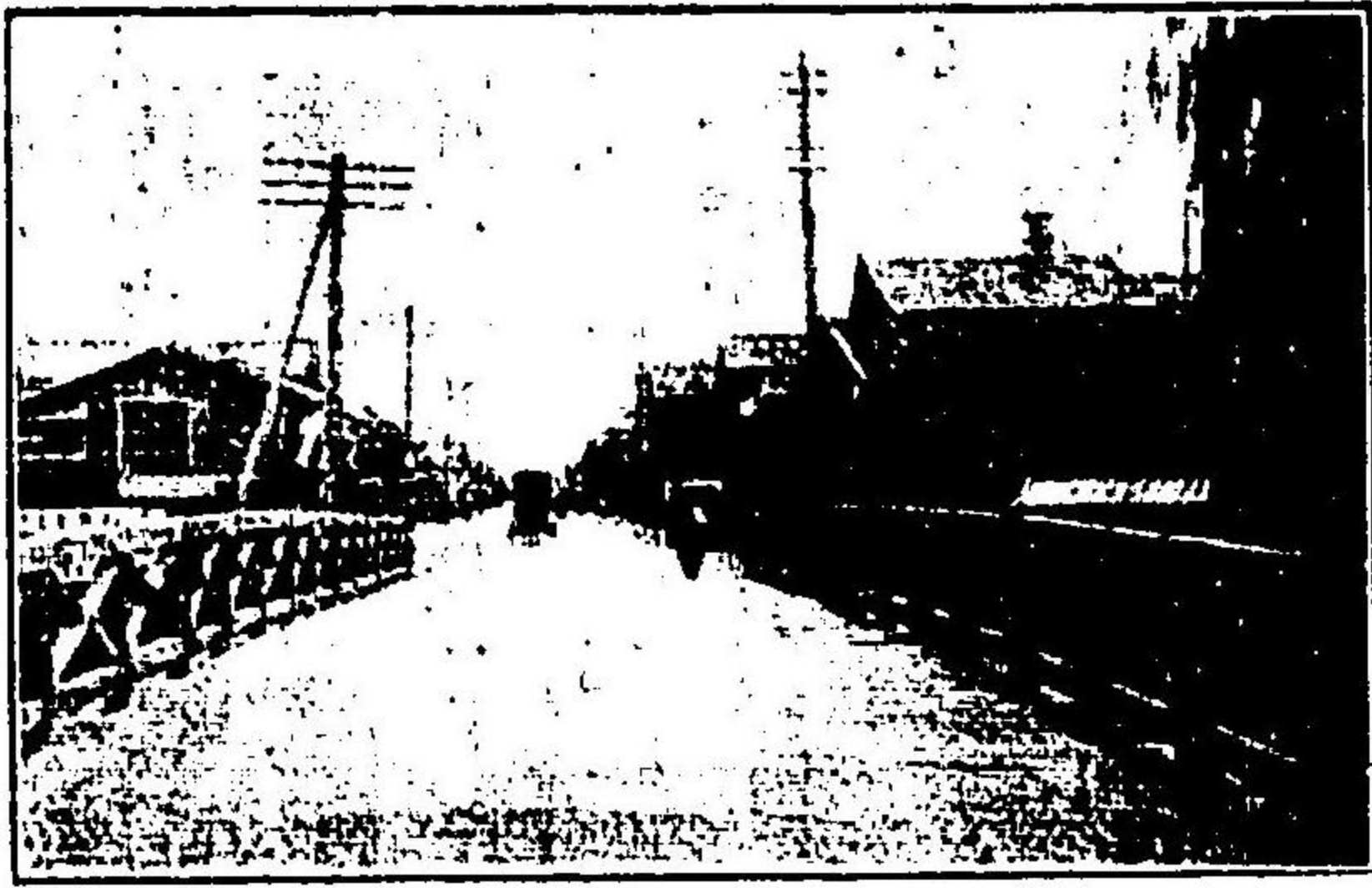
井忠勝以下十一世歴代の居城たり。今は城櫓を撤し、壘

壁を毀ちて、庶民一般の公園と爲し、中に庄内神社を祭

れり。社は酒井氏の祖忠次、家次、忠勝の靈を祈れる縣

社にして、明治十年の創建にかゝり、境内廣濶にして、

城壕の水にのぞみ、松杉の影自から一種神さびたる趣を呈せり。又、境外東北隅に



羽前國

稻荷神社あり。西方、百間隍と稱する城壕には、蓮花亂發して、花時は頗る奇觀なり。

日枝神社 鶴岡町字國町にあり。往古山王社と云ひ、後日吉大明神といひ、明治に至り今の稱に改む。慶長年間最上氏社殿を造營し、元和元年酒井氏之を再築し、明治二年縣社に列せらる。境内廣く本社傍に小池あり。魚龜を蓄へ、中央の小島に嚴島神社を鎮す。寶什として水晶珠、鐵鉢、太刀等あり。共に古代の器物にして、創建年月頗る古しと傳ふ。

春日神社 字天神町にあり。鶴岡城鎮護の社として古來領主の尊敬せし所なりといふ。

鶴岡の佛刹 鶴岡町にある佛刹中、大督寺、常念寺、本德寺、長泉寺、高安寺、般若寺をその重なるものとすべし。中、大督寺を以て尤も大となす。寺は天正年間酒井忠次の草創に係り、僧慶圓の開基とす。伽藍宏壯地方の巨刹なりしが、近世烏有に歸せり。寺後には酒井氏代々の墳墓あり。

赤川 或は大梵字川または櫛引川といふ。最上に次ぐ大河にして、源を南方東田川の郡の山巒重疊の間にある大鳥池に發し、月山群峰の西麓に縦谷をなして、殆んど正北に流れ、最上川の下流と相合し、飯盛に於て日本海に注ぐ。長さ凡そ六十五軒、其の上流山間の地に在りては、兩岸に沖積層に被はれたる幅狭き平坦なる臺地を有す。松根村附近より庄内平原に出で、流稍緩となり、舟楫の便灌漑の利頗る著るしく、沿岸は驛邑甚だ稠密にして、鶴岡町また其の左岸にあり。又、鶴岡町以下六里の間小艇を通ず。芭蕉奥細道『羽黒を立ちて、鶴岡の城下に出で、川舟にのりて酒田の港に下る。』「あつみ山や吹く浦かけて夕すゝみ」「あつき日を海に入れたり最上川」山形縣地誌提要曰、「赤川の上流大鳥川に於て、田澤村の四五里の間、峰岑嵯峨、水その崖底を行く。奇橋あり、これに架す、尾浦橋といふ。橋上より下瞰すれば、幽深懸崖、寒からずして栗膚す。ある人水を覆して距離を試む、その滴瀝未だ流面に達せざるに瓢は空し。」

●金峯山 鶴岡町の南二里に、聳ゆる高山にして、高距千三百尺を有し、上古は七葉山と稱せり。後花園天皇の御宇、楠氏の一族、此の麓に遁れて、高阪、赤阪の二村を設け、山條を金峯山と改め、後醍醐天皇の宸筆を神體と爲し、更に吉野神廟を勧請してこれを祀れり。

●田川温泉 鶴岡町の西南一里餘の地にありて、その途中附近井岡村に遠賀神社あり。地は一に湯田川または湯村と稱し、温泉は和銅年間の發見といふ。泉質は礬鹽氣を混じ、浴戸二十戸ばかりあり。古松軒曰く「湯村は、庄内城下に近し。百軒許りのよき町にて、温泉凡そ十六ヶ所、家々奇麗なる湯坪あり。この町は庄内一邦内の遊里にして娼家多し」。又、湯田川を距る西南三町に町田川あり。田川太郎行文の館址あり。山上に寺あり、不二軒といふ、家衡、武衡の木像を安置す。行文は清原氏の一族なりしと傳ふ。

鶴岡町より一路は直ちに北を指し、赤川に沿ひて酒田港に達せり。この間六里三十二町、行路平坦にして、

自由に車を通ぜり。又、大止町、酒田町間を通ずる海岸路も道路良好なり。吉山東伍氏曰く「往時の井上郷は東田川郡廣野村、新堀村、榮村、並びに西田川郡袖浦村の北方一半に渉れるに似たり。されど、後、地震水災の爲に、形勢大に變じ、境域多く漂没して、遺す所なし。往時の出羽柵及び國府、坂田津皆、この郷内にあり。一國の都會、萬民の殷賑想ふべし。而も、後世に至りて、沙丘松矮に、蔚田蘆高く、一目茫然所見なし。幾度桑滄陵谷の變を経たるを想ふべし。坂田の津民は、移りて北岸に新市を起すの外、城柵府邑の遺墟、これを尋ねるに由なし」と。猶ほ、或は一説に傳へて出羽柵址を今の横山村大字助川に説けり。柵は實に元明天皇の和銅年間に、蝦夷鎮衛の爲めの諸國の武器を收集せし所、出羽國府またその柵内にありしといふ。猶ほ、袖浦村大字宮の濱の海濱を袖ヶ浦といふ。浦は北方最上河口に瀕し、西は一帶日本海に面す。白沙青松、好景の地にして、眺望また奇絶なり。昔の坂田は即ちこの地にありしものといふ。東に飯盛山あり高さ僅に百四五十尺の小丘に過ぎざれど、これに登臨すれば、曠望頗る快豁、且つ丘山には稚松雜生し、頂きに入幡の小祠あり。春夏の候酒田町より來り遊ぶ者多し。今袖ヶ浦を詠じたる二三の國風を掲ぐ、前中納言定家「白たへの袖の浦浪よるくにもろこし舟や、き渡るらん」平宣時朝臣「旅ころも立寄る磯の松かけにすしくかふふ袖のうら風」大納言經信「うたいれの寒くもあるかなから衣袖の浦にや秋のたつらん」。更に鶴岡より西を指せる二路あり。一は大山町より加茂港に至り、他は三瀬を経て風ヶ關に達す。

●大山町 鶴岡の西二里にありとす。尾浦と稱し、人口四千を有する一名邑にして、

酒造を業とするもの多く、大山酒の稱は國內に冠たり。猶、地に尾浦城の址あり。

楢尾神社 大山町の北、西郷村大字馬町字宮山にあり。縣社にして、積羽八重事代

主命、天津羽羽命等を祭る。傳へて神代以來の神跡なりと云へり。本社には磴道之に通じ、周圍には古松老杉枝を交へ、山中に一の噴水あり、樋を埋めて賽路の左傍に導

き、嗽水盤にそゞぐ。傍に碑あり。六月の大萩はその式ことに盛なりといふ。

善寶寺 は西郷村大字下川にあり。著名の巨刹とす。船舶を出たす者、海上安全の

祈禱をこの寺に請ふ。山門、五重塔、龍王殿、感應殿等輪奐の美を極め、壯觀多く其

比を見ず。天慶年間釋妙達の草創と傳へ、中世文安の頃淨椿和尚二大龍王を度し、爾

來龍王守護の靈地と稱し、參詣者踵至せり。東國旅行談に曰「大山善寶寺の七不思議

の一つ二つは、天燈龍燈なり。何時といふ日も定らず。天氣快晴つゞき、一入うらゝ

かなる夜は、子の刻より丑の刻までの間に、必ず天燈の下ること、開基より數百年の

今もなほ昔の如し。また、龍燈の上るは、満月の頃夜光朦々として、風波少し荒き時

とかや」。

加茂町 大山町の西一里にあり。日本海に瀕し、船舶常に輻輳し、頗る繁盛の港灣

なり。人口凡五千、船路は酒田へ五里餘、鼠ヶ關へ八里餘左右の岡巒海中に突出し、

巒頭春日神社あり。景色佳絶、湯の濱に至るの海岸眺望殊に奇なり。

湯濱温泉 加茂港より海岸路を北に進めば、半里にして達す。風景明媚にして、温

泉の設備稍完全に、物價また低廉にして、游浴旬日猶ほ飽くを知らざるものあり。上

の山、東山と共に三樂園の稱あるも亦誣ひずと言ふべし。また、夏期は水浴の客をも

招し、年々の浴客二萬人を下らずといふ。

湯濱より豊濱に至る海岸、怪石亂岩の奇多し。中にも、由良の八乙女窟は、古來名ある洞窟にして、海上の

孤島に存し、これに羽黒權現の神事を談ぜり。

荒倉神社 鶴岡町を距る三里十九町、上郷村大字西目にあり。縣社に列し、保食大

神を祭る。本社は高丘の上に鎮し、本殿あり、拜殿あり、其左右大鳥神社、八雲神社

等の末社あり。社の由來は詳かならざれども、創建は養老年間にあるもの、如く、後ち貞觀十二年、天文三年、明暦元年等に屢々社殿の造營あり。天正の兵亂に社領を失ひしも、安政以後社宇舊に復し、明治九年縣社に列せらる。

氣比神社 豊浦村大字三瀬にあり。縣社にして、越前敦賀郡氣比神社より勸請し、保食大神、足仲彦命、息長足姬命を祭る。創建年月未だ詳かならざるも、天文九年高阪時次、菅澤氏光當社造營の事舊記に見えたり。寶永以後酒井氏より社領及び金品を寄附せられ、明治九年郷社より進んで縣社に列せらる。本社は小丘の上に鎮し、拜殿直會殿、神樂殿あり。又應神天皇社以下末社十二宇あり。又小池あり、氣比臺池と云ふ。社地は鶴岡を距る四里二十一町なり。猶ほ、この社の記事は義經記及び橘南谿の遊記に見えたり。因にいふ、この社の祭典には、三瀬の簀卷と稱し、庭上簀を立て廻して、氏子共これに集りて神酒を酌むことありといふ。奇習とといふべし。

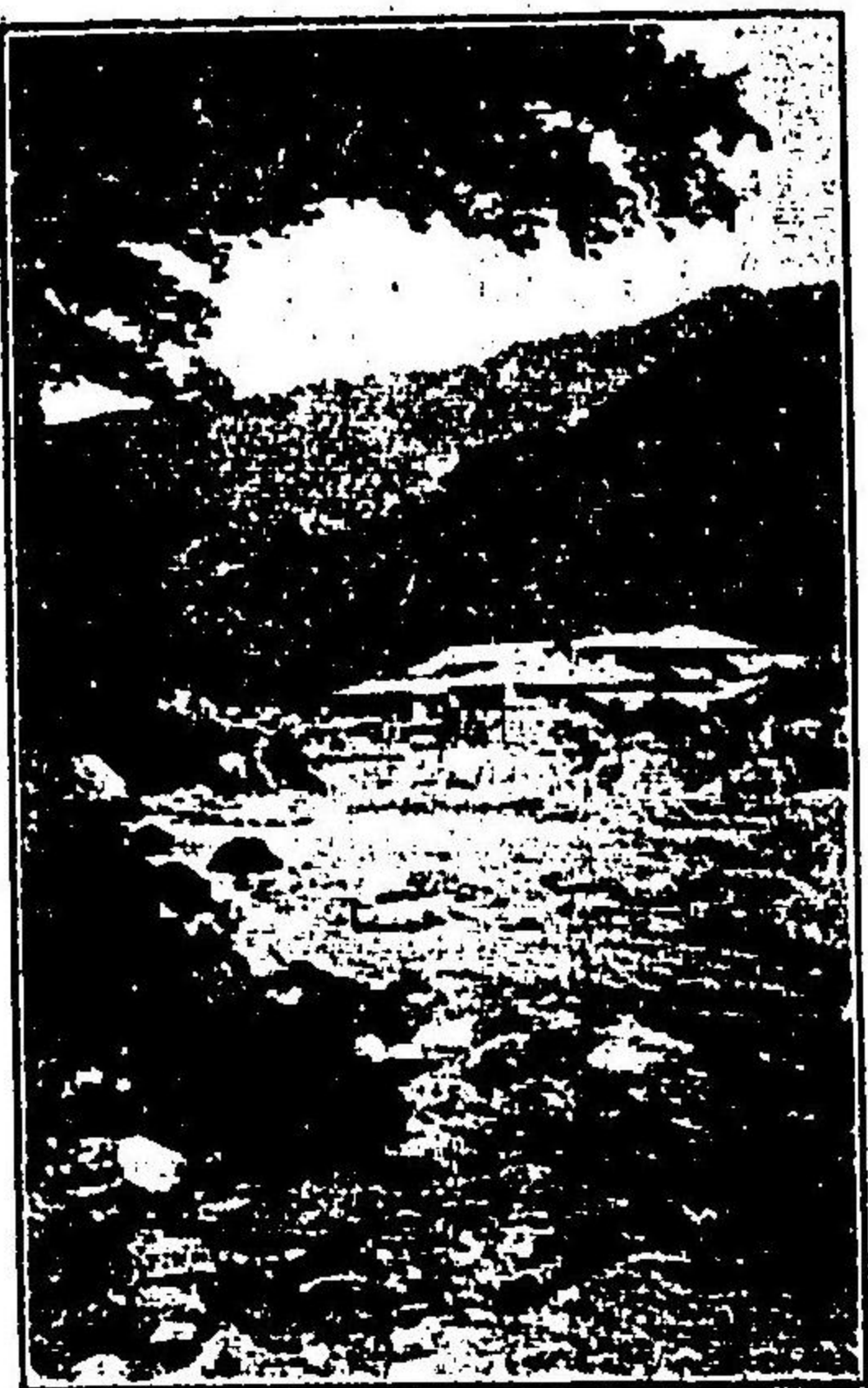
三瀬より、五十川、鈴村、牛子を経て温海に達す。橘南谿曰く「出羽國温海驛のあたり、街道の兩方岩の聳え、

たる所には、幾所となく岩より岩に必ずしめ繩をばり、そのしめ繩のもとに、木にて細工よく陰莖の形をつくり、道の方へむけて出しあり。あまりけしからぬもの故、所の人に尋ねれば、これは往古より致し來れることにて、さいの神と名づけて、毎年正月十五日に新しく作り改むることなり。神のことなれば、中々粗略にはせず。例ひ御巡見使または御目附等の通行の節もこのまゝにて、若き者の戯れなどにあらずと」。

暮坪の立岩 風土略記曰、立岩は數十丈の高き岩岨にして、上に樹林茂れり。四方にのぼるべき便見えす。古戦國の時村中心を合せ、落武者を頂上にかくし命を助けしとぞ。當所に矢除明神あり。また古松軒の記文に曰、「暮坪は温海の北一里半なり。この濱に世に名高き鋒立岩と稱ふるものあり。高さ十八丈竿を立てたるが如し。奇峭海内第一の石なり。茅葺の小社あり、矢除明神と稱す。地方を距る五十間許り、沖の方にも羅漢と稱ふる石數百あり、遠見石佛を見るが如し。海面雅なる岩數限りなし。目を驚かす許りなり。」

温海温泉 三瀬の南三里半にあり。東に峙つを温海岳とす。嘉祿二年此山鳴動し温泉湧出すと云ふ。泉質は硫黄泉にして金創、打撲に最も効ありと云ふ。一山を隔て、

濱海村と相通じ、人家八十餘戸浴客群集し頗る繁榮の地なり。温海岳の麓に郷社あり熊野神社と云ふ。古松軒の雜記に曰「温海の山村家毎に湯壺ありて、旅人を入るなり。娼家また數軒ありて、一軒に三四十人も賣女の居るとぞ。村の上には巖々たる



温海温泉

山ありて、温海ケ岳と稱し、風色いたりて好し。

鼠ヶ關 鶴岡を距る十八里八町、羽越の國界にして、原と念珠關と曰へり。街路の傍ら鼠喰岩の在る所を古關趾となす。

地先の海面に辨天島あり。直立凡十二丈、

廣さ三十間、島上に嚴島神社を祭る。其左右に和布島、方の島、横あち島等の岩礁あり。遠くは佐渡ケ島、飛島等を水天髣髴の間に望み、東には温海岳の翠を凝らすを見山紫水明共に絶佳の地にして、東北屈指の名勝となす。元祿の昔、芭蕉翁の酒田より

この關にかゝりて越後に出でしこと奥細道に見えたり。東遊雜記に曰「この地の辨天島は普く世に知られたる勝景なり。この風情言はん方なし。予、諸州をめぐりて名ある勝景を見しに、凡て倭國の風俗にして美しくも見ゆれど、唐畫に山水を寫せしが如きはなし。此所の風景は倭國の風俗を離れ、唐畫の山水を見るが如し。また婦人の體粧、皆な手拭を以て頭を巻き手拭の端を左右へたらし、衣服は紺に總模様をつけて皆な繪の如し。」

○最上川の流域 最上川は南より來りて最上平原の西を流る。この沿岸市邑の發達するもの少なからず。

小松町 米澤平野の西隅に位し、越後街道の通路に當る。米澤市を距ること北徼西三里、高島町を距ること西方約三里、而して山形市よりは十二里を隔つ。人口五千許り、また一小繁華地なり。凡そ國內に於て、養蠶の卓絶せるはこの地及び長井町にして、長井町に比しては及ばざる觀あるも、この地は猶將來發達の見込多し。町に、皇

太神宮、諏訪神社、大光院等あり。大光院は俗に奥羽の高野山と稱せらるゝ地にしてその創立といひ、寺院といひ、由緒といひ、この地方に珍らしき巨刹なり。猶、町の西嶺を諏訪峠といふ、二里にして西置賜郡の手ノ子驛に達すべく、更に沼澤等を経て遂に小國に出づべし。諏訪峠の展望富麗なり。

東置賜郡の北より始まりて、最上川沿流の地は、蜿蜒帯の如き一谷地をなす。これ虚空蔵山脈と長峯山脈との間に介在するものにして、最上の平野とは實に一小山脈を隔たり。而も、此の谷地は最上川の便によりて自然の發達をなし、道路は川に沿うて逶迤として東北を指す。左澤町に至りては所謂四根三市街の地に接せり。凡そこの地方は國內第一の養蠶地にして、桑樹の相連れる、繰車の相輾れる、自から他と異なる一特色を現はせり。宮内町より漆山を経て小國に向ふ街道は、今泉に於て長井町より來るものに合す。

久保櫻 宮内町より三里三町(糠野目停車場より五里)、伊佐澤村にあり。字を峰屋敷といふ。古來著名の老幹にして、一名を阿玉櫻といふ。幹の周圍三丈五尺、高さ四丈八尺、枝十六間四方に蔓延し、花は桃色にして一莖より七八莢を發し、その花時の壯觀なる、狀するに言葉なし。里俗傳説していふ、桓武天皇御宇坂上田村麿東征してこの地に至り、土豪久保氏の家に宿し、其娘玉なるものと契る。將軍去りて後、玉こ

れを思ふこと篤し、遂に病を得て死す。將軍再び此の地に至るや、これを聞きて悲痛

自から禁せず、墓地に植うるに一株の櫻を以てす、これ即ち此の櫻なりと。説、信すべからずと雖も、亦掬すべきの詩趣なからずや。花時、來觀の士女多し。

最上 長井町 松川(最上の上游)の左岸に縁り、米澤市へ七里、山形市へ十二里餘を隔つ。即ち長井平野の中心に居り、松川には舟楫の便ありて、市街繁榮なり。人口凡五千餘、今、西置賜郡役所をこの地に置く。且つ、地は國內養蠶の主産地としてその名甚だ顯はる。總宮神社を始めとして、遍照寺、小櫻館址あり。遍照寺は、即ち新義真言の巨刹にして、末寺三十三ヶ寺を有し、境内老杉鬱



乎として、自ら古趣を止む。

なり。五百川とは、中に最上川あり、その兩邊をいふ。その東の小島海山、虚空藏山あり、溪谷皆な流れ落ちて最上川に會す。西に月山、旭岳の崔嵬なるあり。溝澗しぼく落合ひて最上川に入る。故にその辭をゆたかにして五百川といふ。安井忠軒曰「荒砥以北、路小多石、犖确艱歩、山勢至此一束、而最上川奔於其間焉、大椎有關、致大衙所與傳、始許過關、上杉氏之地盡於此矣、又里曰内野、買瀛舟渡最上川、至松程村、得一異橋、兩岸埋巨木三、而橫出其端、如此者三層、上出於下各四五尺、幅如橫廣、如三大木於上層、橫敷厚板、長十餘丈、不施一椽、予嘗經木曾、其橋亦如之、蓋山水暴漲、悍如奔馬、非是無能耐久也」。猶、松川は西村山郡に入りてより始めて最上川の名を得。

朝日岳 西五百川村大字立木より數里にして達すべし。越後國界の雄峯にして、國內三郡に跨る。標高二千四百四十米突、最上方面よりこれを望めば、晨光始めて射る時まづこの高嶺を照らすより朝日と命名すといふ。紀平洲の詩に曰「曉衝寒霧發城隈(米澤)、旭日天晴旭嶺開、輿路千山何杳渺、馬頭唯指碧崔嵬」。

最上川は上郷、大瀧を経てよりや、平地を得、宮宿村の一集所はその東岸にあり。而して名高き大沼の勝は川の西岸一里を隔てたる大谷村大字大沼にあり。

浮島沼 古來大沼の浮島の名甚だ高し。地は山形市を距ること九里(左澤町迂回)に

ありて、山形市より左澤までは人車を通すべし。田舎蕭條たる僻地にして、浮島を除きては他に觀るものなければ、名高き勝區なれば一訪するもまた可ならん。大沼と稱する小湖は、東西二百間、南北三百間許りにして、萱根、芦根の相集りて島狀をなせるもの、松樹の生えたるまゝ、風の吹くに從ひて水上を浮游し、東西南北、その集合離散の奇なる、また多少の興を惹かざるにあらず。ことに岸頭に緊着して動かざるもの、忽ち風を得て飄々として動き去る甚だ奇なり。さはれ、昔の如く大騒ぎするほどのものにはあらず。その南に、浮島神社あり。南谿東遊記に曰「大沼山大行院は修験道にて、縁起を聞けば白鳳年間役行者の開基にて、稻荷神勸請の地なり。その神のみたらしの大池あり、大沼と名づく。池の形大の字に略似たる中に島ありて、その島時々水面を遊行す。島の數六十六、日本成就の形相といふ。むかしある人は非その不思議を見といけん、と、二日池の邊に待暮せど、島遊びなし。三日目に池の面を見渡しけるに、昨日見たりし七八尺許りの二の小島見えす。こは怪しざるにても動けばこそと、

空頼母しく待ち居けるほどに、こなたの岸根少し動くやうに見ゆるにぞ、さればこそと目もはなたず詠め居るに、岸根より一つの島のわかれて浮み出つ、静かにはなれ行くさま、いと目ざまし。またしばしありて、向ふの岸根はなれ出で、こなたに浮み来る。かくてそここより浮み出るほどに、池の中に数々の島出来て、游行往來す。そのさま、物ありて島を負ひ廻るが如し。目さめ心動きて悦し言はん方なし。中にも二三丈餘にも及びて、いと大きく、その島の上には小松生ひ茂り、藤の花さきかゝりて、つゝじに色を争ひながら、浮み出で遊行するさま、不思議といふもあまりあり。終日見居たるに、如何なる故といふ事を知らずしてかへれりと。縣地誌提要曰、「大沼は山形より九里餘、峻坂仄徑にして、丘壑幽靜なり。たゞ猿聲鳥語風籟溪響を聞くのみ。その沼時ありて大小の浮島集散離合す。小島の雙々相並ぶは、鴛鴦の翎を交へ波間に戯るゝ如く、大島の徐々漸く移るは、巨鼈の山を負ひ、洋中に浮ぶに似たり。南に浮島神社あり。四崖の山勢は甚だ高からず、位置最も好し。松杉の古樹、櫻花、楓

葉また觀るに足る」。

久保氏曰「漸くにして浮島に着きぬ。池は思ひしに似ず小さくして、周圍わづかに二三町ばかり、音に聞きし島らしきものゝ影だに見えず。こはそもいかにと感ひて數町先の村童に問ふに、全くこれにまされなしといふ。しからば島どもは如何にしつるぞと問へば、旅人よく聞き玉へ、そもこの池の中の島といふは、萱葦などの根の自ら集り、からみ合ひ、やがて塊をなすつるにて、水に泛びて碎けもせず、風のまに吹き漂はされ、東西に走り、南北に馳せ、集りては離れ、離れては集り、しかも曾て衝突することなきが不思議の極なり。こは島遊となへて、初夏のつゝじ花咲くるより、秋風たちそめて眞葛の莖葉そよぐ折までのことなり。されど、その間とても日々島遊の見らるゝには非ずして、さながら今日如き時も多かり。とまれ角まれ、今は猶ほ時節のいたく早ければ、數々の島ども、みな池の片隅にひそみて、走り出でず、中には氷つきしもあるべく、池の東岸なる茶亭も店を開かぬなりなど對へぬ。まことに天の時を得ずといはゞ、是非もなきことながら、はるる來ぬる旅の身の、扱て空しく見すぐすべきにあらればとて、池の中に突き出でたる岬めきし一長洲の上に立ちて望む。對岸には老松數株、翠滴るばかり、ことに風情ありげに見えつ。その下かげの暗きところに、一軒の茅屋、その戸を鎖したる、童がいひし茶亭にもやあらむ。池をめぐれる巨崗は、冬枯の樹木扶疎として、谷間には雪など残り。折しも風なれば、池の面は漣だに起らず、一壺の明鏡、新に磨き出されたらむ如くにて、ありつるものども、すべて影を醜せり。かゝる景色は世に其類なしとも非ざれど、僻境人跡少く、自然の風姿の清寥なるは、聊か棄て難き想もあり。やがて試に杖を差しのば

し、近きあたりにある島一つをつき放せば、颯々として浮び深ひ、やがて池心に向て進みゆく。あゝ奇なるかな、奇なりけりなど、友なるが、覺えず、喚く程に、鴨にやあらむ、さばかり大きからぬ水鳥の二羽三羽、かなたなる枯蘆の中より起ち、驚きたるけしきにて、羽ばたきし、こなたを顧みつゝ飛さりしがありき。數多き鳥どもの、如何なれば、かく片隅にひそみてあるにやと、一人怪しみて問へば、他の一人、そは島をつくれる葦の枯れて、葉もなくなり、風を受くるに由なければならむといふに、實に、いしくも言はれるかなと、みなくともになづきぬ。そも浮島の事の書に見えたるは、橋南谿の東遊記、百井塘雨の笈埃隨筆をはじめとし、諸國里人談、譚海、和漢三才圖會などを推すべし。されば、多くは傳聞によりて結構せしと覺えて、今まのあたり來て見れば、その實と副はざるものあるを悟りしも佗し。彼の大沼を以て名にし貢ふ巨池となすが如き、第一に取るに足らず。また其の中に浮遊する島どもの數を擧げて六十六と爲し、以て往古日本の國數に象れりといふが如き、道士が附會をなして言ひ觸らせしこと明なれど、實際は如何に多しとも、二三十に過ぎざらむ。その島の一つ／＼に就いていふも、高々徑一尺ほどの者のみ、三四尺に及ぶものあらず。何ぞ況んや、諸書にしるす如く丈餘に及び、上は松柏を生ずる者あるを得む。なほ浮島發生の理因として、かつて二條の説を聞きしことあり。その一は泥炭にして、池沼の底となせる泥炭層の一部、漲水もしくは諸種地變の作用によりて分離し、比重の輕きが爲に水面に浮び出で、やがて島嶼の形をなし、諸方に漂泛するもの是なり。この種浮島の中には、すぐれて曠濶なる者あり、其上に幾群の畜類を放つべしと

いへり。わが邦にては、越後あたり瀬海の湖沼中、時に之を見ることあり。土人洲上に種うるに蔬穀を以てし、風雨俄かに至るときなど、繩を以て之を繋ぎ留め、その流出を防ぎ、號して島繫といふとか。その二は菰草、すなはち今こゝに見る如きものにして、安井忠軒は讀書餘適の中に記して、たま／＼之に道ひ及び、依て、下の言をなせり。曰く、按漢土嶺外、地狹田少、土人縛木爲筏、編竹爲簣、敷土於上、種以蔬菜、久菰草木生之、筏朽質腐、則根封菱之、遂成浮洲、謂之葑田、蘇東坡嘗聽盜田之訟、以其可移動已、葑會意言艸封也、今事雖殊理則同、豈方士狡獪、預施是術、以愚後世乎、と。葑を以て艸葑の會意となすは、其理なきにあらざれども、度韻に葑方用切、菰根也、今江東有葑田といひ、晉書音義に、菰草叢生、其根盤結、名曰葑田といへば、菰根の説、穩なるに似たり。陸放翁には水落澤生葑の句あり、陳履道には湖田廢後已生葑の句あり、宋史に東坡の事を叙して、西湖水多葑、自唐及錢氏、歲輒浚治、宋興廢之、葑積爲田、水無幾矣、賦取葑田、積洲中、南北徑三十里、爲長堤、以通行者、とあり。菰根の次第に凝結して浮洲となるもの、彼土にも其類あるを知るべし。葑は古説葑菁となし、詩の谷風の註、毛傳には葑須也といひ、鄭鄭箋には葑菁といひ、孔穎達は葑采葑反、徐云音葑、字書作葑、葑葑反、草木疏云葑菁也、郭璞云今松草也、按江南有葑、江北有葑菁、相似而異といひ、胡三省また釋文の註に記して、葑音封菜也、亦謂之葑菁、江東葑田、乃之是葑、其深有没牛者、此田又不產菰根といへり。されば葑菁は如何に多く積りたりとするも、化して泥土となるべきものに非ず、その深きこと牛を没すといふ以上は、また安んぞ菰根と泥と相和せしに非ざるを知らむや。かの蔡寬夫詩話に記して、葑田發生の状態を叙せしもの、

即ち之を證するに足るべし。曰く、湖間菱蒲、所積歲久、根爲水所衝蕩、不復與土相著、遂浮水面、動輒數十丈、厚亦數尺、遂可施種植耕鑿、人據其上、如木筏然、可據以往來、所謂葑田也、熙按天祿識餘曰、郭璞江賦云、標之以翠翳、泛之以遊菰、播匪藝之芒種、挺自然之嘉蔬、鱗被菱荷、攢布水蘋、翹莖藻蕩、濯穎散裏、隨風漪奏、興波潭映、流光滄映、景炎霞火、此十二句皆指葑田而言、不然則隨風與波之句、何所指乎、廣東新語曰、葑田以筏爲之、隨水上下、是曰浮田、一名架田、亦曰葑、亦葑田之類耳、と。また沈作誥の寓簡に記して、漢北地郡靈州縣、在河之中、隨水上下、未嘗淪沒、號曰河奇、といひし如き、東坡が詩を賦せし豫州浮山洞の如き、いづれも此類なるべく、この大沼の浮島も畢竟葑田の小なる者に過ぎざらんのみ。浮島は日本に唯だ一個所、この地のみに限る如く思ふ人もあるべけれど、他に二三、其類なきに非ず。北越雪譜に曰く、小千谷より西一里に芳谷村あり、こゝに郡殿の池とて、四方二三町ばかりの池ありて、浮島十三あり。晴天風なき時、日出づれば、十三の小島、おの／＼離散して池中に遊ぶが如し。日入れば池の正中にあつまりて、一つの島となる。この池に種々の奇異あれども、文多ければしるさず。羽州の浮島は人の知るところなれど、この浮島は知る者まれなり」と。なほ聞くとゝるに據れば、佐渡金北山中に小湖あり、中に浮島二三あるよし。また函館の北八里、駒嶽の麓なる葦葉湖中には、浮島たゞ一つあり、上には松などを生じ、其底には靈蛇かくれ棲むよし言ひ傳ふとか。また羽前大山の西方一帯の小丘の連す互るところ、堤を築きて水を湛ふ、周圍一里、中に浮島たゞ一個あり、一二年ごとに移動すといふ。これ等は前記二種の中、いづれに

屬するか、今妄りに臆測すべきやうなし。他日游蹤自ら其地に至り、實視するを得ば、識別するを得べからむのみ。この大沼は、もと大行寺といふに隸屬せり。寺は朱印百二十石を領したる巨院にして、別寺すべて三十六、山伏の修驗者すみける由、今は大方ならず廢し、僅かにその跡を尋ねべきばかりにて、特に徵するに足る者もあらずとぞ。浮島の地たるや、すでに前に記せる如くにて、島遊の眞趣を見ざりしはや、遺憾なれども、もとより事々しく賞め立てつべきほどのものには非ざるべし。

●●● 明神禿 大谷村にあり。最上川の東岸は崩崩削るが如く、其絶壁赤く禿げて、奇景他に越えたり。上に明神の一古祠を安んず。水石相戦ひ溪水屈曲して、かゝる山中にあるは惜し／＼と思はるゝばかりなり。

これより一里にして左澤町に達す。最上川の山形平野に流れ落つる彼岸、湯殿、月の山の麓に當れる地は西根と稱し、この間に連珠のこゝとく連れる左澤、寒河江、谷地の三邑を西根の三市街と稱す。

●●● 左澤町 寒河江の南凡そ二里にあり。即ち最上川の萬山の間を出で、これより大屈山を爲さんとする一角にあり。民口四千餘。人烟碧流と相臨み風光甚だ佳なり。町

を距る十町、最上川の東岸に拍瀟と稱する地あり。風景頗る佳にして、夏時は往いて遊ぶに適す。岩石水と相戦ひて、其音佩環を鳴らすが如し。これと相對して一酒樓あり。百目杭の茶店と稱し、築ありて鮮魚を絶たず。山形市より特に行きて遊ぶもの多し。河野氏曰、左澤は山形より六里餘の山市なり。その東岸岩崖壁立し、形柏葉に似たり。即ち澤に柏瀟の名あり。これに對し西岸百目木に酒樓あり。左頂の字義に就きては、風土略記に、左をアテラと訓むは最上川を本體とし右方左方を澤々を指せしに起りしと述ぶれど、土人の説には、寒河江の城は大江親廣入部の爲め、長岡山に上り西方の山谷をさしてアチラのサハと呼ばれしよりアチラ澤アテラ澤の名起り、特を左をアテラと訓ず。

左澤より寒河江に至る途中、西北に折れて白岩町に至る道あり。縣地誌提要に曰「寒河江の西北八嶽村に橋あり。長さ百間ばかり、水患を避る爲めに杭柱を施す。臥龍橋と名け、北崖は崑石巉峨たり。その橋を架する所、中斷して車馬を通すべし。崖頭古木蒼鬱として空を蔽ひ、洞窟に入る如し。橋を望む頗る佳、橋より望むもまた佳なり。石出で水激し、雪を漲じて、花を飛ばし、一碧となりて流る。

寒河江町 東村山郡天童町(奥羽西線車驛)の西三里に當る。即ち、兩羽街道より左折し更に最上川を渡りて一里許り田疇の間を行きたる所にあり。最上平原中、所謂往昔の西根の地にして、最上川と寒河江川の間に介立し、地に西村山郡役所を置けり。戸數千餘、人口七千七百餘を有し、寒河江城址は字元楯南にあり。大江廣元の嫡男親廣の居城にして、其七代の孫時茂は南朝の爲めに屢最上の斯波兼頼と戦へり。後十六世にして最上義光の爲めに亡さる。今、その城址に郡役所あり。長岡山は町の西北に位する小丘にして、戊辰の役、戦争のありたる所なり。又、南方一里半、長崎町(人口五千五百、最上水運の中心地といふ。山形市より北稍西二里半なり)に一館址あり。最上義光の臣中山玄蕃居住の趾といふ。猶、寒河江の附近には名刹多し。中、慈恩寺を最として、法泉寺、本願寺あり。また舊城址に稻荷社より。

慈恩寺 寒河江町の西北一里餘なる醍醐村大字慈恩寺にあり。天台眞言兩宗兼學にして、山號を瑞寶山と云ふ。寺傳に曰く、當山は、聖武天皇の勅願所鎮護國家の道場

攀して上る。階盡きて御前に達す。(庄内地方湯殿山に参照すべし)。猶、大綱より三里にして黒川に達し、更に二里にして庄内の首邑鶴岡町に到るべし。

○小國谷 西置賜郡の西邊越後に接したる山間を小國谷といふ。即ち南は飯豊山、北は朝日岳に圍まれたる谷間の地にして、米澤市よりは小松町を経てこれに達す。而も、その路險にして、所々車を通せざる所あれど、同市地方より越後に赴く捷路なるを以て、旅客の來往尠ならず。今、津川、小國本、南小國、北小國の四村に分ち、人口凡八千五百といふ。平州の詩に曰「百里山廻小國分、地形遙想絶塵氛、兼葭澤裏經青瘴、菀芊峰頭入白雲、提蓋不妨眠藥圃、帶書隨意就耕耘、秋風好值香醪熟、爲我携來更一醺」。

まつ、東置賜より郡内に入れば、手の子(豐川村屬)驛あり。更に三里許りにして沼澤あり。道はこれより横川の流域を下り、山中の小邑小國本村に達す。長井町より道程凡そ十里といへり。
子易神社 小國本村の大宮にあり。小國谷の鎮護神とす。傳へて曰く、小國谷はもと湖湖なりしに、天平勝寶の頃山崩れ水去りぬ。而もこれこの大神の御力なりとて、

今の小波村に大神を祀りしが、後此所に遷徙す。今も大宮の婦人産屋は必ず増岡村に撰みて誕生をなす。即ち大神の禁忌を恐るゝなりと(米澤鹿子)。

道路はこの附近より荒川に沿うて下り、一里許りにして越後の國界に達す。猶、南小國を過ぎ、玉川に沿ひて上れば國の南境飯豊山に登るべく、途中に温泉あり。また、東方山中に梅花澤瀉あり、落下二百尺、亦壯觀なり。

羽後國

羽後國は羽前の北に接し、東は陸中陸奥に堺し、北は陸奥に隣り、西は全く日本海に瀕す。東西二十八里、南北六十五里、面積七三四方里を有し、秋田市の一市と雄勝、平鹿、仙北、由利、河邊、山本、北秋田、南秋田、飽海の九郡より成り、秋田縣これを管す。岡の東部は脊梁山脈蜿蜒として連互し、那須火山脈に屬する栗駒嶽、駒ヶ岳等の火山、第三紀層より成れる眞晝山脈の諸峰錯綜して相連互す。眞晝山脈中には大深澤山（一二五六米）三ツ森山（一一六八米）眞晝嶽（一一三三米）和賀嶽（一四四四米）等あり。この山脈の北方には駒ヶ岳火山群陸中の國境を成して併立し、其脈分れて一は陸中の岩手火山となり、一は北秋田郡の森吉火山となり、以て國の中央に屹立せり。駒ヶ岳は標高一五九五米を有し、烏帽子岳は一六二三米を有す。この火山主脈は國境を北に縦走し、北秋田、仙北、陸中鹿角三郡の間に焼山火山碎をつくる。森吉火

山はこの西方に位し、（前嶽一二二七米）檜葉倉岳（一二〇〇米）向嶽（一四五四米）より成る。國の南境を劃せる山脈は、栗駒岳より須金岳を起して羽前の境を成し、黒森山を経て烏海火山に達す、烏海火山は飽海、由利兩郡に跨り、日本海の蒼波に瀕せる著名の高山にして、新火山、七高山、新山、荒神ヶ岳、笹ヶ森、月山森等の諸峰より成り、新山最も高く、二二三米の高さを有す。國の中央より少しく西方に偏して、太平山脈あり。主峯太平山は一〇四六米の高さを示せり。國の北部には、泊嶽連山ありて、陸奥との國境を成し、雁森岳（一四〇〇米）三ツ川峯（九四二米）田代山（七二三米）等あり、其他、男鹿半島に火山岩より成れる寒風山（三七〇米）及び眞山あり。これ等山嶽に圍れて、御物川、能代川の二川あり。共に大河の趣を成し其沿岸に豊饒なる平野を開けり。御物川は南より北に流れ、能代川は東より西に流る。御物川平野は長方形をなし、東西十五軒、南北四十五軒を有し、湯澤、横手、大曲等の名邑連珠の如く連る。秋田市はその平野の西北隅に位す。能代川平野には、大館、鷹巣等

の諸邑發達し、河口に能代的一名邑あり。酒田平原は羽前の庄内平野と連り、最上川の
下脈に位し、田園よく開け、人烟稠密なり。

沿革 此國の沿革を綜ぬるに、羽後、羽前は元と出羽國たり。和銅中陸奥、越後を
分て出羽を置き、國府を出羽郡井口に建つ。其後天平寶字中秋田城を築き、州の守介
を以て之を兼ね、秋田城介と云ふ。康平中州人清原武則、陸奥守源賴義に従ひて安倍貞
任を平らげ、鎮守府將軍に任ず。寛治中其子武衡、從子家衡と共に仙北郡金澤に據て
亂を作す。陸奥守源義家撃て之を平らげ、藤原清衡を以て陸奥、出羽の押領使となし、
其子孫終に之を攘有す。源賴朝東征し、葛西清重を以て奥羽の奉行となし、其將小野
寺、武藤二氏をして邑を國內に食ましむ。源實朝の時に及んで、安達景盛城介を以て
州事を知り、孫泰盛に至り北條貞時の爲めに滅せらる。建武中興の後、參議葉室光顯
を以て國司に任ず。足利尊氏の反するや、州人多く之に應じ光顯戰歿す。尊氏乃ち族
弟家兼の子兼頼をして最上郡山形に鎮せしめ、子孫州事を知る。是れ即ち最上氏なり。

元中の初伊達氏長井廣房を滅して置賜郡を取り、八年足利義滿出羽を以て關東管領足
利氏滿に隸せしむ。應永中安東庶季陸奥より入り秋田城を取て之に據る。是れ即ち秋
田氏なり。永享の末にいたりて管領亡び、最上(村山、最上二郡)秋田(秋田、山本
二郡)庄内の武藤氏(田川、飽海二郡)仙北の小野寺氏(仙北、雄勝、平鹿三郡)互
に疆壤を争ふもの數十年、天文、永祿の際、小野寺氏漸く盛にして、由利の十二黨
(大井、大江諸氏はれなり)及び六郷、戸澤諸氏を脅制して一時に雄たり。天正中最
上義光、小野寺氏の地を略し、武藤氏を滅し、庄内三郡を取る。俄にして上杉氏來襲
して庄内を奪ふ。十九年豐臣氏東征し、伊達氏の置賜郡を削り、之を蒲生氏郷に賜ふ。
その後蒲生氏を宇都宮は徙し、上杉景勝に賜ふ。關ヶ原の役畢り、徳川氏、景勝の封を
削り、僅に米澤を賜ひ、小野寺義道の地を收め、秋田、六郷、戸澤等の封を徙し、庄
内三郡及び仙北を以て義光に加賜し、佐竹義宣を秋田に徙封し、六郷を領せしむ。元
和中最上氏の地を削りて近江に徙し、山形を鳥居忠政に賜ふ。(後封を易ふ數氏、最後

に水野忠精を封ず。酒井房勝を鶴岡、六郷政乗を本莊、戸澤政盛を新莊、岩城吉隆を龜田に將す。其後前後封を受る者、上山（初め松平重忠、後松平信通）高島（織田信浮後に天童に徙る）長瀨（米津通政武藤久喜より徙る）となす。上杉、佐竹、酒井支封各一、米澤新田（上杉綱憲の第三子勝周）秋田新田（佐竹義隆の第二子義長後岩崎と稱す）松山（酒井忠勝の第二子忠恒）凡て十三蕃なりとす。明治維新米澤（上杉齊憲）鶴岡（酒井忠篤）上山（松平信庸）等皆若松藩の黨援たるを以て削封差あり。元年十二月至り最上、村山、置賜、田川の四郡を割て羽前の國となし、飽海、由利、雄勝、平鹿、仙北、河邊、南秋田、北秋田、山本の九郡を以て羽後國とせり。明治四年七月に至りて諸藩を廢して縣とし、同年十一月に各小縣を併せて、秋田縣を置き之を管治す。

交通 官設奥羽西線は、羽前及位驛より來りて院内に入り、横堀、湯澤、十文字の諸驛を経て、湯澤に達し、御物川平野を國道と共に北に向ひ、飯詰、大曲、神宮寺、刈

和野、境、和田を経て秋田市に達し、これより海岸に近く、土崎、追分、大久保、五城目、鹿濱、森岳を経て機織驛に至る。能代町はこの驛の西方一里にあり。これより線路は西より東に向ひ、能代川の流に沿ひ、富根、二ツ井、鷹の巢、早口を経て大館に達し、大館小阪間の一支線を分ち、白澤、陣場を経て、陸奥の碓ヶ關に達す。これ國中の主要交通路なり。大館小阪間は小阪地方に赴く唯一の交通路にして、大館、代野、茂内、小阪の諸驛あり。又茂内より二ツ屋に至る線路岐る。而して此の幹線鐵路を縦貫する道路は、十文字より東に岐る、陸中街道、大曲より岐る、角館街道（田澤湖の勝角館の附近にあり）等なり。男鹿半島には追分又は大久保より至るべし。日本海沿岸の道路は秋田より本庄町を經、象潟を過ぎ、鳥海山の西麓を經て酒田に達するものにして、里程二十五里、よく車を通せり。

産業 米は秋田米の名ありて、仙北、南秋田、雄勝、平鹿の諸郡を主産地と爲す。食用農産物中果實には、苹果あり。菜蔬には、秋田欸冬あり。特用農産物には大麻、

一は上院内の西地に残りて五郎館といひ、一は下院内の西にありて館山といふ。川田氏曰「雄物澤、即戊辰戰場、右有城址、天正中、小野寺氏驍將眞崎五郎居之、爲部兵所狀、土人呼爲五郎館、從此以南、群山對峙、中通一徑、深林蔽溪、日色晦冥、踰四坂渡五橋、至籠澤、仰望院內嶺、大路盤空、蛇蟠蚓屈、蜿蜒九折、每折設欄、岩嘴崖角柵防崩壓、騎者連轡、車者並軌、步者比肩、徐行半里、不覺太艱、此地舊秋田藩南境。石山疊重、石欹木竦、世稱天險」。

院内銀山 國道より西一里八町にあり。別に名けて銀山町といふ。本邦著山の銀山なりしが、前近世に至りてや、衰頹せり。山崎氏曰「本鑛山は大仙岳の東北麓に位し、本邦屈指の産銀山に推さる。探掘面積百八十七萬二千五百坪、鑛業事務所、製煉所、撰鑛所等は字長倉に棟屋を連ね、坑部課はその西南に長く群邑をなせる銀山町に設けらる。而して水力發電所は字秋宮村に所在せり。その創業は慶長十一年大谷吉隆の家臣村山宗兵衛なるもの、關ヶ原の役に敗衄してこの地に逃竄し來り、山谷を跋涉して

圖らず鑛脈を發見し、探掘を試みたるを濫觴とす。爾後一盛一衰二百餘年を経、文化年間に至り、秋田藩主佐竹氏の有に歸す。降て明治六年以來民有に移り、其の後秋田縣廳、鑛山寮等の官有となり、同十二年外國より技師を聘し、工務を改良する所ありしが、兩三年にして之れを中止し、同十七年に至り遂に古河氏の借區に歸し、以て現今に至れり。鑛脈は主として粒狀富士岩と第三紀層との接觸部に存在せるもの、如し。その主要なるものは本鑛と名けらるもの、及びこれより分岐したる厚身鑛、薄身鑛五郎城鑛とす。本鑛は東西の走向を有し、七十度乃至八十度の角度を以て北或は西に傾斜し、その幅概ね二尺乃至二十尺にして、稀に三十尺に及べるものあり。鑛石は重に硫安銀鑛及び輝銀鑛にして、黃銅鑛及び濃水銀鑛を伴ひ、石英、菱滿倫鑛等を脉石とす明治三十四年の產出高は金一萬七千八十匁、銀千二百三十貫目に上り、現今、流通せる金貨中にも、本山所産の金を以て鑄造せるものあり」。

横堀町 院内の次驛を置く。人口二千、市街や、繁華の趣を呈せり。國道の路傍、

小野村に小野小町の古蹟あり、稱して小町出生の地といふ。里人談に曰く「院内湯澤といふ驛は、出羽郡司好實の住居地なるよし。その小野は小野小町の出生のところなりといへり。小野の宮あり。その流と言傳ふる家は、女ばかり生れて男子を生せず、代々婿をとつて相續すること今以てかはらず。また田畑の畔に芍薬九十九株あり、小町の植られし種といひ傳へき」。猶、その他に走り明神、東館屋敷、桐田、二ツ森、八十島、辨財天、由緒松址、墓館などあり。又、小野村の東凡三里に泥湯あり。更にその西に川原毛湯あり。川原毛湯の北に高さ五丈の大瀑あり。

鬼首街道は横畑より鐵道及び官道に岐れて東南に向ふ。中村、川井、湯の岱等の村落あり。中村に郵便局を置き湯の岱等の村落あり。中村に郵便局を置き湯の岱には温泉あり。

湯澤町 横堀の次驛を置く。民口八千二百、雄鹿郡の首邑にして、併にその治所たり。養蠶甚だ盛にして、繰絲の歌到るところに聞ゆ。町に古城址あり。小野寺輝道の臣三春信濃守の住せし所にして、佐竹氏以後は其の支族佐竹氏これに居る。町より西

及び北に向へる道路二あり、一は西音馬町を経て大澤に至るものにして、他は西北方造山に至りて横手町及び角間川町（沼館町を經）より來る街道に會し、更に大澤に通ず。大澤村より玉米を過ぎて西海岸の本莊町に達する道路あり。また湯澤町より東方川連、稻庭、小安を経て岩手膽澤郡に出づる間道あり。

稻庭邑は湯澤驛の東步南四里にあり。文治の頃小野寺里道の城地にして、温飩を以て名産となし、俗に干温飩を呼んで稻庭といふ。その北、川連（湯澤への通路）には漆器を産す。稻庭より更に貝沼、小安の諸村を經れば、山嶺漸く四合し、オヤス川は深く溪谷を穿ちて、急湍の聲、巨人の嘯くが如く、湯元村に至れば、溪流殆んど懸瀑をなせる所ありて、百尺の危橋人膽をして寒からしむ。殊に湯元村附近には温泉を湧出して、その人家の山に凭り、溪に架したる、眞に一別天地を現出せるものあり。惜むべし、この奇景、深山幽谷の中に埋没せられて廣く世に知られず。一書曰、子安河原湯は吹出づると一丈乃至二丈、時として強く、その音雷鳴の如し。又

約千餘に過ぎざる一小邑なれども、右の雄勝驛なるものは實にこの地を指せるものにして、その近傍に今猶雄勝柵址を殘せり。野崎氏曰く、御物川橋、明治二十六年竣功す、長一百間餘、杉材を以て之を造る。蓋し羽後國中屈指の大橋なり。川には數十丈の斷岩高く聳え老松落々として繁茂し、紫藤その間を點綴す、急流石に激し、雪散じ球跳り、扁舟は飛で矢より急なり。遠近、來遊の客多し。

雄勝柵址 今、大澤村の天下屋敷と稱するものその遺址ならんかといふ。柵は實に天平の頃の經營になりしものなり。

金峰山 大澤村に屬す。高さ二千尺、村より一里にして頂上を極むべく、満山老樹鬱鬱して、白兔の跳踉するもの太だ多し。又、山中に相生の松及び、小野寺石あり。秋季、松茸を多く産すといふ。頂上に金峰神社を祀れり。養老七年の創立と稱し、文治年間源義經この社に參詣せる由を傳ふ。

七面山 明治村新町の支郷高寺村にあり。高さ一千五百尺餘、山中に多く福壽草を産す。

佐藤信淵の六部耕種法に丈ケ七八尺の福壽草七高山の谷に生せりと見えたり。頂上に七高山神社あり。天平寶字年間の創立と稱し、稻倉魂命を祭る。

鷲坐山 雄鹿、平鹿、由利の三郡に界せり。一名を足倉山或は鷹座高倉といふ。一書に曰、續紀に寶龜、十一年遣二千兵、略鷲座、と云へるは即ち此山なり。古へは白爪の鷲常に栖みたりと云ひ、今も猶は鷲の鳴く聲あり。古へより國歌多し一二を録せんに、萬葉集「身をあけになしていではの鷲をのみ捉るてふことのためしやはある」親を捕る鷲をつらさに心あらば鷹や知るらむ鳥のおもひ子。山上より、西は鳥海山及び袖ノ浦を望み、北は御裳の浦、雄鹿の浦山、琴の海等を瞰下し、恰も畫圖の如く、人をして眺嗚倦まざらしむ。山に峙森あり。

大澤より玉米、館等を経て本莊町に達す。玉米より館まで約三里、玉米より本莊町まで凡そ八里とす。その間老方、館に郵便局あり。東北雜記曰「老方村を出てアンサ峠あり。頂を町屋とす。左右を見るに山連々として見る眼も恐ろしき深山なり。生駒侯の御知行方八千石にて方十里ありといふ。大澤より東、また田野開けて人里多し。案内に出づるものは。庄屋名主なるに、此邊には無筆のものあり。言語も解しがたし。」

湯澤の次驛を十文字驛といふ。同村と岩崎川を隔て、岩崎町あり。

岩崎町 湯澤町より北一里半許にして、雄勝郡の北隅にあり。人口千餘、平鹿郡との境界岩崎川には一長橋を架せり。

十文字驛 即ち湯澤の次驛なり。街衢十字形を爲し、交通甚だ盛なり。而も驛は四つ辻の四角に大なる旅店ありて、往昔の道中記に見るがごとき心地す。驛より西すれば、淺舞、大澤を経て、由利郡の海岸の名邑本莊町に至るべく、その里程十三里餘なり。東すれば、平鹿郡の名邑増田町に至るべし。

増田町 十文字驛の東一里許りにあり。岩崎川（水無瀬川）の北邊に位し、横手町へ三里、岩崎町へ一里許りを隔つ。人口五千餘、稻庭街道、手倉街道、淺舞街道の焼點に當れるを以て、貨物の集散甚だ盛なり。商業また活潑、町に葉烟草專賣局支局あり。

増田より田子内、手倉等を経て陸中の膽澤郡に出づ。田子内は一邑をなして、湯澤へ凡五里、稻庭へ凡四里

を隔つ。田子内の東方、大森嶽の下に鐵籠あり。高さ百尺といふ。また田子内銀山あり。増田町の東三里にして、採掘面積四十九萬四千餘坪に及ぶも、近時振はずといふ。

淺舞町 十文字驛の西北にあり。本莊街道これを通ず。横手町へ二里半、大澤村へ三里、湯澤町へ三里とす。人口五千八百餘、平鹿平野の中央に居り、大小の道路四方より來りてこれに集まる。繁華なる一集落なり。面して、猶、この地附近は往時湖底なりしものにして、表土の下僅かに二三尺にして、泥炭の層二三米に及ぶ。地質また卑濕なり。

淺舞八幡神社 淺舞町にありて、縣社に列す。天平十二年の草創と傳へ、元龜中小野寺氏の守護神なりき。境内には多く松、柳、杉、櫻を植ゑ、景致清楚にして頗る雅致あり。毎年五月一日を以て祭典を行ふ。

本莊街道は淺舞の西邊山に至りて、湯澤より來る道路と交叉し、直ちに西方大澤村に至る。別に沼館町を過ぎて角間川町に向ひ、横手町より來る街道と合するものあり。東里村附近に於て石器期の遺物を發掘す

沼館町 御物川の東邊にして、横手町の西方四里半に當る。地に一古城墟あり。後

三年の役、清原家衡の據りて以て官軍に抗せしところと傳ふ。後、大永年間には小野寺植道これに居れり。

更に鐵道に歸れば、十文字の次驛に横手驛あり。

横手町 岩崎町より三里、御物川平野の東に位し、西方國界の山は近くその翠微を街頭に送れり。人口一萬二千、實に國中に於て秋田市に亞ぐの郡邑なり。殊に、この地より陸中に通ずる平和街道は奥羽の中央を縦貫せる脊梁山脈の最低所を越えて、御物川平野と北上川平野との連絡を保てるを以て、商業交通共に、地方稀れなる活氣を呈し、一種特色ある繁華を保てり。町に郡役所、警察署、區裁判所、中學校(朝倉村)あり。また東北に古城址を存す。一に朝倉城と呼び、小野寺景道の築營するところ、後佐竹氏の領となるに及んで、世々戸村氏の居城たり。戊辰の亂、城主戸村義得この城に勤王の義を唱へて、孤軍以て奥羽聯合の兵に當れり。今、その古城址の臺地に八幡宮を祀る。横手の市街より延びて平鹿一郡の平野を俯瞰し、その眺望この附近に冠た

り。町の産物は横手木綿を以てその重なるものとす。鐵道、湯澤へ十二哩、秋田へ四十三哩とす。三千風の紀文に曰「横手村の郡司戸村氏は、秋田佐竹家の長臣として文武兼備の士、ことに風雅の逸人なりしが、余が行脚を傳へ聞きて歷章をたびし、順國の期に見れば世をはやうしたまふとか、現生の志を感じて碑銘のかたみ、黄泉の灯となしぬ。落穂あり秋田に下りよ旅の鴈、入しほ見せぬ蚶瀉の月」。川田氏曰「横手驛、在旭河上流、人烟稠密、街衢齊整、天正中小野寺義道居此、領雄勝平鹿仙北三郡、與秋田氏最上氏爭雄、關原之役、黨西軍國除、寛文十二年、秋田藩封功臣戸村義連、食一萬五千石、子孫襲業二百餘年、戊辰之亂、爲叛兵所陷、城廓皆燬、城外有上野介本多正純館址、曰上野臺」。城代戸村氏の菩提所を龍昌寺といふ。

蛇崎橋 横手町の中央を貫流する川を横手川といふ。蛇崎橋は即ちこの川に架せる長橋なり。長さ三十六間、石瀬月を碎く夏の夕、納涼の客多し。

天平寺 横手町大字田中町にあり。長祿年間小野寺泰道の創立にして、禪宗曹洞派

に屬す。泰道の持念佛と稱する黄金の十一面觀音を寺寶とせり。また寺内に本多上野介父子の墓あり。

平和街道は、横手より落合、小松川を経て陸中黒澤尻に達する縣道なり。また鐵道の豫定線たり。國界の峠を黒澤峠といふ。標高三五米、義經記にこの峠のこと見えたり。

鹽湯彦神社 横手町を距ること三里弱、山内村大字大松川の山中にあり。俗に御嶽山と稱す。式内社と傳へ、弘安中の再建、正徳四年の重營と稱す。社境、古木森々として天に參し、地境自ら太古の趣あり。また山内の白瀧觀音は西國三十三ヶ所の第一にして、役小角の住せしといふ故跡あり。その他、山伏屋敷、十二支水、七里水、鶏鳴水、破軍水など靈域多し。

横手町より田根森、阿氣、大森を経て八木澤に達する道路を八木澤街道といふ。その他、角間川に出で、更に阿氣、沼館を経て湯澤に至るものあり。

大森町 横手町より約四里半、御物川の西、保呂羽山の東にあり。一小邑にして、地の大慈寺の後山に古城址あり。小野寺義道一族これに居住せりといふ。

波宇斯別神社 八澤木村の西北保呂羽山にあり。祭神は或は安閑天皇と稱し、或は大國主神なりといひ、一定せず。孝謙天皇の天平寶字元年の勸請にかゝり、縣内に於ける式内古社の一なり。毎年一月の祭典には押合ひと稱し、數百名の壯夫境内に集り、互に押合を爲すの例あり。風土略記に據れば、この神式内出羽國九神の中にして、山は八澤木村を表口とし、由利郡の羽廣村を裏口とし、同郡寶内村を脇口とす。八澤木より登路一里に餘れり。

横手町より北方國道に沿ひて三里許進めば金澤町あり。更に一里半餘にして六郷町あり。鐵道は横手町の次驛に飯詰を置き、直ちに大曲驛に達す。

金澤町 金澤、金澤前町、金澤中町の三大字を合すれば、長さ殆ど一里に達すべく、民家は國道に添うて長く連れり。金澤本町に著名なる金澤柵址あり。録北錄曰「過金澤、後負重山、前俯平疇、天然建都之地也、昔人城此有以也、永保中、清原武衡家衡、據柵叛、源將軍義家、攻圍連年僅而克、即此、遺址在山上、八幡祠在焉、出驛路、左有鎌倉景正墓」。

金澤柵址(八幡宮) 即ち後三年の役に清原武衡、家衡(武衡は沼の柵より來りて家衡に合す)が籠城して王師に抗せる舊址なり。或は一に孔雀の柵と稱す。蓋し、奥羽の分水山脈を尾にし、南北の山を左右兩翼となし、本丸二丸を頭とし、嘴となせるものなるべし。本丸、二丸、北丸、西丸の跡は今尚ほ舊形を存せり。満山老木蔚然として、半は已に耕圃と化し去れるもあり。柵地の北崖を繞りて流るゝものを厨川といふ。鎌倉景正の故事を傳へたり。その他、陣館、飯塚山(倉庫のありし地といふ)、蛭藻沼、景正加名塚(老松老杉あり)、義家陣所址などあり。また、柵地に祀れる八幡宮は、義家將軍の勸請にして、神寶、拜殿、神明社、兜八幡宮共に神寂びたり。社寶として、義家の持念佛、古棟札、黒見氏、小笠原氏等書の大般若經、傳運慶作獅子假面、猿田彦假面、古驛路、古鏡、古劔等を藏せり。祭典は毎年四月十五日、八月十五日の兩日を以てこれを執行す。且つ、古來この社山及び柵境に於ては、嚴に殺生を禁じ、正月、八月に朔日より十五日を限りて鳥獸を喰ふことを禁せしが、今はその慣例を廢せ

り。又、北浦の女子は例祭に社參して、徹夜の祈願をなさざれば、決して他に嫁するを得ずと云ふ、奇風といふべし。後三年記曰、「武衡家衡、食物ことごとく盡きて、寛治五年十一月十五日の夜遂ひに落畢りぬ。城中の家ども皆な火をつけつ、煙の中におめき嘗ること地獄の如し。四方に亂れ蜘蛛の子を散らすに似たり。將軍のつはもの之を争ひてかけて城の下にて殺す。また城中へ亂れ入て殺す。逃るものは千が一人なり。武衡逃げて、城の中に池のありけるに飛入て、水に沈みて顔を濊に隠して居る。つはもの共入亂れてこれを求む。遂に見付けて、池より引出して生捕り、首をきらる。將軍これを見て、二年の愁眉けふ既に開けぬ、ただし猶恨むるところは家衡が首を見ざることをと云ふ。城中の宅ども一時に焼け滅びぬ。戦の場、城の中に、臥したる人馬麻を亂せるが如し。縣次任といふものあり。城中のもの、逃げ去らんとする道を知りて、遠くのきて道をかためたり。戦の場をにげて脱るゝもの皆な次任に得られぬ。その中に、家衡の怪げのまねをして逃げんとて出來たるを、次任これを見つけて打捕へ

つ。その首を斬つて將軍の前に持來れり。川田氏曰「過金澤村、層巒疊嶂、線互數里、茅舍一簇倚山脚、阿彌陀堂安置木像一軀、堂南涉厨河、左攀磴道、崩巖聳削、松杉刺天、史稱、寛治元年、清原武衡等作亂、據險金澤、源奥州發師環攻、賊衆死守、對壘連歲、遂克之、卽此地矣、絶頂八幡祠、簷宇莊嚴、佐竹氏重修、寄祀田、山西古柳、芦葦發生、奥州見飛雁亂行、知有伏所、稱大沼、沼東十餘町、深草沒澤、武術潛匿就擒所、稱蛭藻沼、然此種名目、大抵傳會史傳、世歷滄桑、孰是孰非、至其以厨河爲厨河二郎貞任古跡、則謬妄殊甚」。

六郷町 金澤本町より一里十九町を隔つ。もと六郷兵庫頭の城地にして、慶長七年以來佐竹義重及びその後裔の住地たり。明治二十九年の震災、この町の災害ことに甚しく、殆ど全市街を顛覆破壊せしめられたれど、今はや、舊觀に復せり。人口六千ばかり、見るべきものに、諏訪神社（老木多く納涼によし）、大桂寺、永泉寺、飯詰古城址等あり。この町より角館町に行くべく、里程凡そ五里二十町餘なり。

國道は、これより四折し、御物川の流再び路傍に近く、四倉、小巻の翠微のや、眼頭に迫らんとする頃、粉壁瓦葺の俄然として前面に開展せらるゝを見る。これ即ち秋田市以東の繁華區大曲町なり。而して、この間川目より國道を南に岐れて横手川を渡れば、その御物川に合流せんとする一角に角間川町あり。一書に曰「寛治元年九月、源義家自將數萬騎、攻金澤柵、敵設伏於甘部待之、義家望見雁行亂、曰是有伏也、縱兵搜索、獲麋之、謂衆曰、兵法言、烏亂者伏也、我不學則殆矣、自井氏曰、今六郷四根村、有甘部地」。

角間川町 横手町の西北四里、大曲町の南二里（水路）にあり。御物、横手兩川の會合に衝り、大山と共に重要な河港の一なり。且つ、地は、十文字驛より淺舞を経平鹿平野を横斷して、直ちに大曲に至るの衝に當り、行旅の客多し。また、上三郡秋田地方に運輸せる貨物は多くこの町より御物川の舟路を利用す。人口三千八百あり。

大曲町 飯詰の次驛を置く。横手驛へ十一哩、秋田驛へ三十二哩あり。人口七千二百、その規模は横手町に及ばずと雖も、富商多きを以て家屋皆な整頓し、仙北郡役所、警察署、區裁判所、秋田農業學校等あり。殊に町は御物、丸子兩川合流の三角點に當れるを以て、上三郡の百貨は皆な此所に輻湊し、重要な一河港をなす。米穀の集散

ことに盛なり。凡そ御物川の舟路二十三里中、この河港はことに良好なる停泊所を爲せりといふ。町に大川寺、虎王丸墓等あり。大川寺は、もと大溪寺と稱して眞言宗を奉ず。後、この地に遷して、禪宗を奉じ、總持寺輪番寺となせり。

農事試験場陸羽支場 大曲町の北隣花館村にあり。農商務省の所轄とす。各種の苗種を栽え、規模整備せり

角館街道は大曲町より北東に岐れ、四ッ倉、長野を経て、角館町に達す。里程五里道路平坦にして車行自由なり。

角館町 生保内、鰍瀬兩川の合湊點にあたり、平野の山嶺と相接する處とす。維新前は秋田侯支藩の置かれたる處なれど、市街寂寥にして、人屋また茅葺の屋根多し。されど人民質素にしてよく職業を營み、家々皆富めり。古城址の他に天寧寺、源太寺あり。この町より陸中橋場に至る道程十里十七町とす。また、阿仁地方に至る道路は此所より街道に岐れて北を指し、上檜木内を経て北秋田郡に入る。

鰍足瀧 角館町の東南白岩村にあり。

縣道は角館町より東北を指して生保内に至る。その間五里十八町、これより國界まで二里二十八町、仙石峠(六七〇米)を越え、一日路にして陸中盛岡市に達することを得べし。生保内は山間の村落にして、郵便局あり。また温泉あり。三千風の行脚文集に曰「陸奥出羽の境、遠保内峠、上下七里の峻坂、劔岩柔山、幽谷重瀧、卯月の末に五尺の深雪に峰わたりし、辛じて仙北角館に入る」。大窪時佛の詩に曰「山間一路屢蟠通、樹々霜如細雨中、挂起轡窺看不厭、水晶簾隔錦屏風」。前面峰遮途欲窮、向西向北曲還東、何論錦障七十里、半日山程霜葉中」。

田澤湖 生保内の西一里許りにあり。これに至るに二路あり。一は生保内より田澤を経て達するもの、他は卒田より瀧村に達するものとこれあり。湖、一に槎湖と稱す。その風光の明媚なる實に國內に冠たりと稱せらる。而して、地質學者或はこれを桶狀陷落地と稱し、或はマールと稱す。其形略圓形にして、四面の山の高さ概ね百五十米に過ぎず。湖水清冽にして、實に仙境なり。里人呼んで田子瀧といふ。東西二十六町、南北三十三町、周圍三里餘を有す。春夏の候、山櫻落花亂發して頗る美なり。雪の

白濱と稱する地は、石英の白砂人目を眩す。その玲瓏美麗なる既に尋常の風光にあら

ず。加ふるに、雲烟の集散、翠嵐の搖曳、宛として一幅の畫圖の如し。湖頭に浮木神社あり。賽日には賽客踵至す。

田澤湖邊の諸勝 生保内村より玉川の沿流を溯れば、

田 大先達川の上流に黒湯蟹の湯鶴の湯（浴舎數戸）等の温

澤 泉あり。田澤、玉川の諸村を過ぎて溪山愈々深く、女神嶽

の東麓を繞りて、川の東岸に鳩の湯あり。これより猶ほ

湖 三里、鹿角郡の國境に至れば、焼山の山容高く其の前に

聳え、鹿の湯温泉は其の半腹に湧出せり。震災豫防調査

會報告曰「玉川はその上流に溢黒温泉あり。泉中に含有

する毒素の爲め、大凡二十里餘の河床には一切の生物發

育を遂げず。また沿岸の水田にして玉川の水を灌溉せば、田螺の類に至るまで死滅し、



特に水田に雜草の堆肥を投ずるも腐敗せず。各村の收穫年々減少すといふ。また、小和瀬野、小野臺野等には多く馬匹を飼養せり。

焼山 鳩湯より北一里許りにして漸く登攀すべし。地學雜誌曰、焼山、活火山なり。山頂に登れば、森吉山の雲際に聳ゆるを見るべし。また東方には硫烟を發散する洞坑

諸所に散在す。山の頂には南北凡七八町、東西五六町の楕圓形をなせる噴火口あり。噴火口の内部には熱水の沼池あり。盛に硫氣と蒸氣とを放散す。而して採掘したる硫

黄は、鹿角郡花輪より舟楫の便によりて能代港に輸送するといふ。」

角館町より北二里にして西明寺村あり。更に二里にして楡木内あり。これより大角野峠を越え、凡十里にして阿仁銀山に達す。

光明寺 一に三七日山釋迦堂といふ。西明寺村にあり。弘長年中鎌倉の執權北條時頼の建立する所と稱す。相傳ふ、時頼其愛妾唐絲姫の死を悲み、一七日山釋迦堂を

北秋田郡釋迦内村に、二七日山光明寺を土崎納坂庄に建て、其迫福を修めしが、尙ほ

悼惜して措く能はず。此地に來りて三七日を吊ひ、この堂を建てたりと。



日三市鑛山 角館町より三里を隔て、中川村大字山谷川崎にあり。採掘面積八十萬坪、鑛石は方鉛鑛、黃銅鑛、閃亞鉛鑛、黃鐵鑛等にして、明治卅九年の産出高は、銀百九十二貫餘、銅九十四萬四千餘斤也といふ。猶、此所より大曲町に至る八里にして、荒川鑛山へは西二里餘を隔てたり。

鐵道、大曲驛の次を神宮寺驛となす。その間國道に、玉川橋と稱する長さ四百八十間の長橋あり。明治二十年の架設とす。また鐵道架橋の長さ二千四百呎に餘る。神宮寺町 人口約三千、玉川の西にあり。御物川を南にす。神宮寺嶽は南に街頭を歴して立てり。甕江隨筆紀程曰「神宮寺驛、貢川浴々、

隔水孤峯、祀六所明神、稱神嶽、北岸一帶、人烟聚簇、有八幡神社、殿宇古朴、神庫藏種種寶器、並不足信、祠典每歲上元祭神、爲逐禽曳綱戲」。

八幡神社 神宮寺町の中部にあり。一古祠に擧げらる。社域林木叢生し、社寶に唐綾八幡大菩薩の旗あり。

秋田種馬所 神宮寺町にあり、大日本地誌曰「秋田縣下には馬の飼養數六萬五千頭に達し、仙北郡の中部より西南部に互れる強首野、小和瀬野、小野臺野等の原野及び北秋田郡比内、阿仁附近等は尤も飼養盛なり。而して、その所産の馬は、多く輕捷なる乘馬用としてよりも、馬車用、輸送用等の骨額逞しく、力強きを用する輓馬、靚ちベルギー種に屬するものなり。」

刈和野に至れば御物川の平原は漸く盡きて、小丘陵の影多し。附近に、高寺山觀音、白絲瀧、唐松神社等の名勝あり。

高寺山觀音 刈和野の西數町にして、峯吉川村にあり。山内の風景よし。

白糸瀧 一に白瀧といふ。高さ二百五十尺、幅十八尺、瀑南に観音堂あり。

唐松神社 境(刈和野の次驛あり)村の西方にあり。源將軍義家の建立と傳説す。

この地は戊辰役の古戦場なり。酒井氏の「夜發峰吉川班軍」に曰「妙音山上月婆娑、營

外向南炬火過、千古傷心壯士淚、夜深四面楚歌多。」

荒川銅山 境の東方三里にあり。元祿年間の開掘にして、明治二十九年以後三菱會

社の借區となり。採掘面積百六十八萬坪、嗽澤大鑛を以て山の主脈となす。鑛石は主

として黄銅鑛なれどこれに黄鐵鑛を混ぶ。而して、製銅は主に大阪及び神戸へ輸送し、

去る明治三十九年の産銅高百三十九萬一千餘斤に及べりといふ。又、この友山に畑銀

山あり。採掘面積四十一萬坪、慶長年間の開坑にして、元祿年間には隆盛を極めしこ

とありと聞く。

龜山盛鑛山 河邊郡船岡村に屬し、荒川鑛山の北三里にしてその其支山たり。採掘

面積四十九萬坪、地質は第三紀の凝灰質泥板岩にして、黄銅鑛、方鉛鑛、白鉛鑛等を

採掘す。

和田驛は小丘陵の中にあり。これを過れば丘陵次第に開け、鹿島臺の高地より、一路直ちに西を指し、遠く

日本海の濤聲を聞く。秋田市は最早一指顧の間にあり。その間、上北多村の御所野に石器を發掘す。又南方

川添村は戊辰の激戦地なり。

牛島町 太平川を隔て、秋田市の南に接す。人口二千、河邊郡役所及び縣立農事試

験場、秋田測候所の所在地なり。村内に三光明神あり。また附近にメロリ觀音あり。

秋田市 今、民口三萬を包容す。實に兩羽第一の都會なり。御物川その北を流れ、

それに合する太平川、旭川の間一小丘を爲せる秋田城址あり。されば市街はこの周

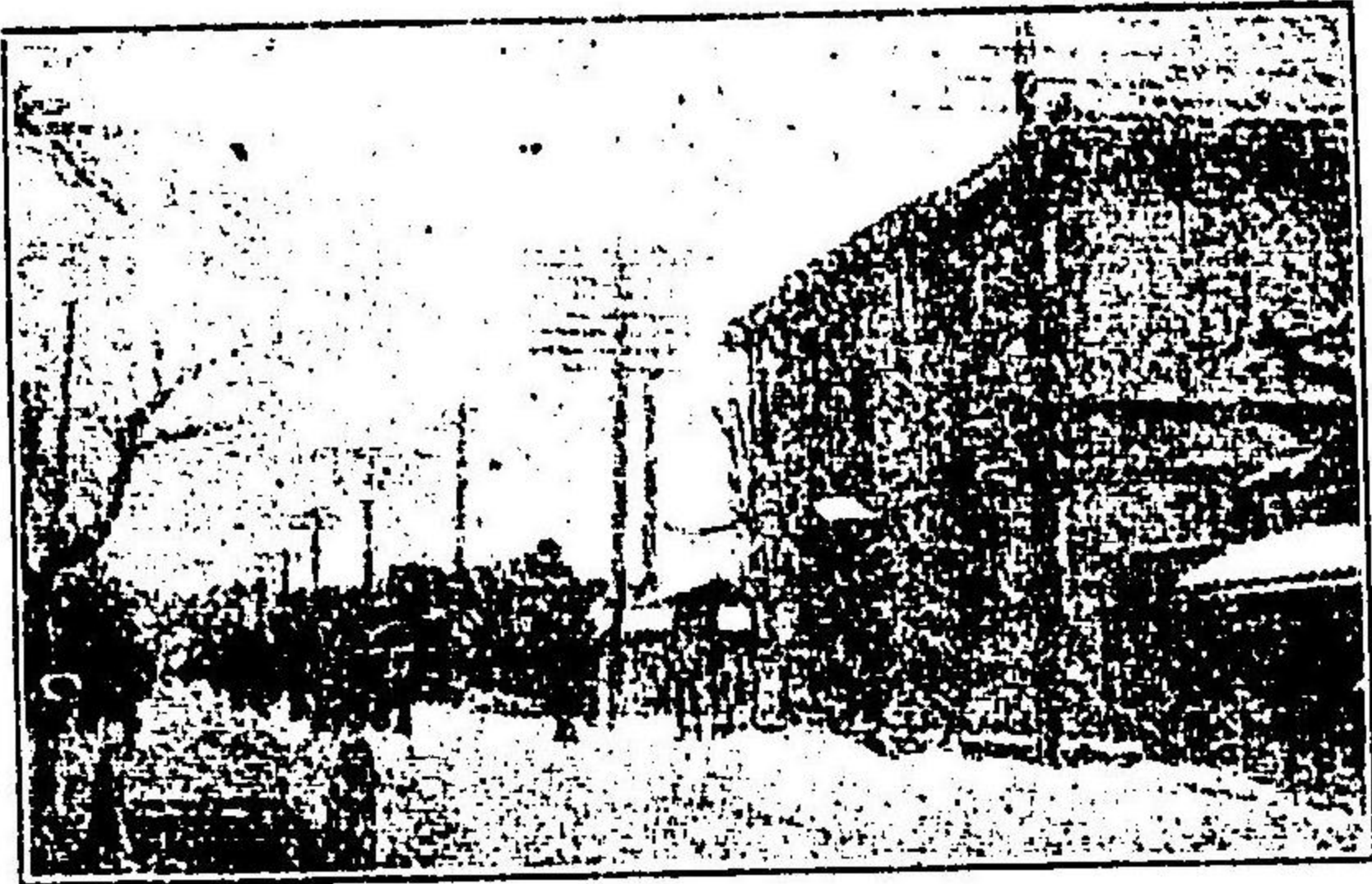
圍の麓にありと稱すべく、長野町、根小屋町、龜町等の高地より一步は一步より低く、

赤沼、長沼、桶下に至りて漸次卑濕地となり了る。而して、市街は旭川の東西に布置

し、内町外町の目を分つ。内町には官衙、兵營、學校、士族町等相連り、外町には百

貨を繋げる肆塵陸續として相隣次す。停車場は城址の東南赤湯長沼にあり、十七聯隊

の兵營と相臨む。市中の繁華區は、重に外町にありて、市場地たる通町實にこれが魁たり。次に、田中町、柳町通には、劇場、寄席、飲食店等軒を並べ、一種特色ある繁華を呈せり。官衙には秋田縣廳を始めとして、歩兵第十六旅團本部、歩兵第十七聯隊、秋田地方裁判所、區裁判所、憲兵屯所監獄署、稅務署、大林區署等あり。學校には師範學校、縣立秋田高等中學校、秋田中學校、秋田工業學校、市立工業徒弟學校、高等女學校等あり。また、圖書館、物産陳列所等の設置あり。新聞には秋田魁新聞、秋田公論、秋田日々新聞、秋田日報あり。物産には、畝織、八丈織、下駄表、林檎、銅器、鑄物、菓子等を産す。秋田織は畝織と稱し、黃八丈と共に現下の物産なり。殊に、秋田黃八丈の名は天下に高く、その染色の不褪と價



格の低廉なるとは、他に其の比を見ず。蓋しその染色の原料として用ゐらるゝ玫瑰根は同縣特有の産にして、糸質を堅牢ならしめ、重量を増さしむる上に於て一種の特色を備へたればなるべし。市の設立にかゝれる秋田機業傳習所は現今民業に歸したれども、猶、盛んに良好なる製品を出し、日に進歩の域に赴きつゝあり。更に秋田の特色を言はんか、市は東北諸都會中、最も整正にして且つ繁華なり。仙臺の如き、青森の如き、福島ふくしまの如き、一種厭ふべき俗氣ありて、久しく滞在せん心地起らざれど、この地と弘前ひろさきとは數日を滯留せん心地起るほどなり。蓋し、人氣好きが爲めなるべし。此に、例に依りて市内の元標より各地に抵る里程を記さん。

東京市	一百五十里一町	能代港町	十六里十二町	牛島町	二十一町
京都市	二百二十二里三町	湯澤町	二十四里十八町	角館町	十五里八町
酒田町	五十六里十一町	大曲町	十四里	矢島町	十六里二十二町
盛岡市	三十五里三十町	本庄町	十里二十五町	龜田町	七里二十四町
青森市	五十三里六町	横手町	十九里二十五町	花輪町	三十六里二十九町
大館町	三十里十三町	土崎港町	一里二十七町		

の靈を祀り、清洒たる構造の中一種言ふべからざる壯嚴の趣を存し、今は縣社に屬せ



り。其の傍に招魂社あり。國事に盡瘁せしものの靈を祀る。而してその本丸の周圍は實に公園設備の粹を集めたるものと稱すべく、茶樓旗亭また其間に散在して、以て遊客の便に供せり。其西北に面したる一角より望めば、秋田市の街の數千家は唯々是れパノラマを睹るが如く、白公聖粉壁の夕陽に輝ける、寺院、會堂の空中に聳えたる、宛然東京愛宕山の眺望と髣髴たり。ことに、御物川の流は市の外廓を繞りて溶々として遠く、一帶の砂丘を隔て、日本海の怒濤の響の地を撼して來れる孰れか登臨の客の心を惹くの料たらざるべき。

八幡神社 もと、城内にありしを、今は東根小屋町に移せり。昔は藩主これを尊崇

羽後國

せしより、祠宇祭事共に頗る見るに足るものありしが、今は全く荒廢して、喪者また少し。

秋田縣廳 秋田市長町に屬す。羽後一市八郡、陸中一郡を管せり。人口約七十八萬といふ。市役所また同町に屬せり。

第十旅團本部 秋田聯隊區司令部、衛戍病院と共に舊城にあり。

秋田地方裁判所 秋田市廣小路にあり。宮城控訴院の管下に屬す。

第十七聯隊 秋田停車場を相臨み、長野町にあり。

誓願寺 秋田外町の寺町に佛利多し。誓願寺即ちその一なり。慶長十年佐竹義宣これを創建し、淨土宗を奉ず。什寶に慈覺大師作脱衣鬼の像、琢磨法眼筆彌陀如來等あり。

光明寺 同じく寺町にあり。淨土宗に屬す。弘長二年北條時頼の開創と傳へ、時頼の寄進と稱する辨才天像、唐織の袈裟等あり。

平田篤胤墓 國儒篤胤の墓は市を距る東北十町の手形山にあり。また、手形村の蛇野に關信寺あり。寺内に匹田氏父子の墓を置く。

天德寺 旭川村にありて、秋田停車場より五六町を隔てたるに過ぎず。曹洞宗にして、佐竹家累代の菩提寺たり。開山は僧伊蓬、本尊は聖觀音なり。昔は藩内三百餘所の録所にして、威を全國に揮ひ、本堂、書院、庫裡、山門、總門等あり。寺室として

弘法大師手刻の天女像、光明皇后筆紺紙金泥法華經八軸、弘法大師筆六字名號、土佐光位筆菅右大臣像、承陽大御書、趙子昂筆鶴畫、一休禪師筆達磨、心越禪師書、飛殿司筆十六羅漢等を藏せり。

泉村の油田 旭川村字泉の五倉山より石油を出せしも近時振はず。濁川村はその北にして秋田市より一里を隔つ。此地よりも石油を出したりしがこれ又近年振はずといへり。

龜像山補陀寺 秋田市の北一里ばかり、旭川村大字山内の松原といふ地にあり。曹

